

526
8

地震大火
大東本災上美記
国立国会図書館



始



IF 28-4

526

8

地震大火
大東京炎上實記

關東子記



526-8



大
火

大
東
京
炎
土
實
情

大
火

文
内

詔 勅

朕神聖ナル祖宗ノ洪範ヲ紹キ光輝アル國史ノ成跡ニ鑑ミ皇考中興ノ宏謨ヲ繼承シ
 テ肯テ愆ヲサラムコトヲ庶幾シ夙夜兢業トシテ治ヲ圖リ幸ニ祖宗ノ神佑ト國民ノ
 協力トニ賴リ世界空前ノ大戰ニ處シ尙克ク小康ヲ保ツヲ得タリ爰ゾ圖ラム九月一
 日ノ激震ハ事咄嗟ニ起リ其ノ震動極メテ峻烈ニシテ家屋ノ潰倒男女ノ慘死幾萬ナ
 ルヲ知ラス剩ヘ火災四方ニ起リテ炎燄天ニ冲シ京濱ソノ他ノ市邑一夜ニシテ焦土
 ト化ス此ノ間交通機關杜絶シ爲メニ流言蜚語盛ニ傳ハリ人心恟々トシテ倍々其ノ
 慘害ヲ大ナラシム之ヲ安政當時ノ震災ニ較フレハ寧ロ凄慘ナルヲ想知セシム
 朕深ク自ラ戒慎シテ己マサルモ惟フニ天災地變ハ人力ヲ以テ豫防シ難ク只速カニ
 人事ヲ盡シテ民心ヲ安定スルノ一途アルノミ凡ソ非常ノ秋ニ際シテハ非常ノ果斷
 ナカルヘカラス若シ夫レ平時ノ條規ニ膠柱シテ活用スルコトヲ悟ラス緩急其ノ宜
 ヲ失シテ前後ヲ誤リ或ハ個人若クハ一會社ノ利益保障ノ爲ニ多衆災民ノ安固ヲ脅
 カスカ如キコトアラハ人心動搖シテ底止スル處ヲ知ラス朕深ク之ヲ憂惕シ既ニ在
 朝有司ニ命シ臨機救濟ノ道ヲ講セシメ先ツ焦眉ノ急ヲ拯フテ以テ惠撫慈養ノ實ヲ
 舉ケント欲ス

抑モ東京ハ帝國ノ首都ニシテ政治經濟ノ樞軸トナリ國民文化ノ源泉トナリテ民衆一般ノ瞻仰スル所ナリ一朝不慮ノ災害ニ罹リテ今ヤ其舊形ヲ留メスト雖依然トシテ我國都タルノ位置ヲ失ハス是ヲ以テ其ノ善後策ハ獨リ舊態ヲ回復スルニ止マラス進ンテ將來ノ發展ヲ圖リ以テ巷衢ノ面目ヲ新ニセサルヘカラス惟フニ我忠臣ナル國民ハ義勇奉公朕ト共ニ其ノ慶ニ頼ラムコトヲ切望スヘシ之ヲ慮リテ朕ハ宰臣ニ命シ速ニ特殊ノ機關ヲ設定シテ帝都復興ノ事ヲ審議調査セシメ其ノ成案ハ或ハ之ヲ至高顧問ノ府ニ諮ヒ或ハ之ヲ立法ノ府ニ謀リ籌畫經營萬違算ナキヲ期セムトスニ在朝有司能ク朕カ心ヲ心トシ迅ニ災民救護ニ從事シ嚴ニ流言ヲ禁遏シ民心ヲ安定シ一般國民亦能ク政府ノ施設ヲ翼ケテ奉公ノ誠悃ヲ致シ以テ興國ノ基ヲ固ムヘシ朕萬古無比ノ天殃ニ際會シテ郵民ノ心愈々切ニ寢食爲ニ安カラス爾臣民其レ克ク朕カ意ヲ體セヨ

御名 御璽

攝政 名

大正十二年九月十二日

各大臣副署

序

天道人を殺すこと、一夜にして十餘萬人、然も之を我が帝都に行ふ、人間社會に於ける科學の權威も、文化の誇りも、大自然の前に一蹴の値もない。

明朝人事誰料得、と蘇東坡も喝破してゐるが、何人か、斯かるミゼラブルを現實に於て見んとは、自惚れの強い人類が夢にだに豫期し得やう。

初秋三更の夜氣、水の如く机上に流れ、窓外頻りにコホロギ鳴くの時、此の大慘禍の實況に鉛筆を走らしてあれば、火葬の臭煙天に満ちて、鬼氣人に迫るの感あり。爰に於て、遺教經の一句

會ふ者は必ず離る可し、會ふて而も離れざる事、終に得可からず……。

と瞑目三唱し、聊か以て十餘萬の亡靈を慰むるのであつた。

大正十二年九月中旬

於下尾久町假住

著者 識

附記

未曾有の大震の爲め、市内印刷所は殆ど活字の倒落を免れず、加ふるに類焼の厄に遇ひたる者、其九割を越ゆる状態にて、この大混乱の時に當り、急速の印刷も亦易き業にあらず、爲に漢字不足の箇所は止を得ずして片假名を用ゆ、其他種々印刷上の不備あるも、乞ふ、讀者之を恕し給はん事を。

天保入道... 大正十一年九月...

目次

- ◎詔勅.....(巻頭)
- ◎大慘禍來.....(一)
- ◎一大阿修羅場.....(二)
- ◎焦熱地獄の第一夜.....(三)
- ◎避難と野宿.....(五)
- ◎人〇動.....(八)
- ◎混沌生活.....(九)
- ◎物資欠乏.....(一〇)
- ◎交通難.....(一一)
- ◎糧食大輸送開始.....(一三)
- ◎地方及國外の救援.....(一五)
- ◎被害の全般.....(一六)

◎各區の被害……………(二二)

○日本橋區 ○淺草區 ○下谷區 ○神田區 ○本郷區 ○小石川區

○麴町區 ○京橋區 ○芝區 ○赤阪區 ○四谷區 ○麻布區

○牛込區 ○本所區 ○深川區

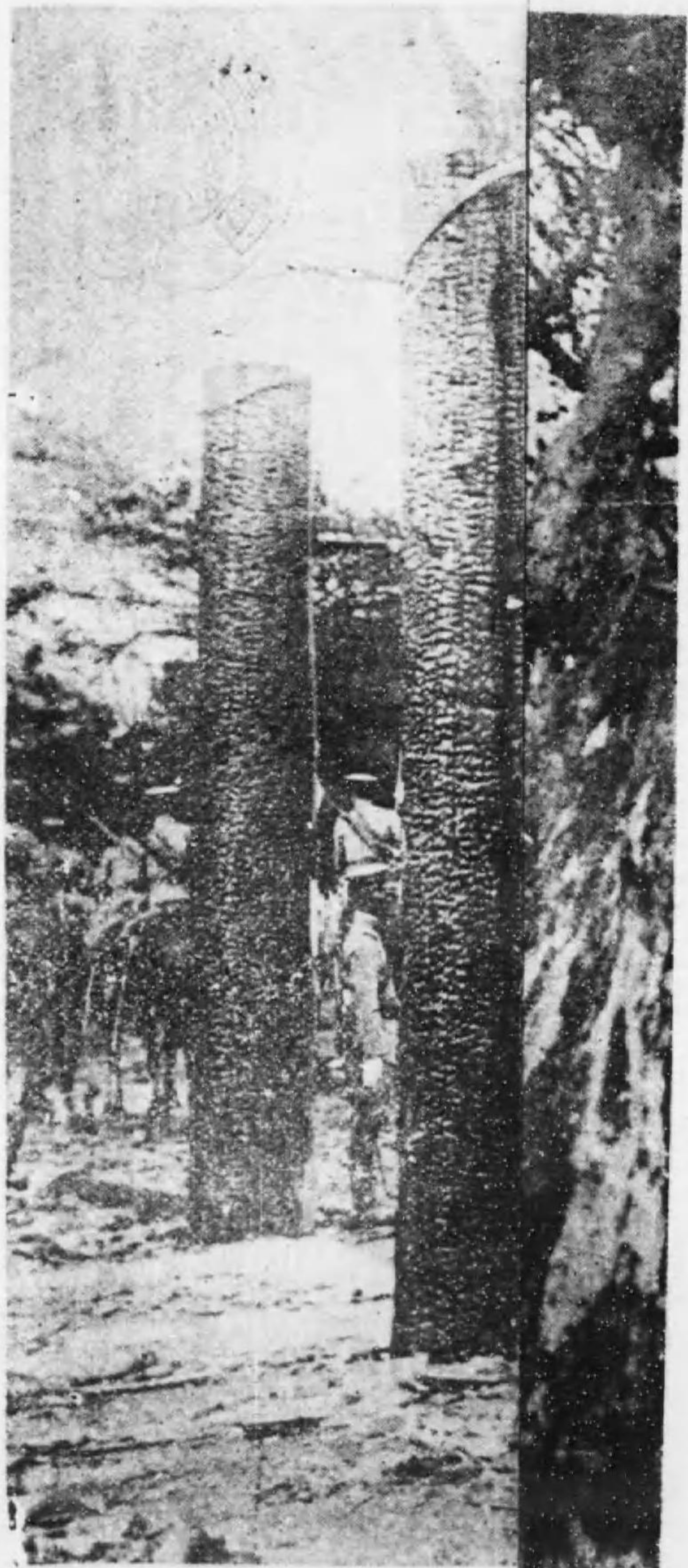
◎近縣及郡部の被害狀況……………(四六)

◎はなしのたね……………(五〇)

●からだの壁塗り ●焼け毛の馬 ●炎天の甘露 ●渴ける者はベルでも飲む ●
珍妙な挨拶 ●やわらかい腰掛 ●死ガイの下積み ●禽獸とザゴ寝 ●お守りよ
りおみくじ ●私は生きてゐるんでせうか ●何か食べさせて預戴な ●行水濠
とパリカン床 ●慰問の先着と暴利の筆頭 ●惨中の惨事 ●身代り佛 ●汽車の
曲乗り ●女形握飯に泣く ●黄金王の死 ●老元帥の後鉢巻 ●公府巡査に借金
す ●心頭を滅却すれば火も亦涼し ●伯父に持たたい人 ●俄か盲目

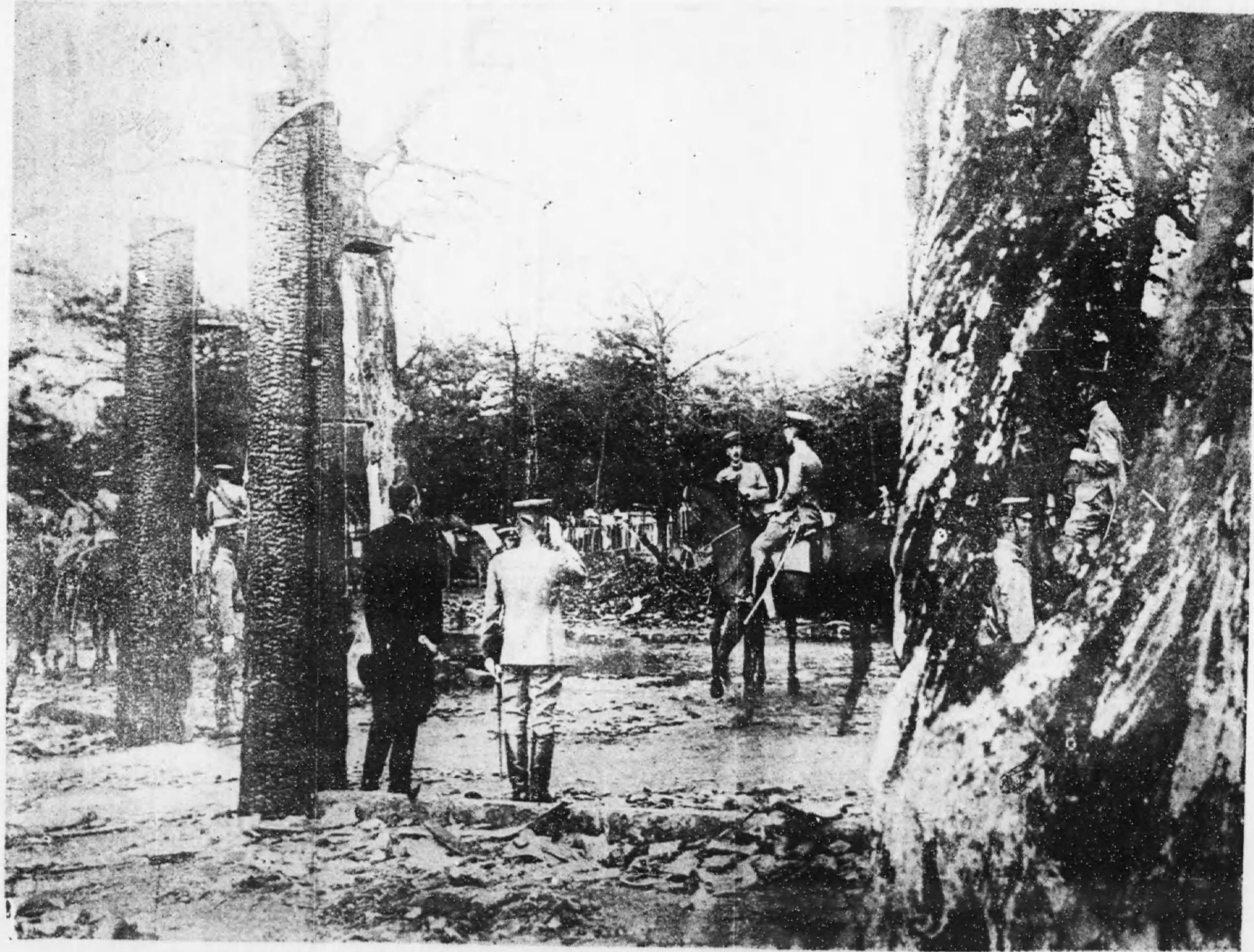
◎後の聞き書……………(附録)

目次終



攝政宮殿下焼跡御巡視に上野を御出馬

將大田福官令司嚴戒はる央中



攝政宮殿下焼跡御巡視に上野を御出馬

將大田福官令司嚴戒はるべ並。長市京東田永は姿クツロフるせ立直に傍の樹燒。姿雄御の下殿が上馬御の央中

目次終

◎後の聞き書……………
 曲乗り●女形握飯に泣く●黄金王の死●老元帥の後鉢巻●公卿巡査に借金
 す●心頭を滅却すれば火も亦涼し●伯父に持ちたい人●俄か盲目

(附録)

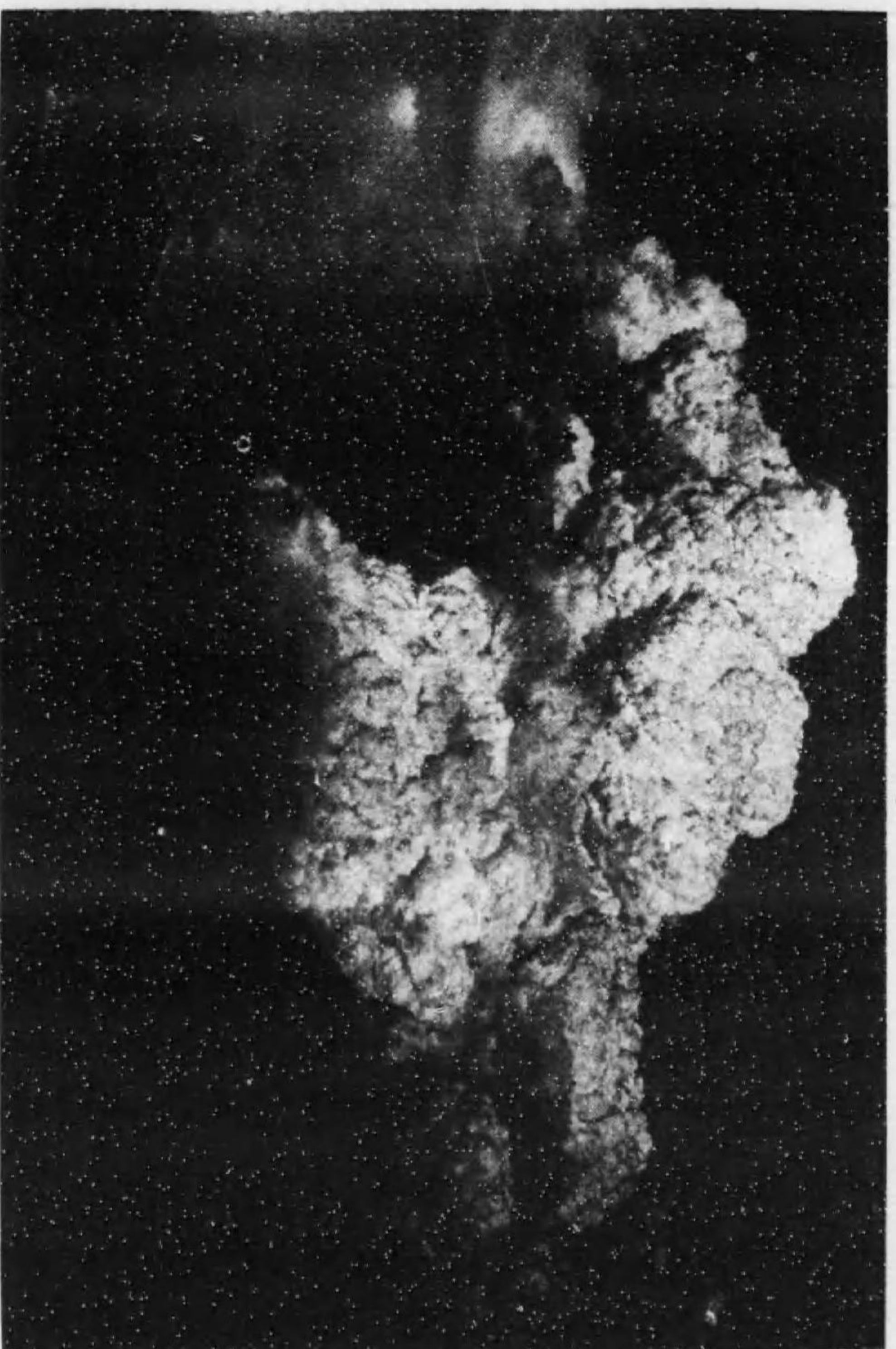
大震災の二日目に成立した山本内閣



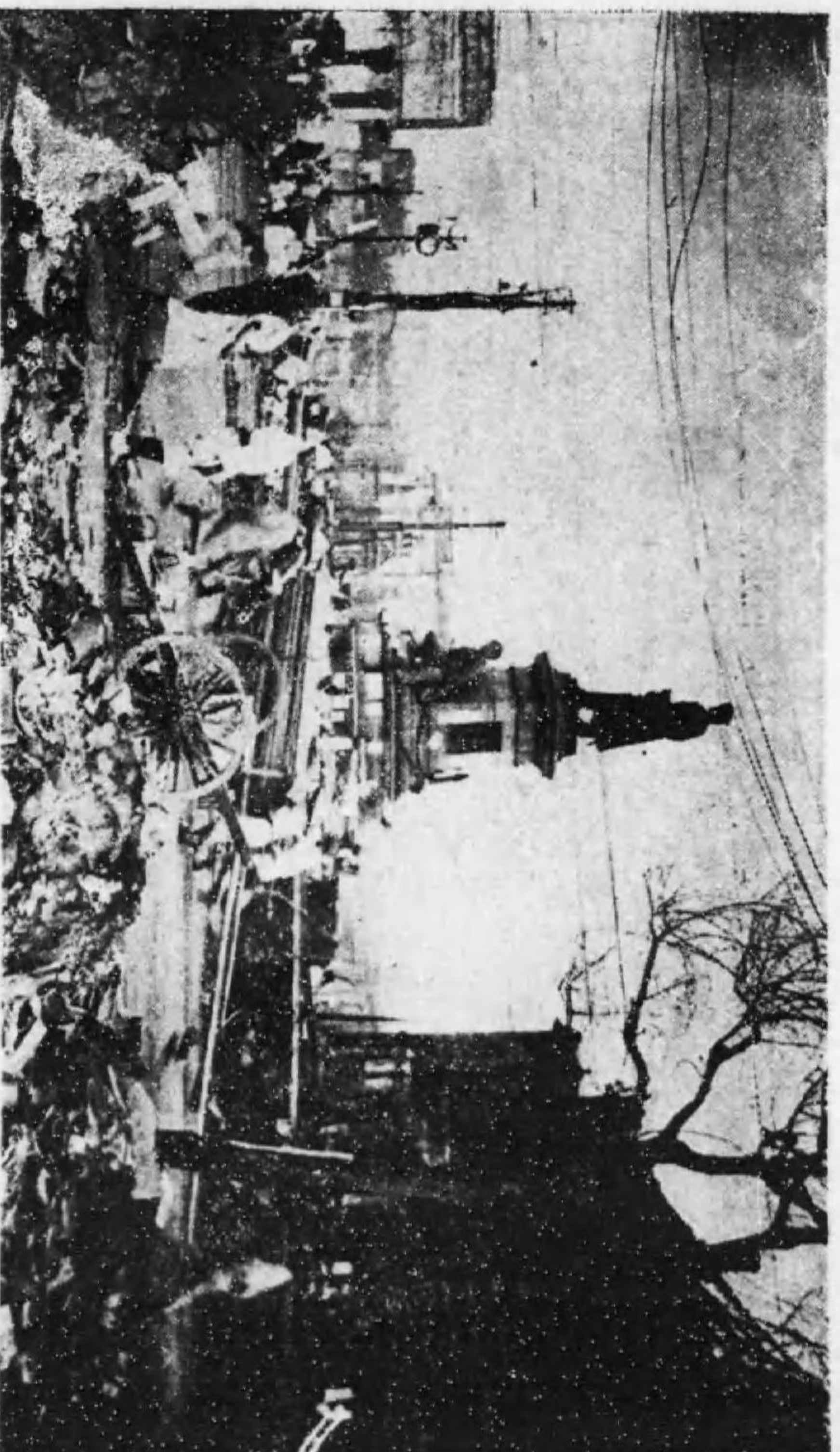
氏一義中田相陸(段中) 氏郎次健田相農 氏吉彦院集伊相外 氏次一内之山相鐵 氏郎一騏沼平相法(段上)りよ右てつ向
 氏彪部財相海 氏平新藤後相内 氏助之準上井相藏 氏郎次敬野岡相文(段下)氏毅養犬相遞 氏衛兵權本山相首

(圖全域區災罹)

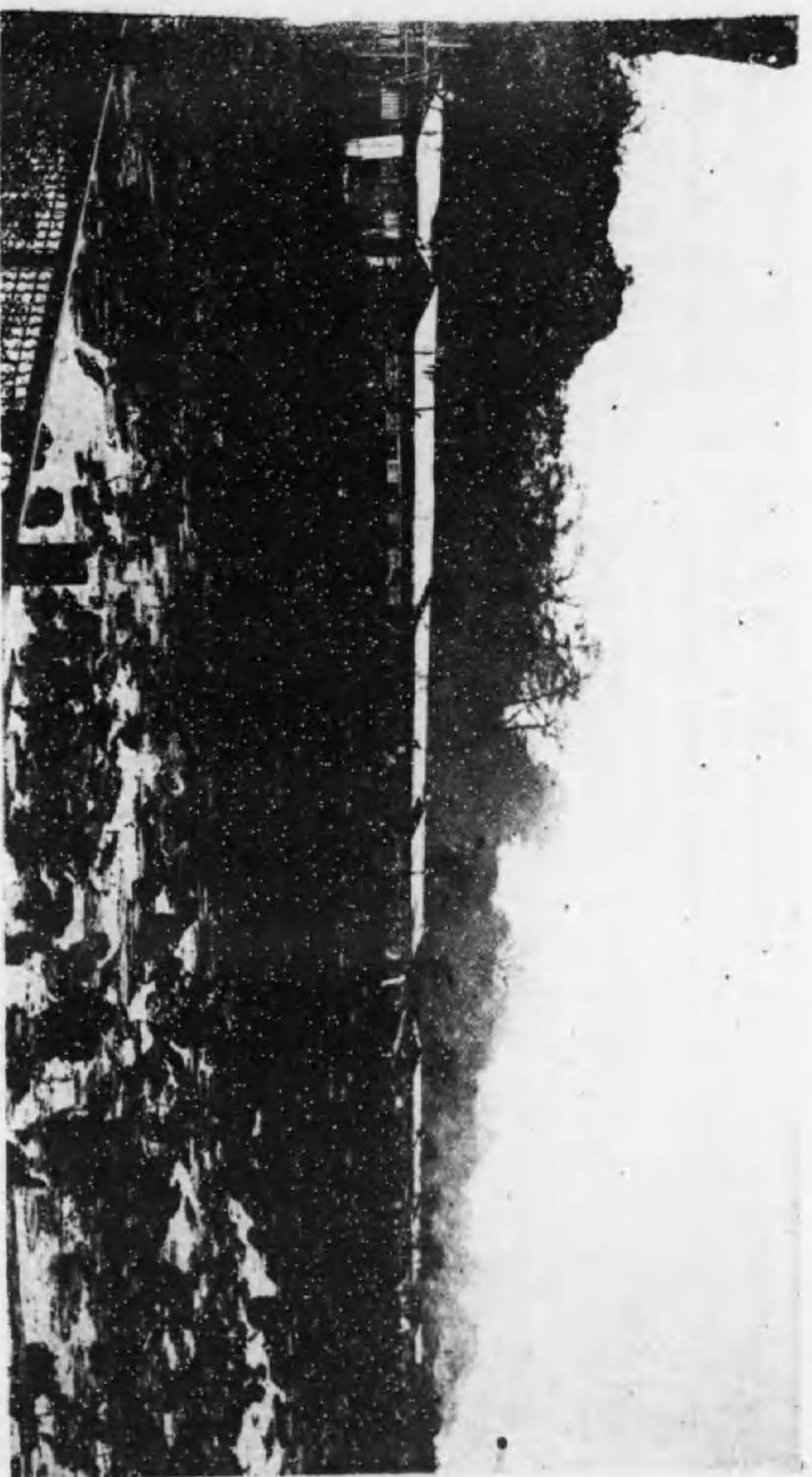




雲妖しれは現に那刹の震地



像銅の佐中瀬廣と近附町田須



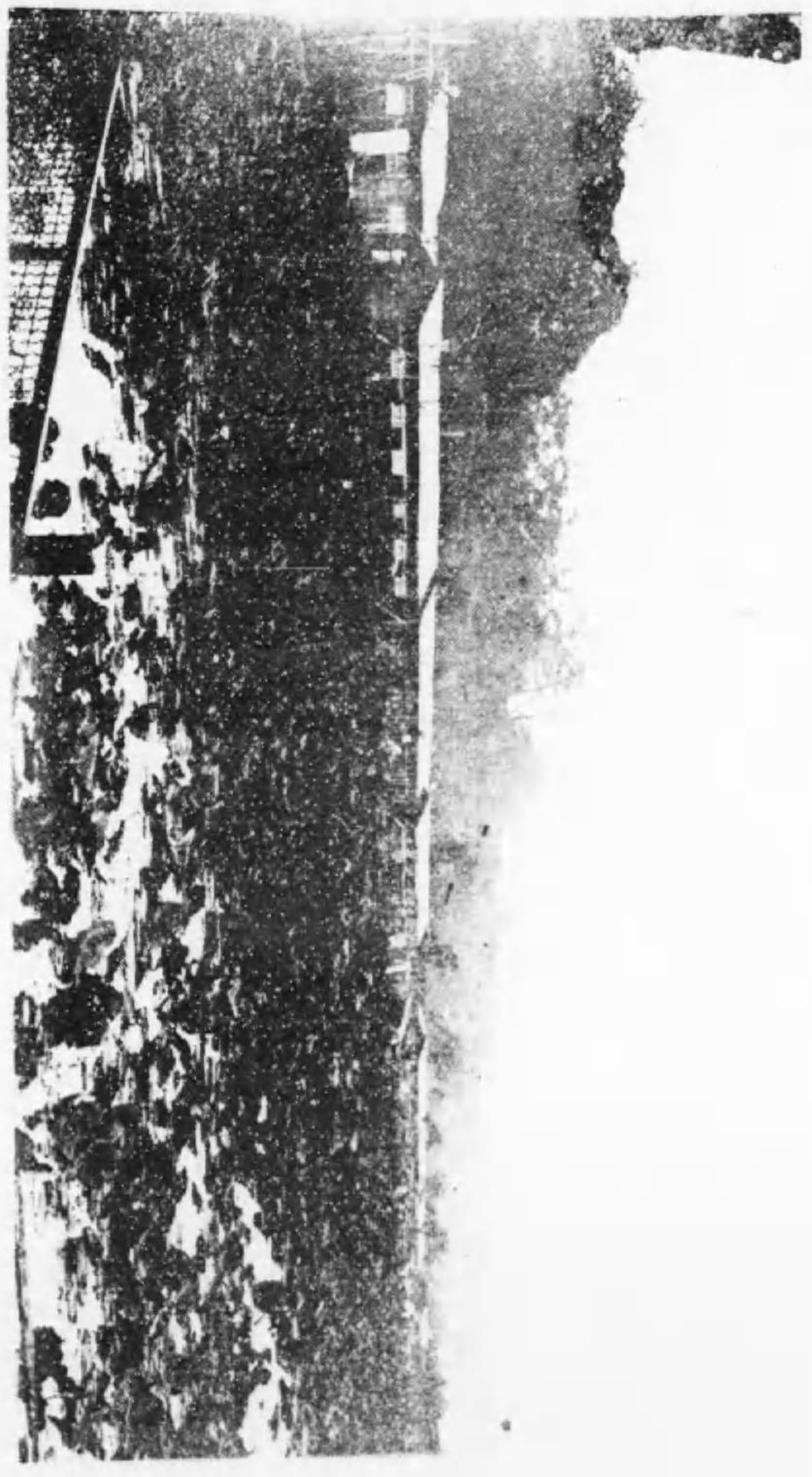
クツラバるけ於に畔池忍不野上



状慘の内構驛野上

野上ノ驛ノ内ノ慘状

露光量違いの為重複撮影



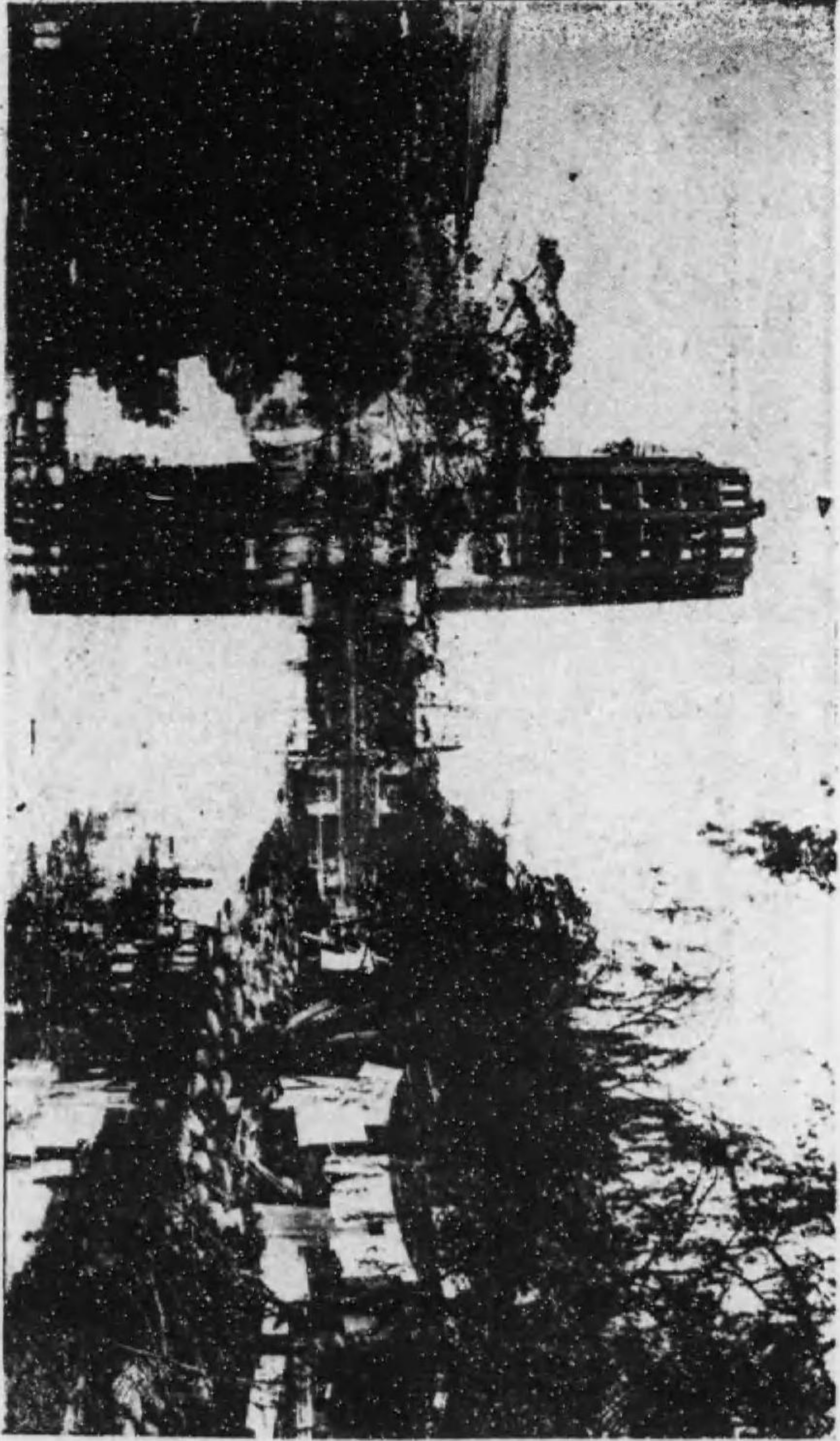
クララなるけ於に畔池忍不野上



表慘の内構驛野上



り 通 世 見 仲 と 門 雷 草 淺

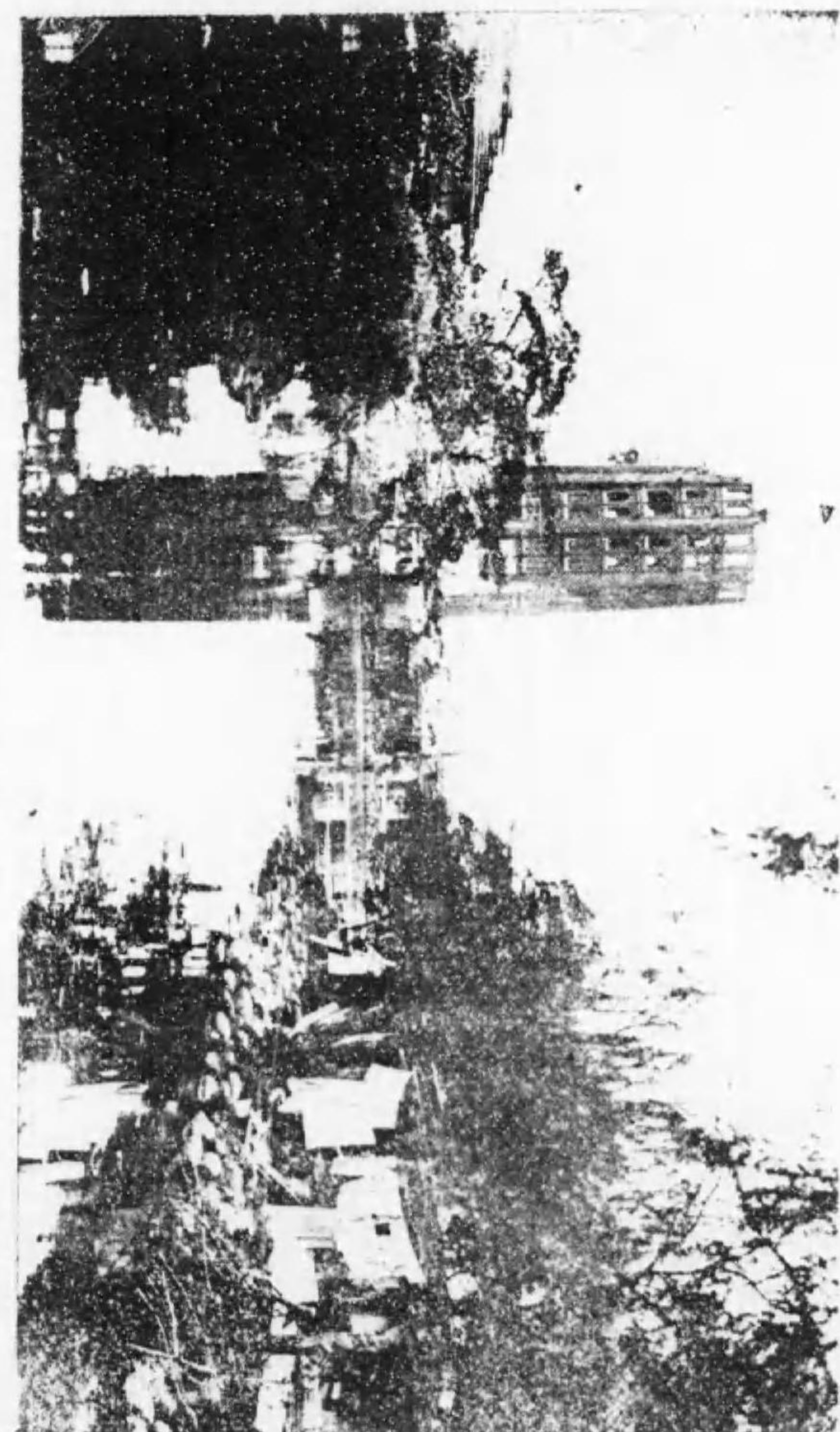


階 二 十 の 潰 崩 る た 見 り よ 池 の 園 公

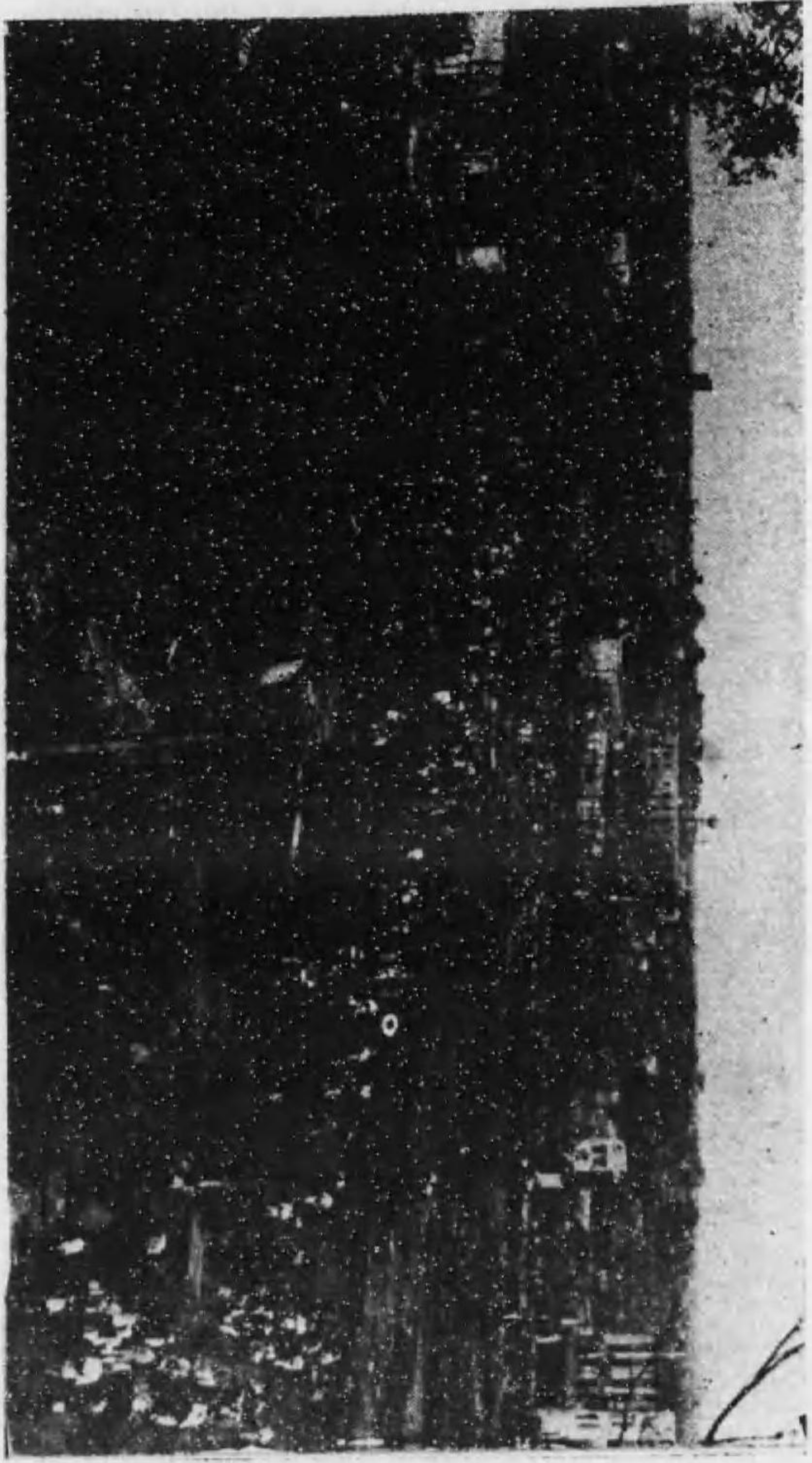
露光量違いの為重複撮影



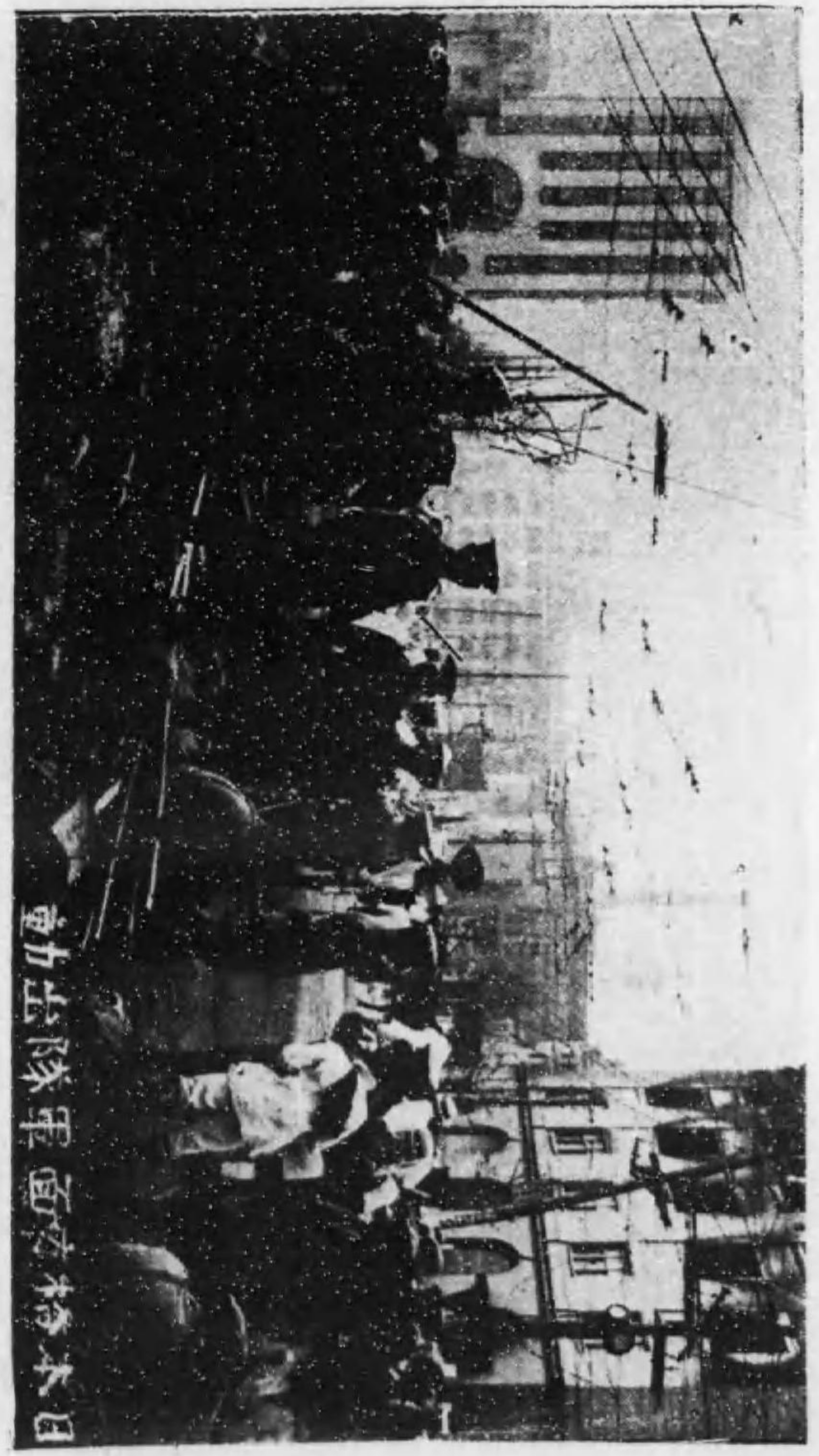
り通世見仲と門雷草後



階二十の遺崩るた見りと並の園公



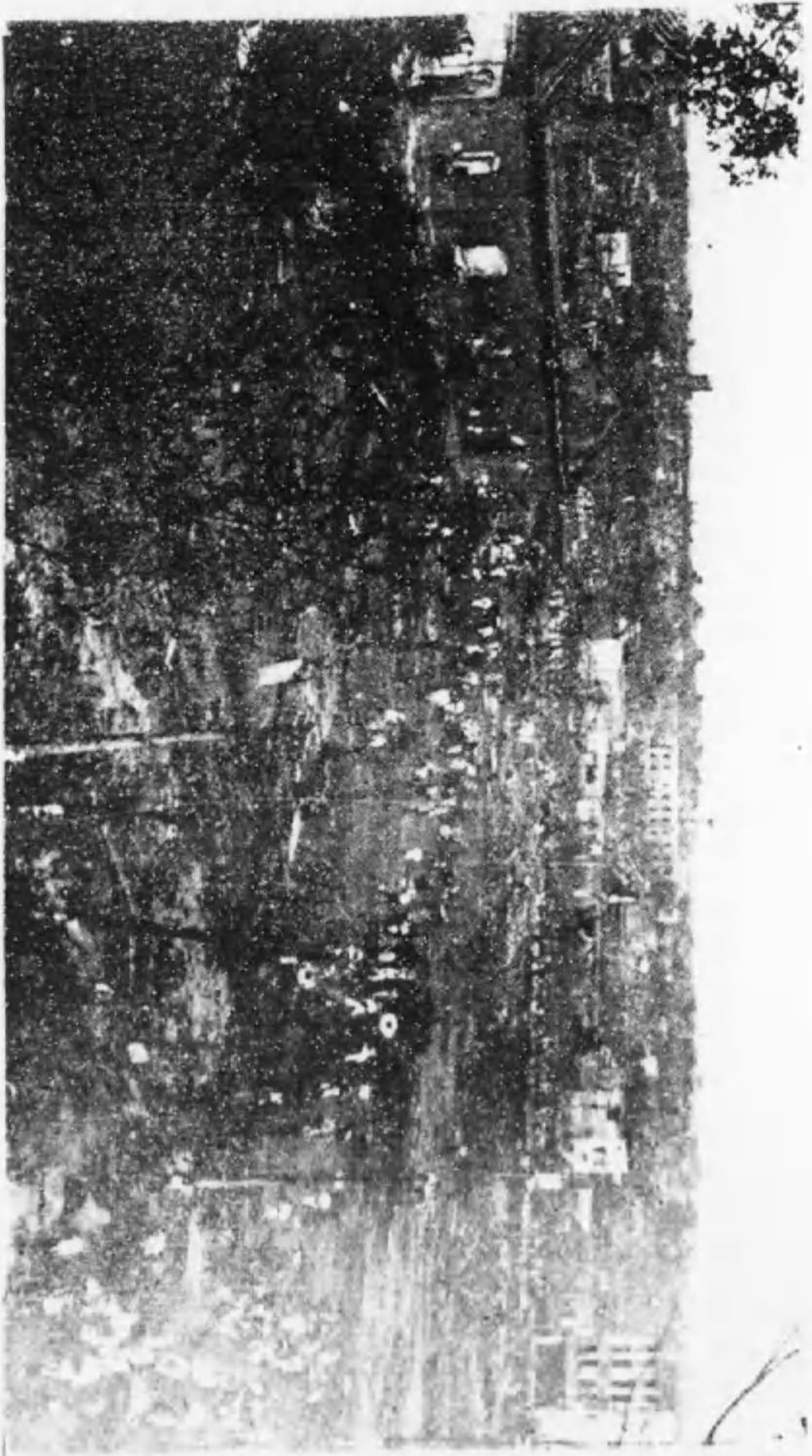
驛野上と帯一近附下山野上



動出の隊軍るけ於に面方橋本日

動出隊軍面方橋本日

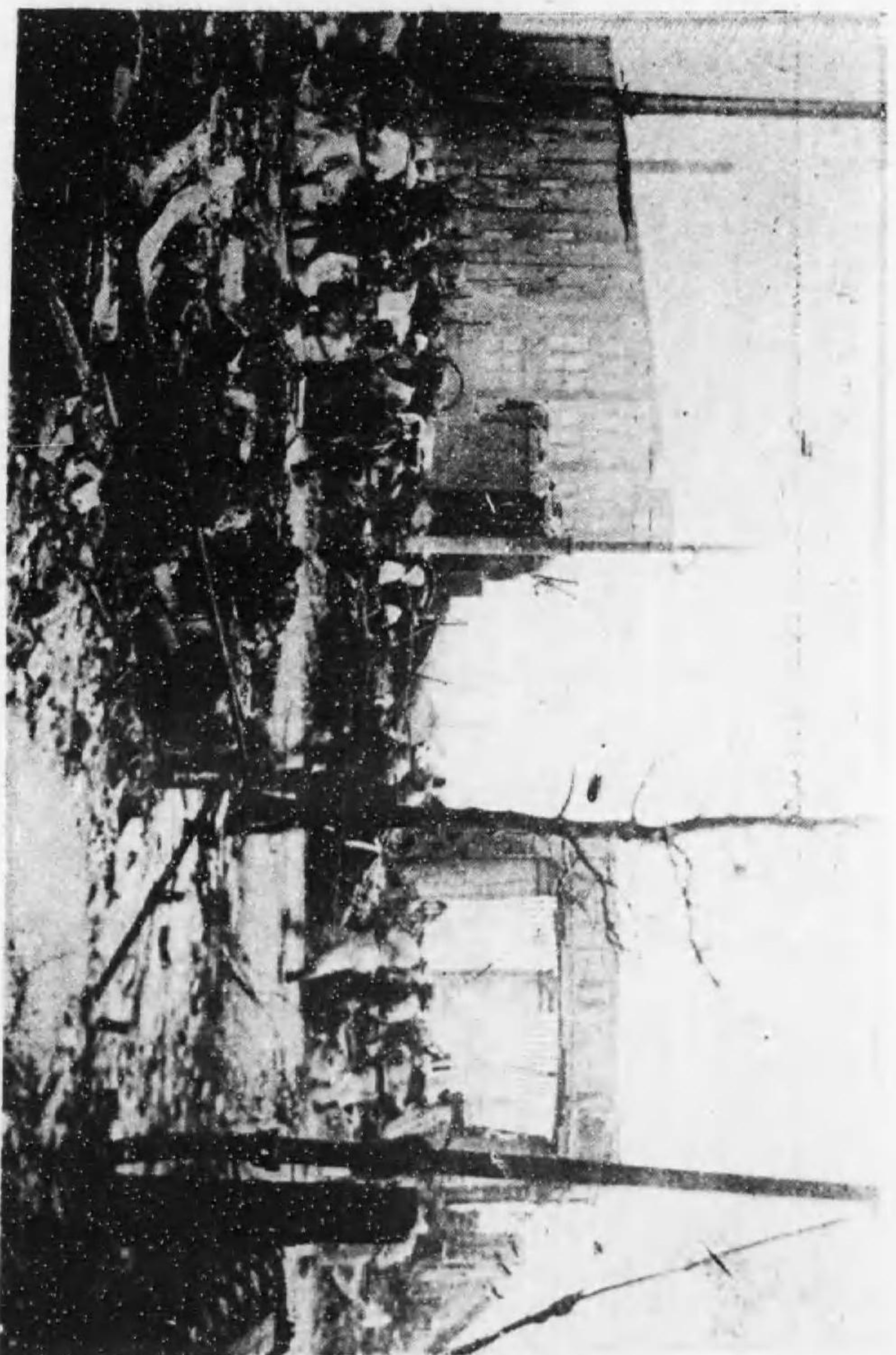
露光量違いの為重複撮影



驛野上と帯一近閉下山野上



動出の隊軍るけ於に面方橋本日



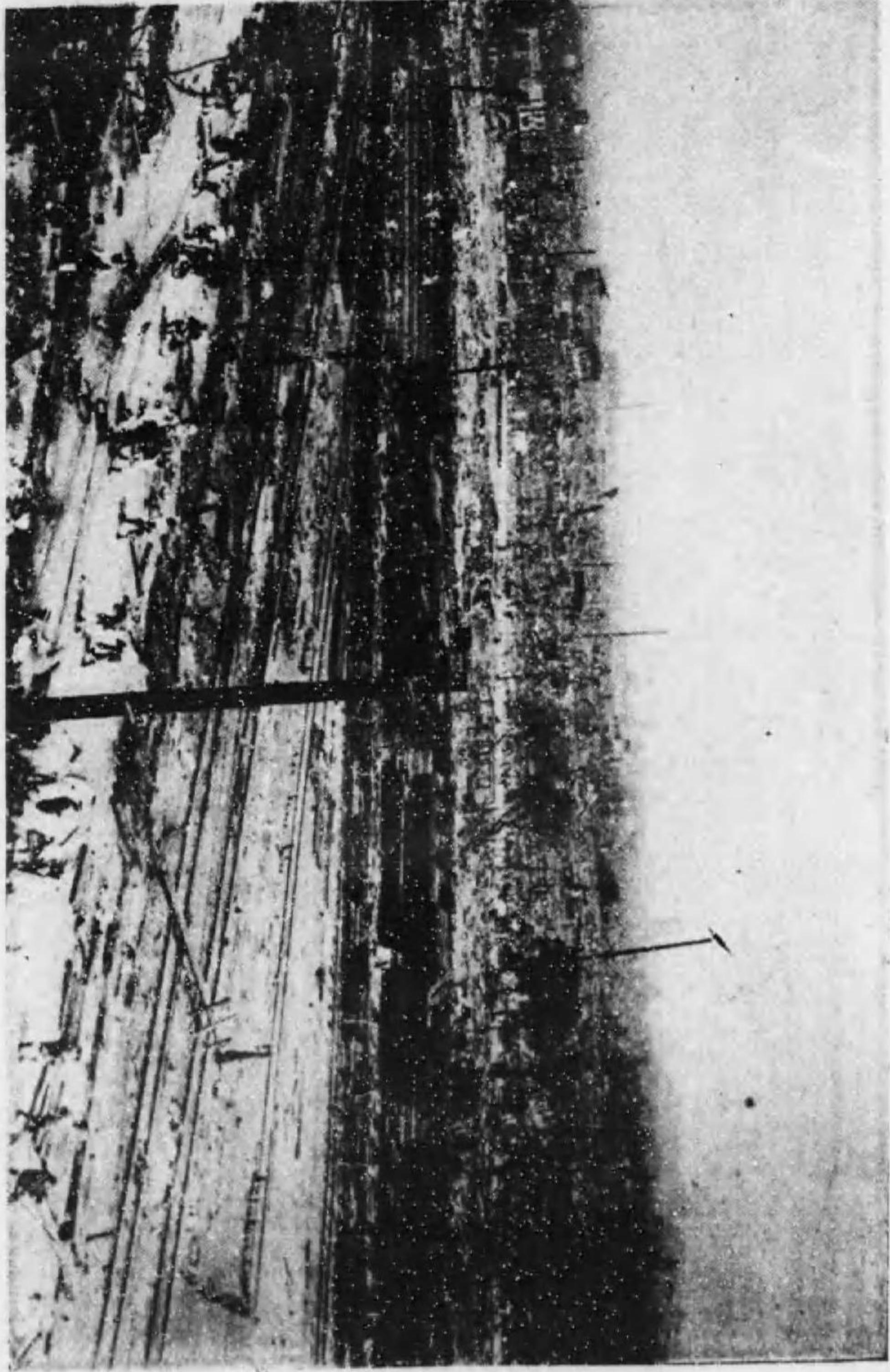
跡焼店服呉屋坂松路小廣野上



民難避の内門先場馬



焼 炎 の 近 附 邊 川 戸 江

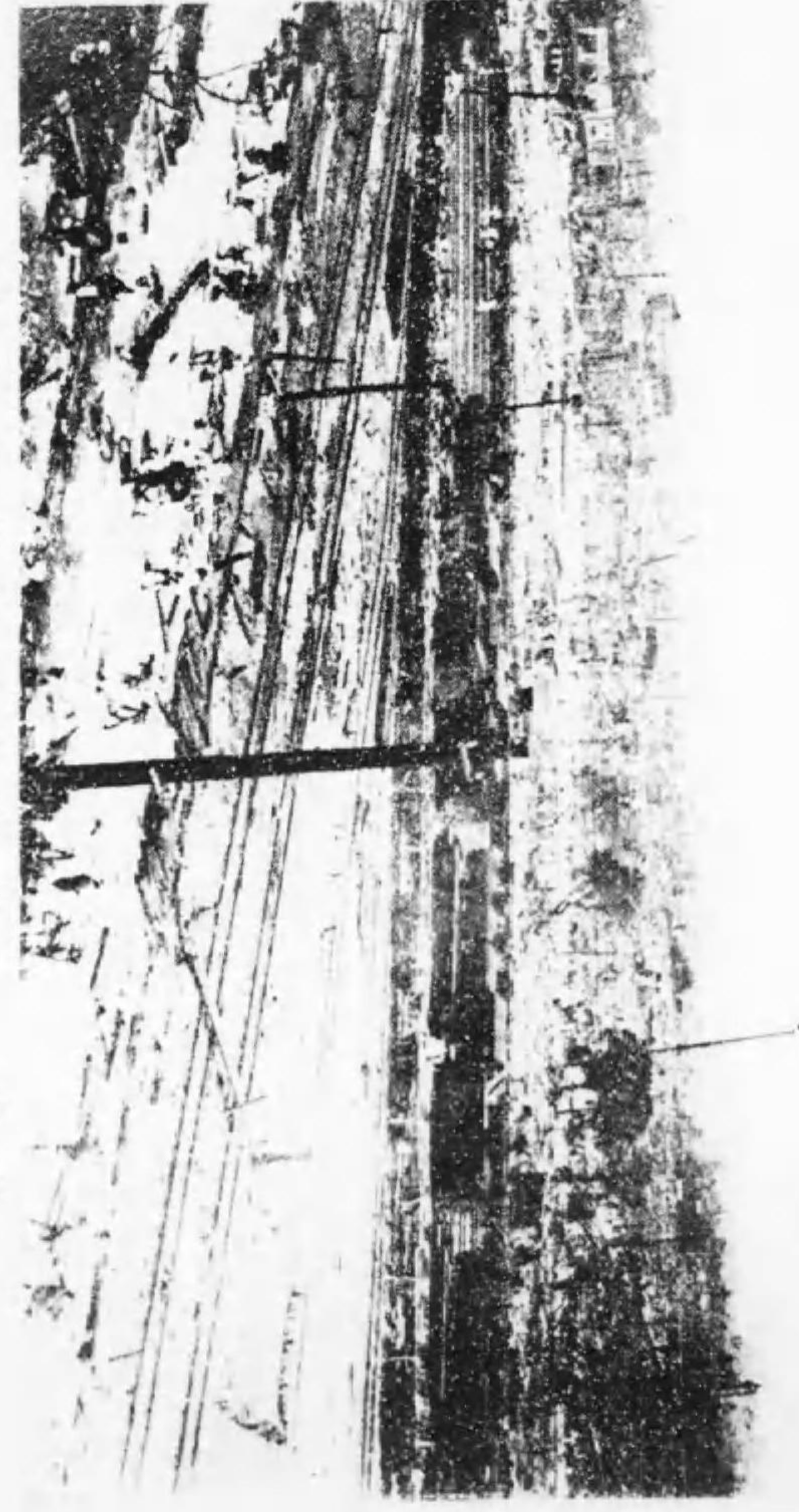


(一) む 望 を 面 方 草 淺 り よ 谷 下

露光量違いの為重複撮影

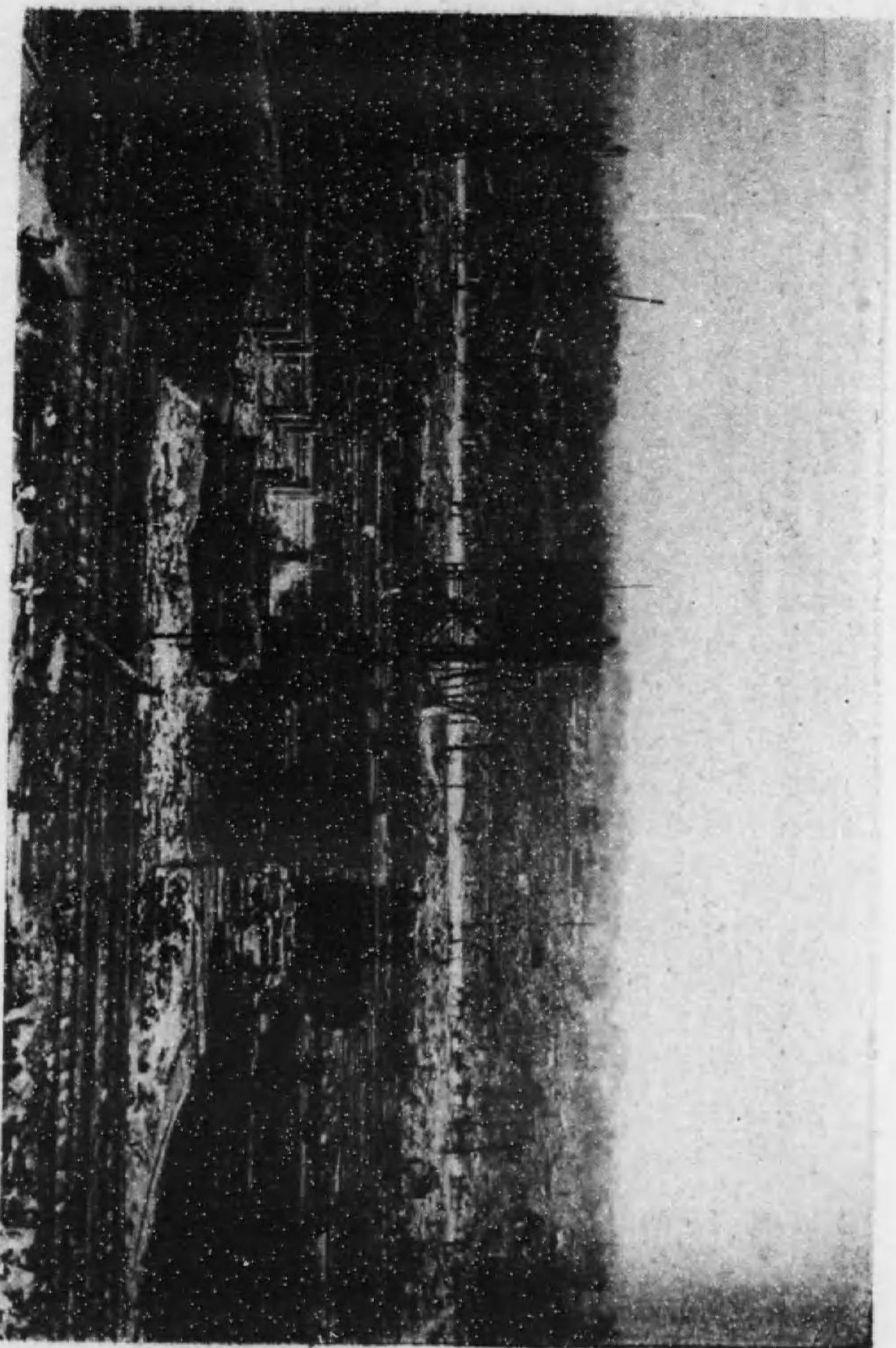


燒谷の近附邊川戸江

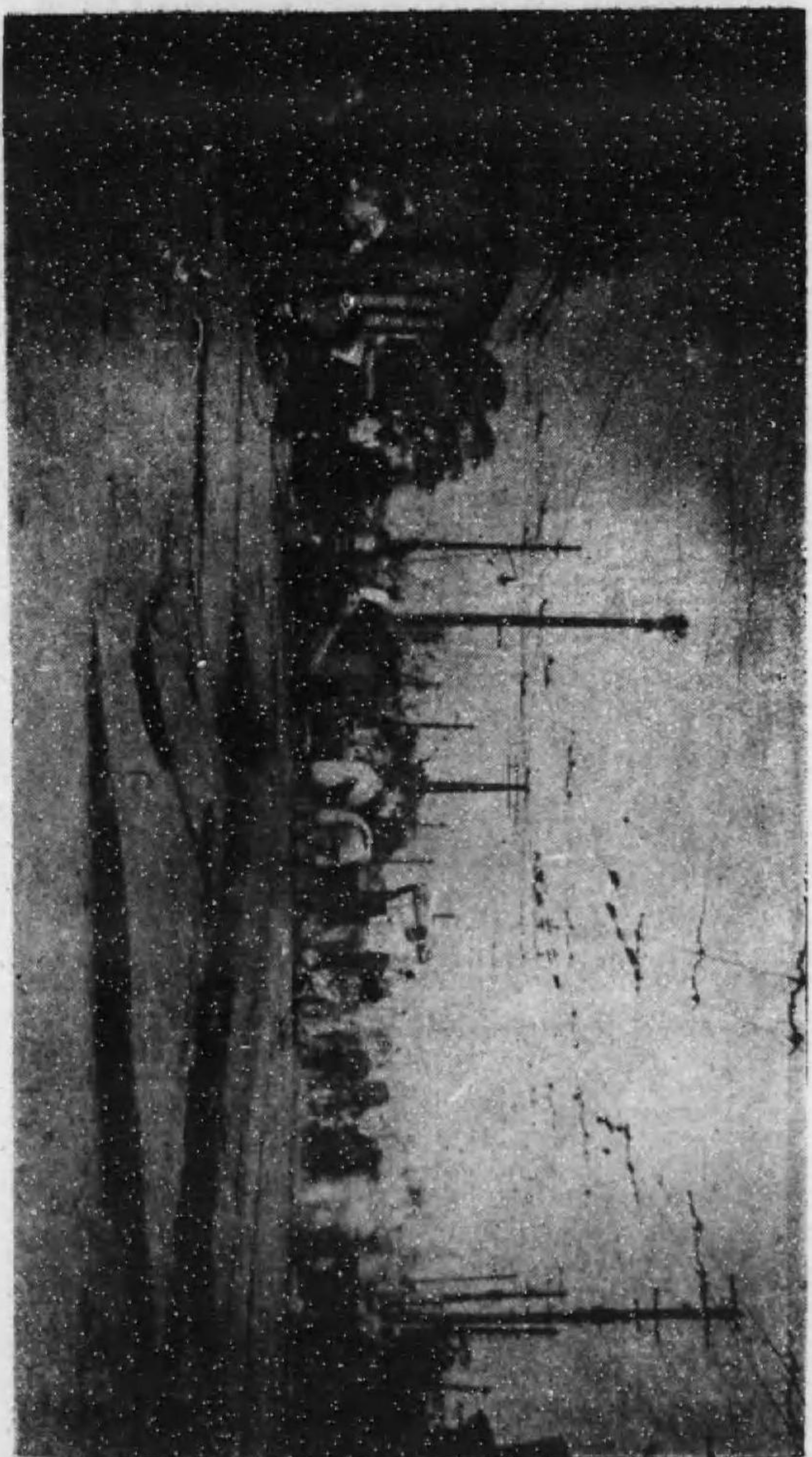


(一) む望を面方草邊り上谷下

露光量違いの為重複撮影



(二) ひ望を面方草淺りよ谷下



裂 龜 の 近 附 川 戸 江

露光量違いの為重複撮影

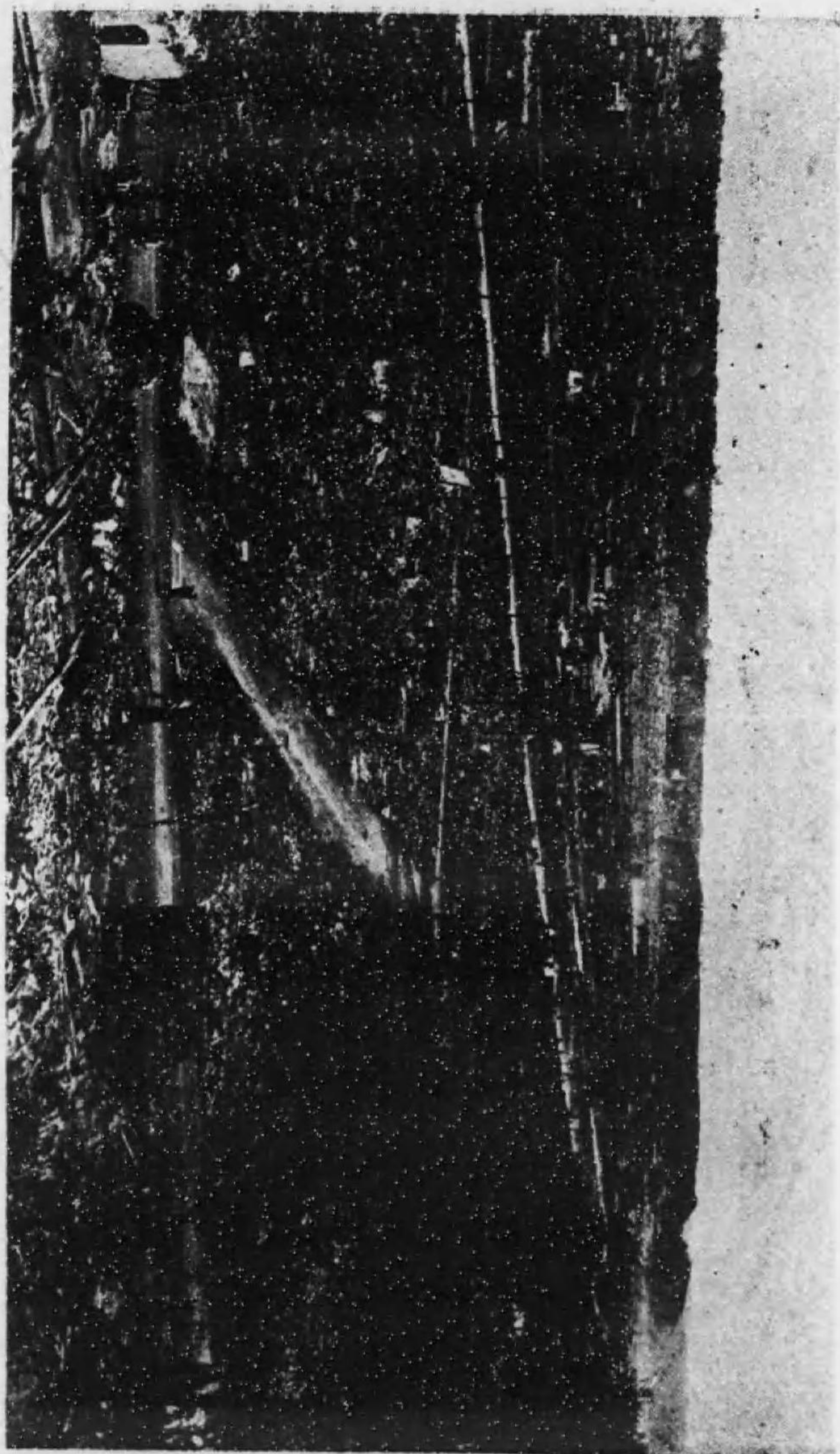


(二) む望を而方草淺りよ谷下



裂 龜 の 近 附 川 戶 江

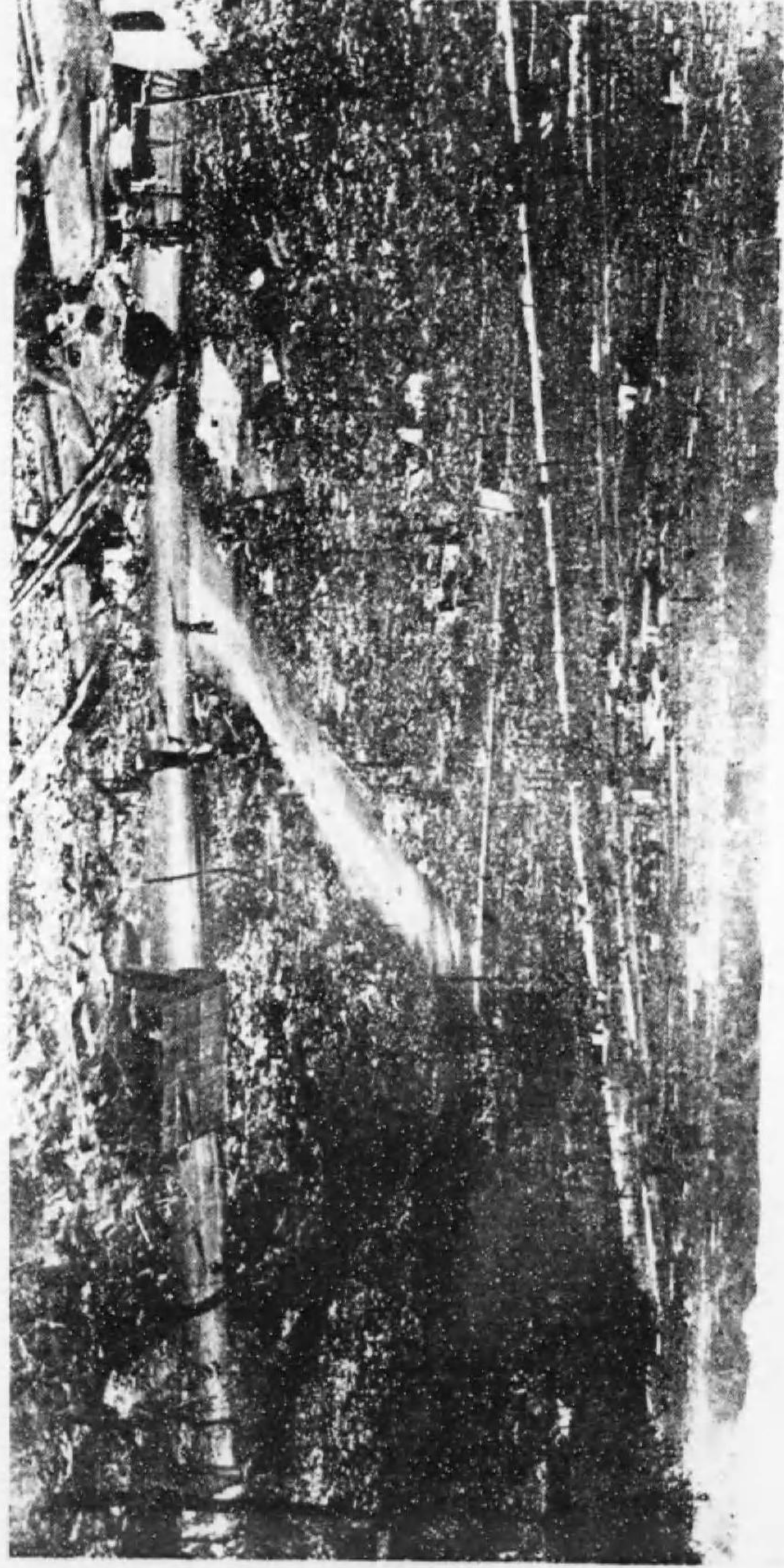
横濱全市の惨状



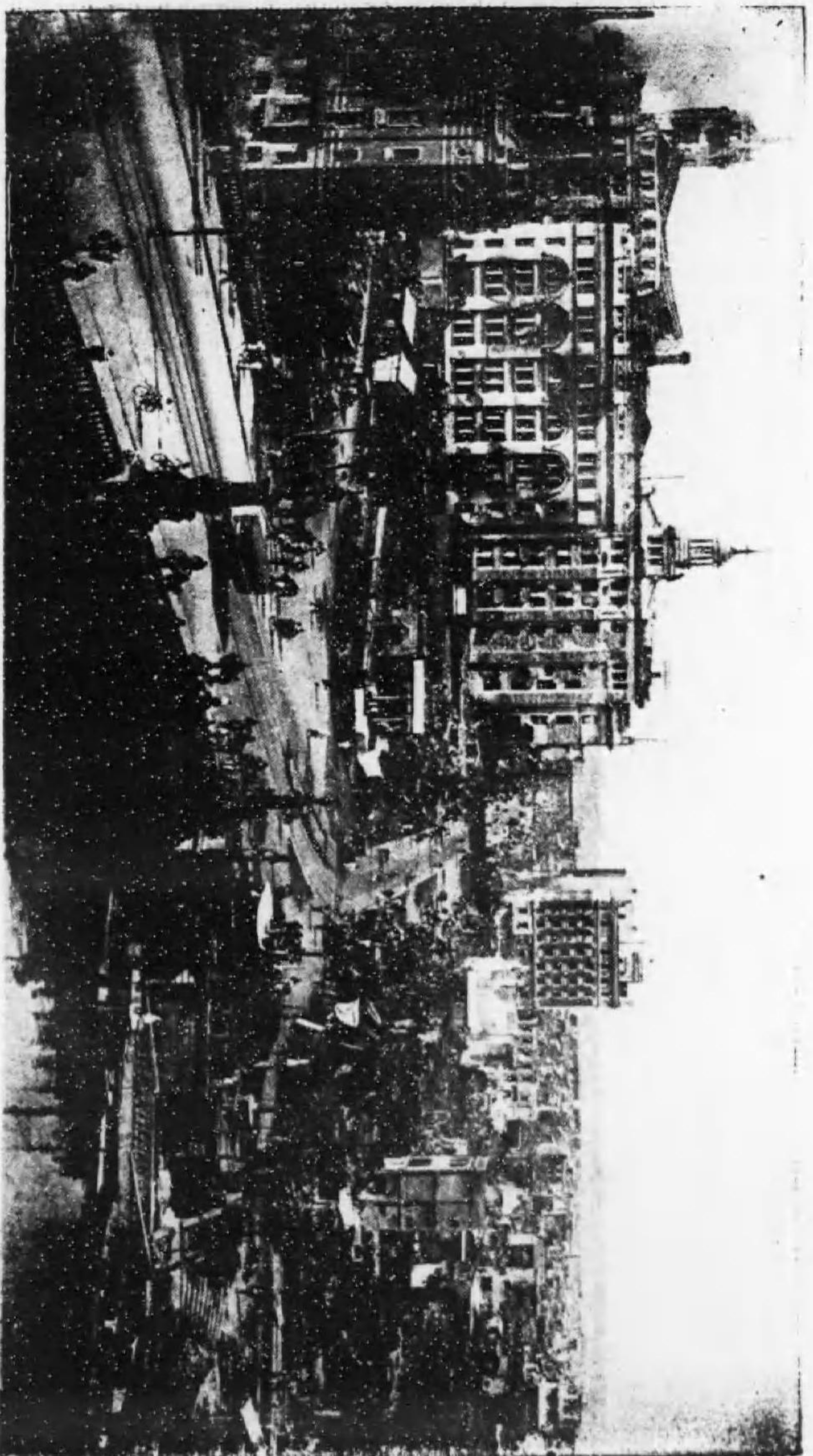
三越呉服店の惨状

露光量違いの為重複撮影

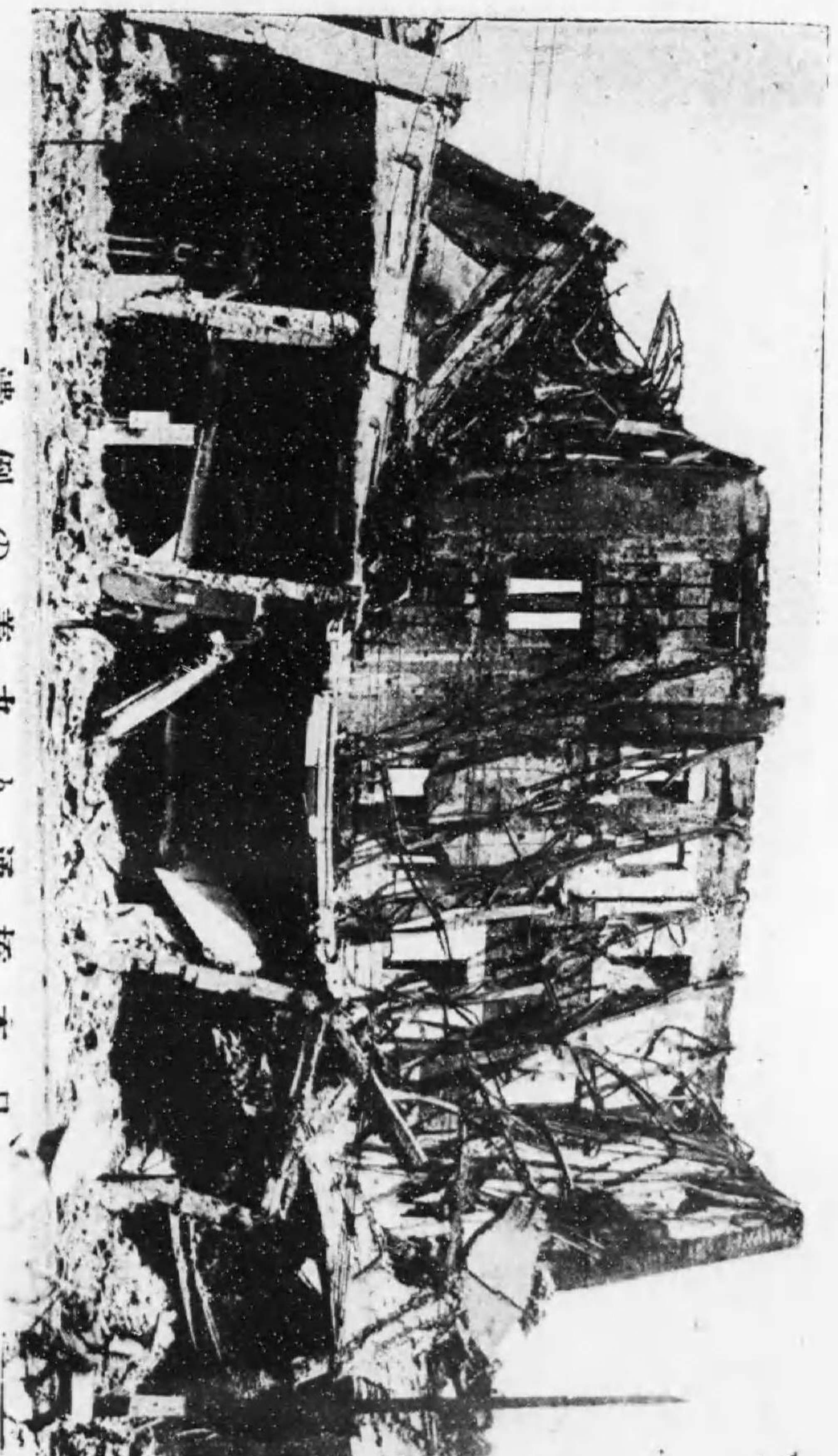
廣 瀨 全 市 の 惨 状



三 越 吳 服 店 の 惨 状

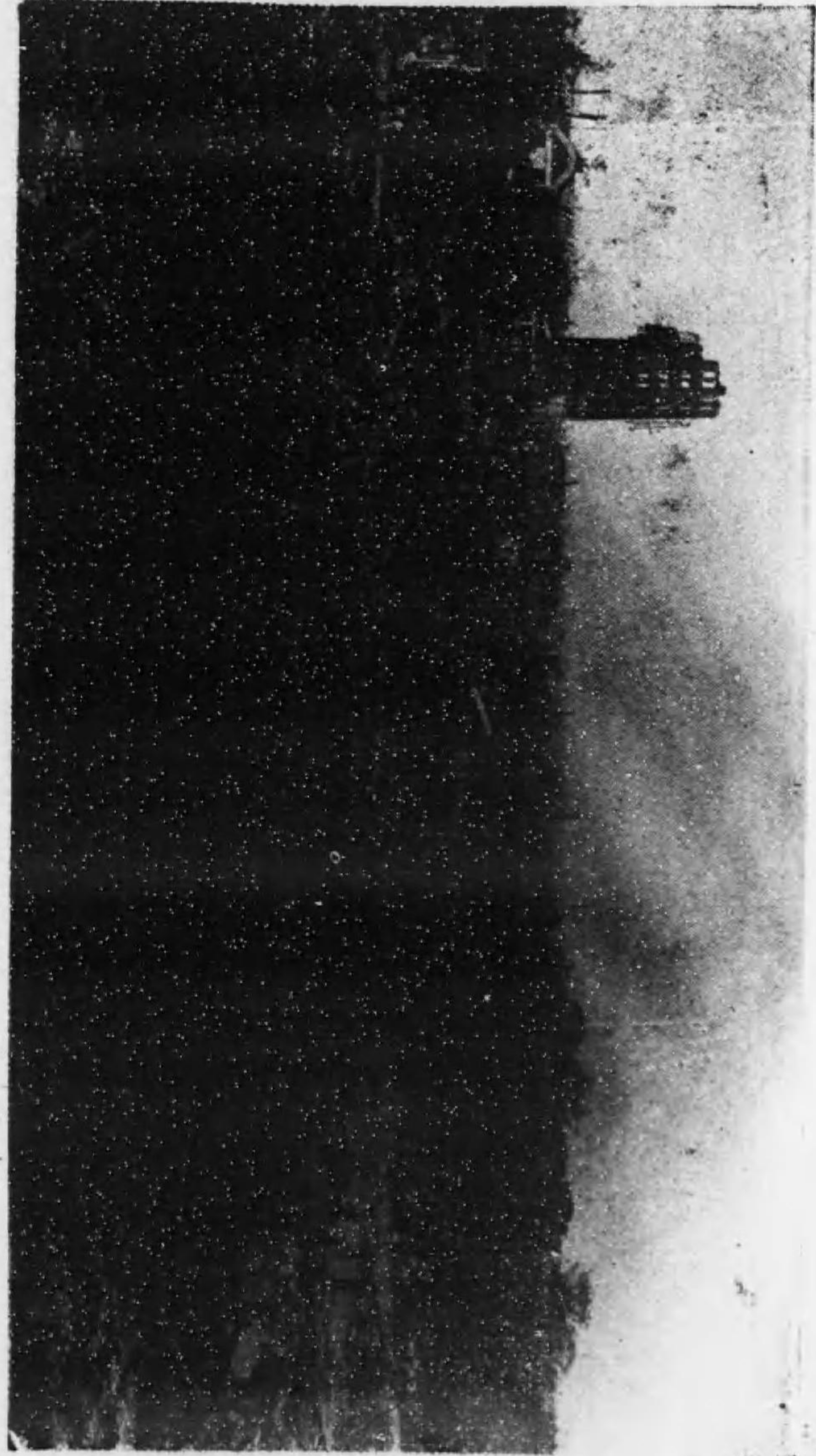


狀慘の近附岸河魚及橋本日

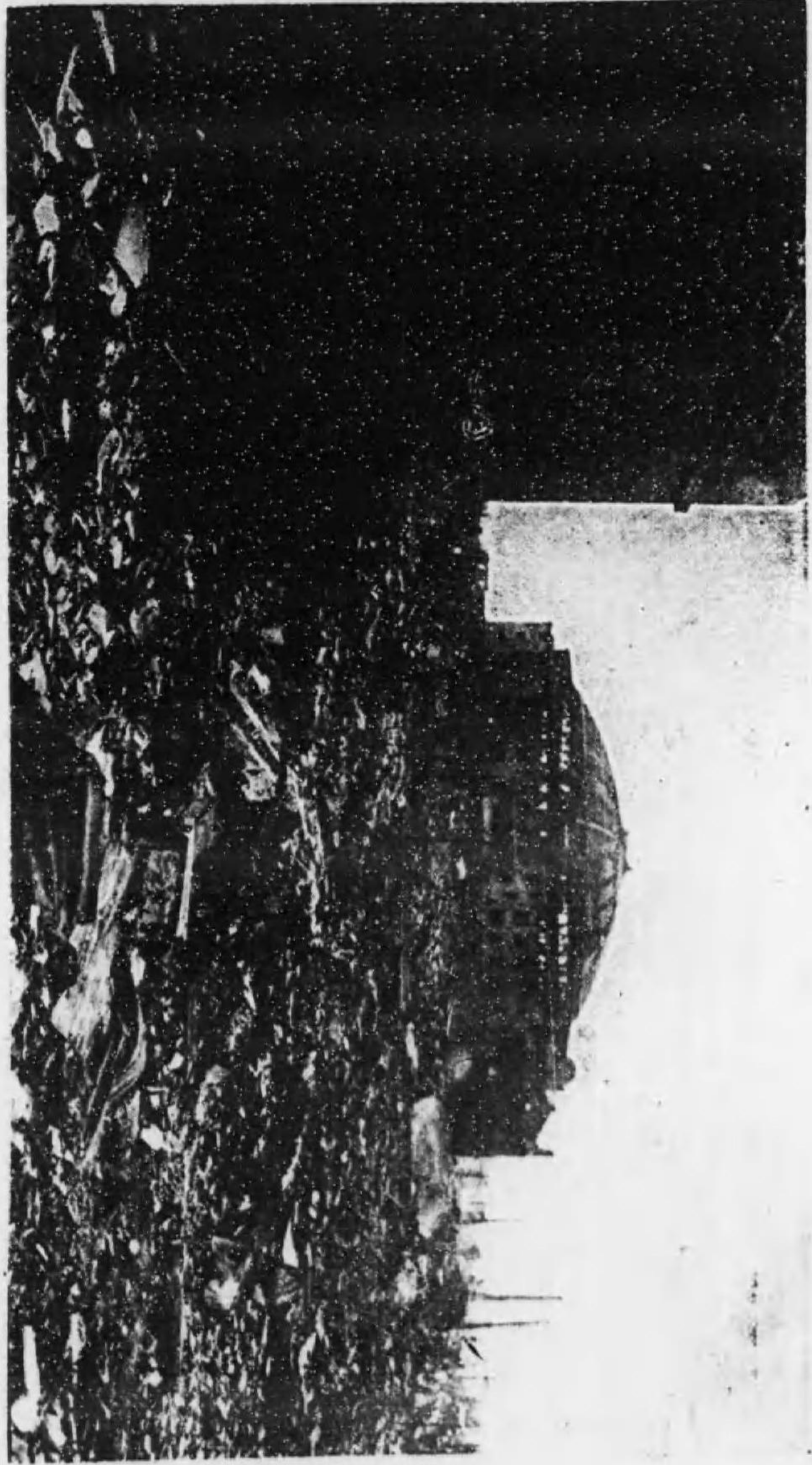


潰倒の善丸り通橋本日

露光量違いの為重複撮影

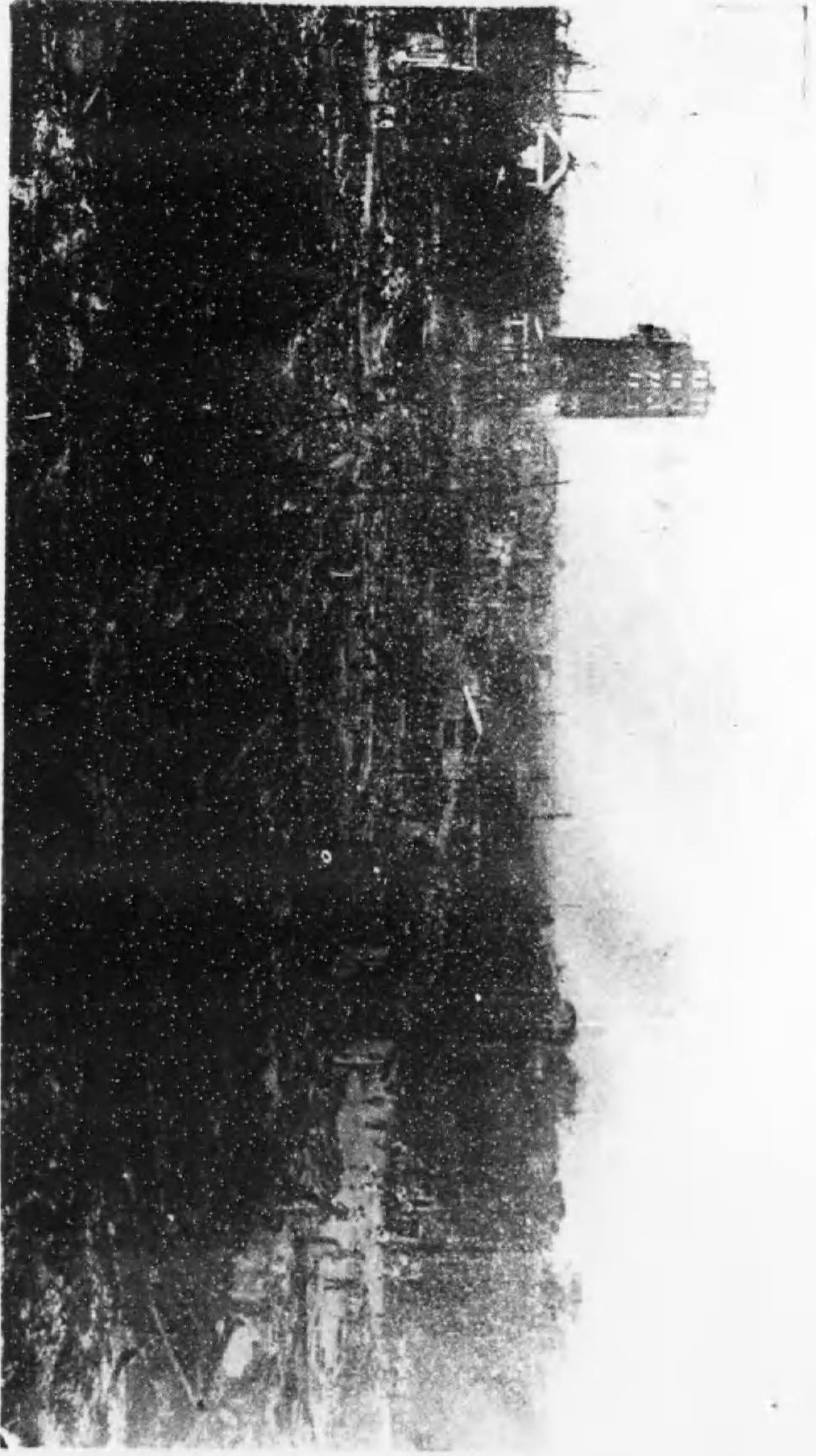


階二十と跡敷屋花園公草淺

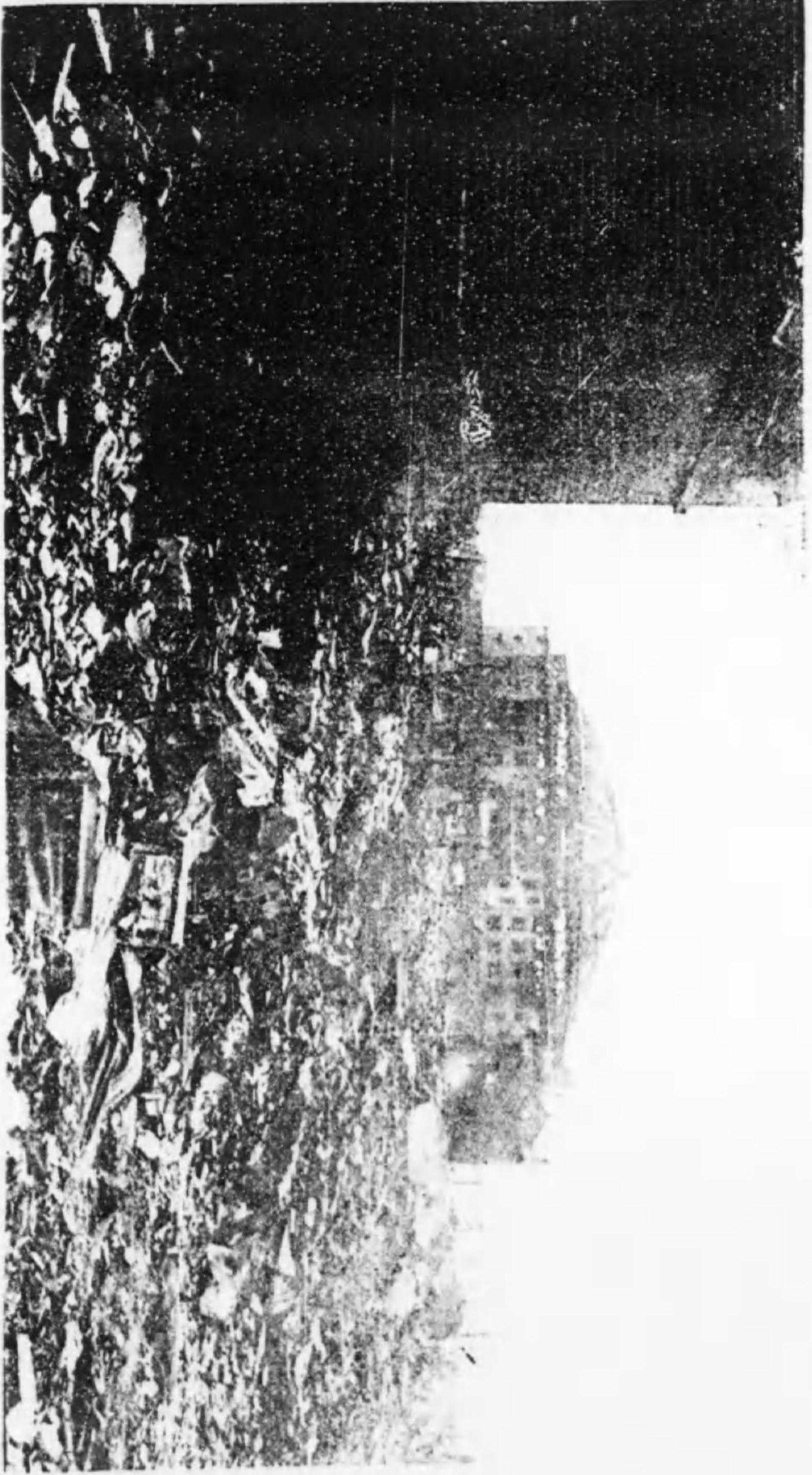


跡燒の近附と館技國所本

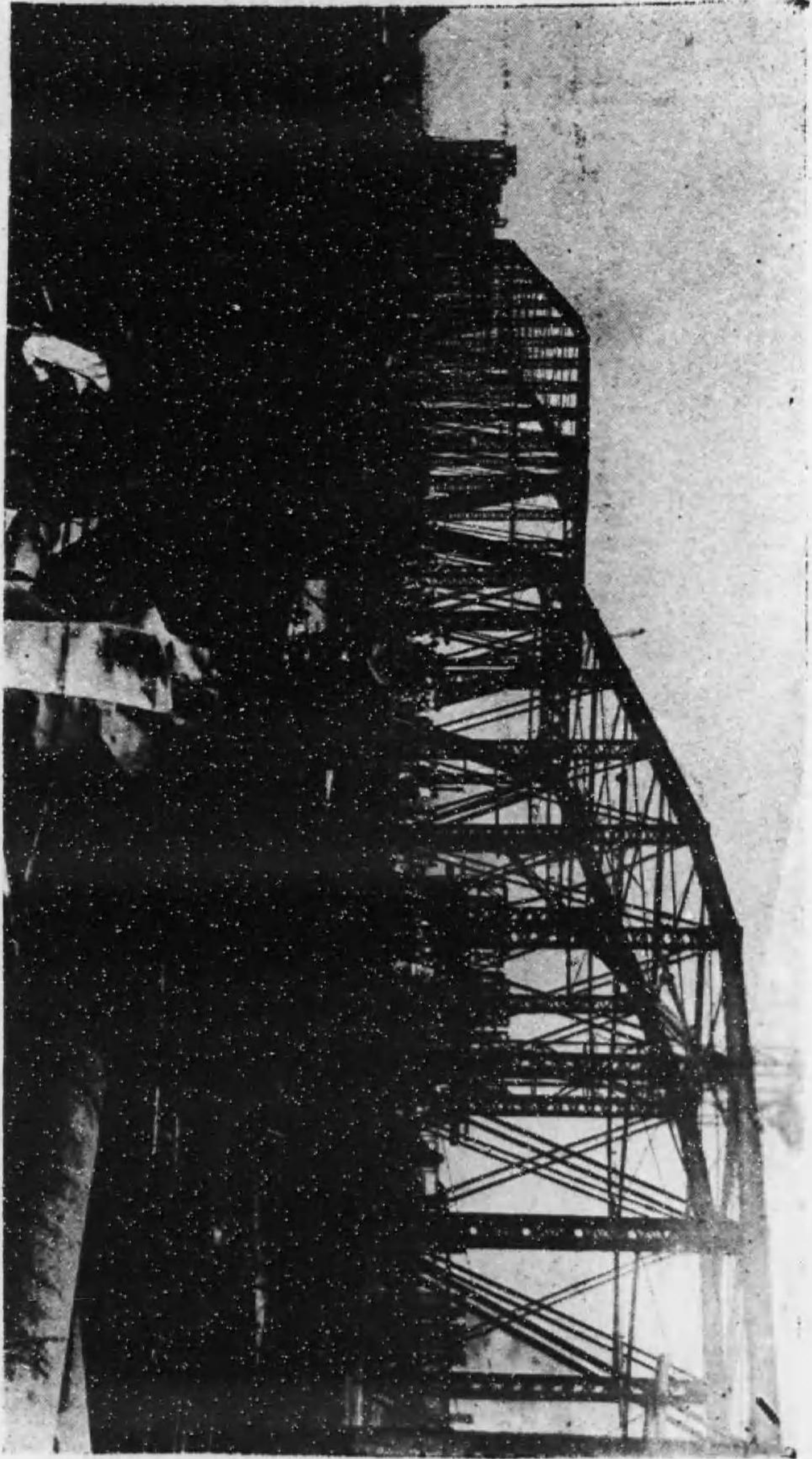
露光量違いの為重複撮影



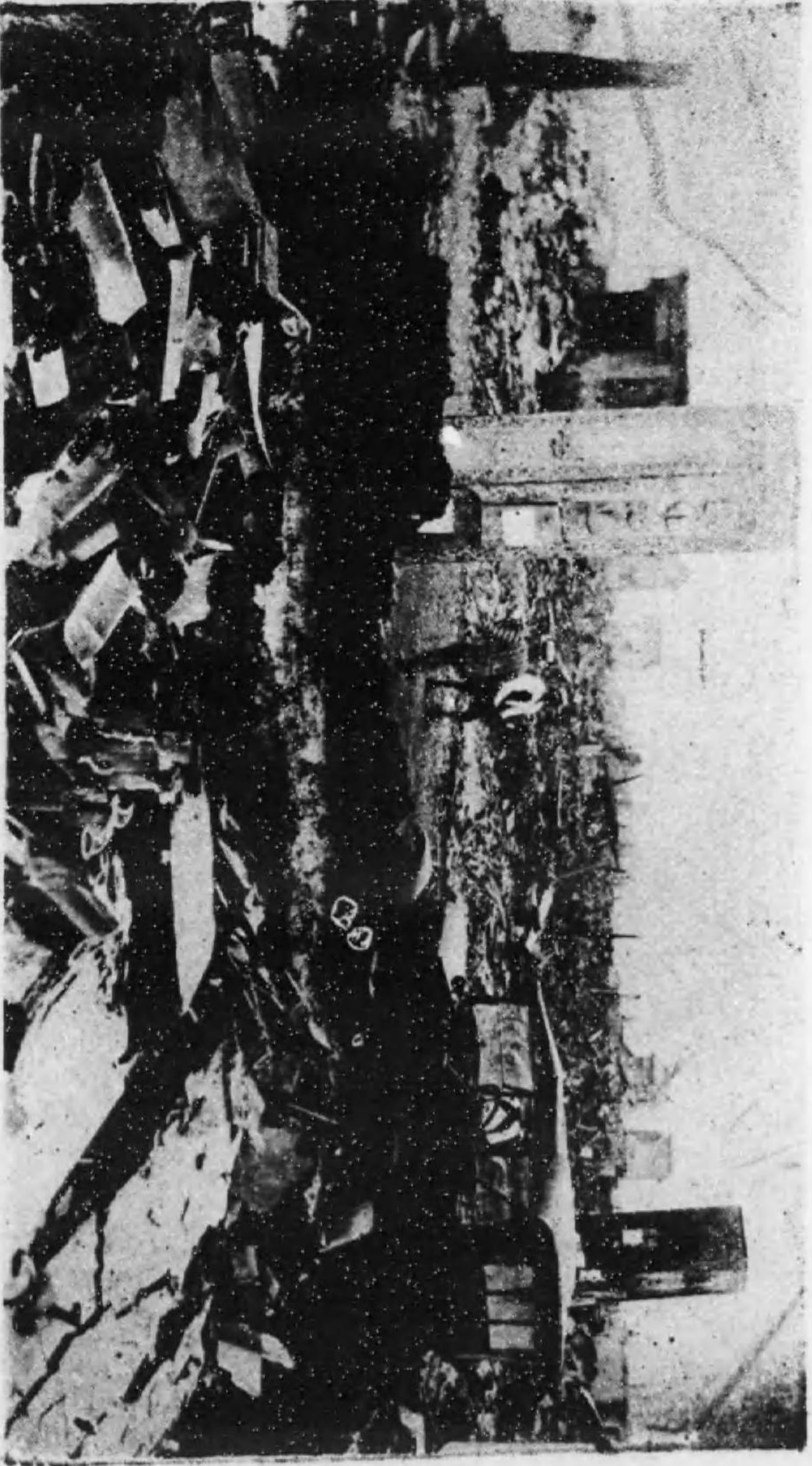
階二十と跡敷屋花園公草淺



跡焼の近附と館技園所本

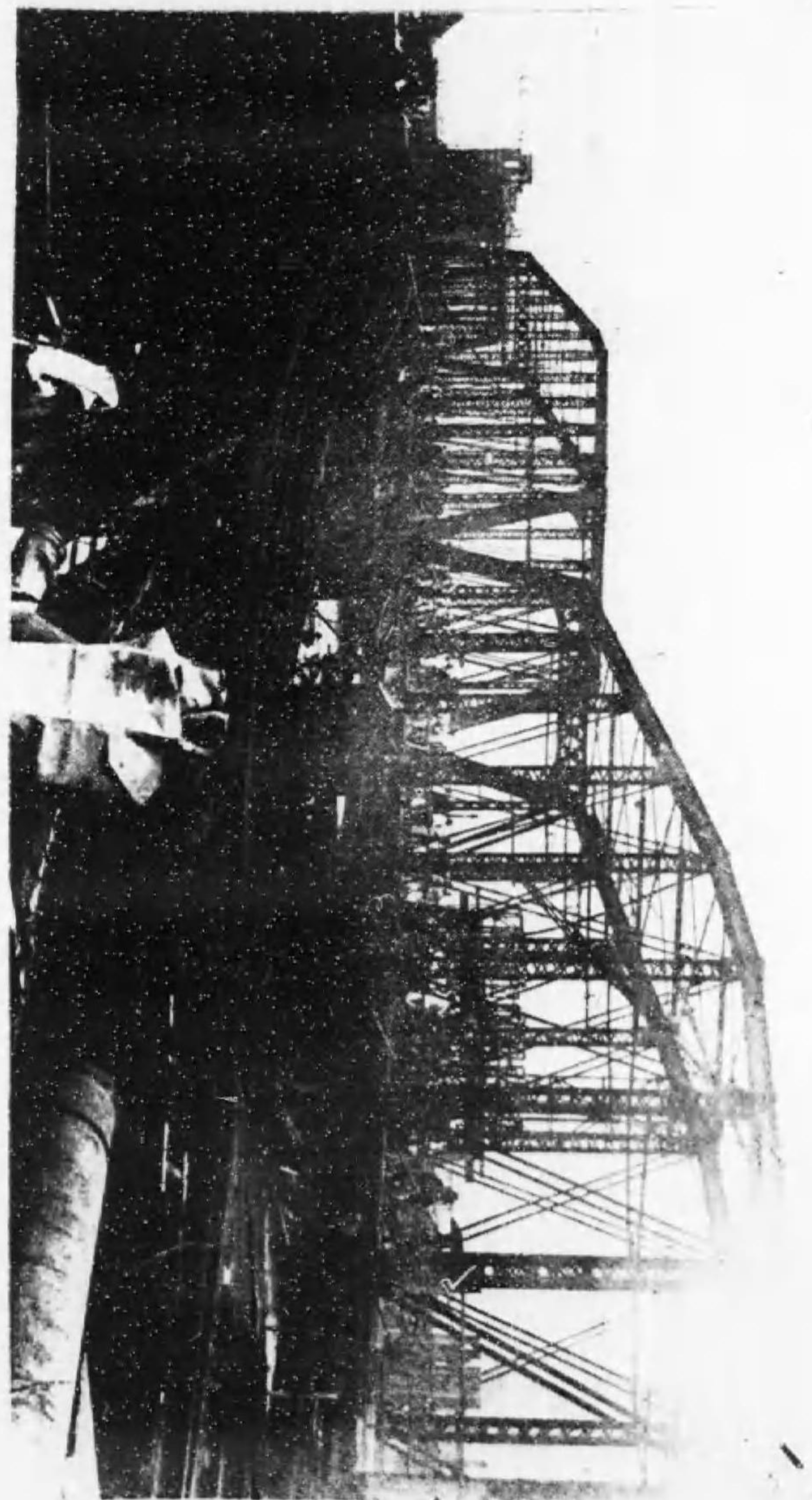


橋代永るせ落墜

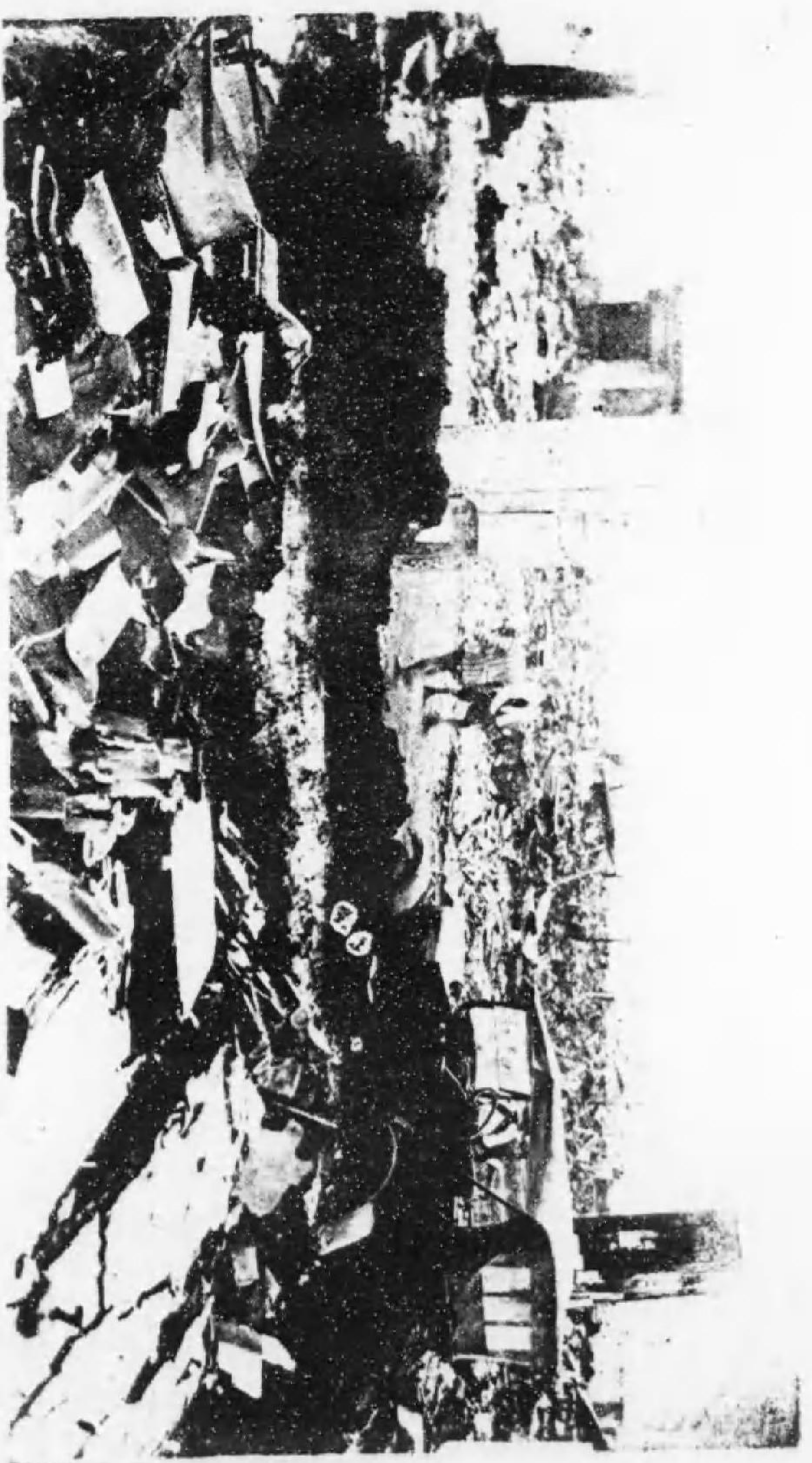


狀慘の口門大廓遊原吉

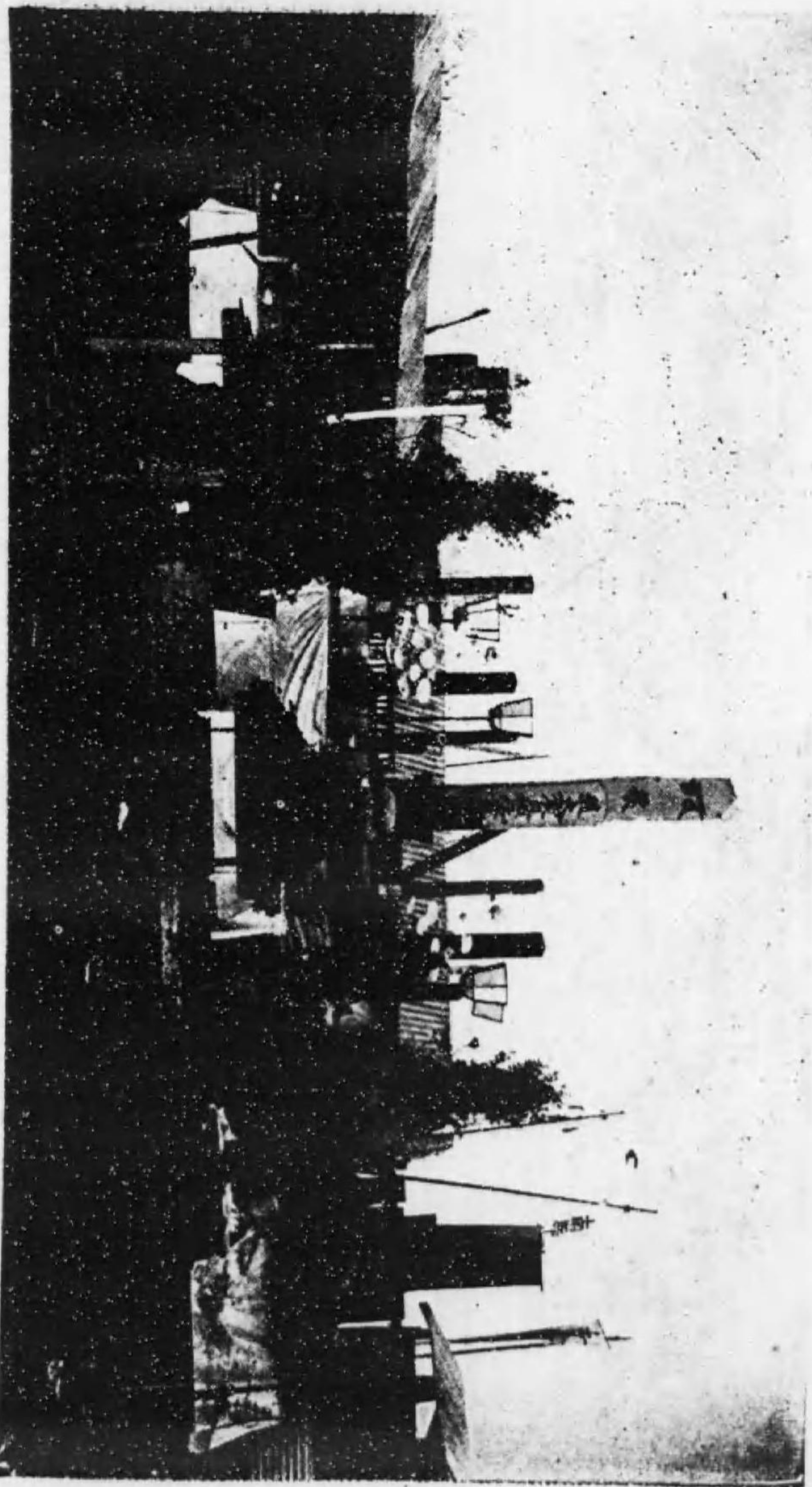
露光量違いの為重複撮影



橋代永るせ落障



状慘の口門大廓遊原吉



塔養供助殿服被所本しせ出を者死焼の除千二萬三

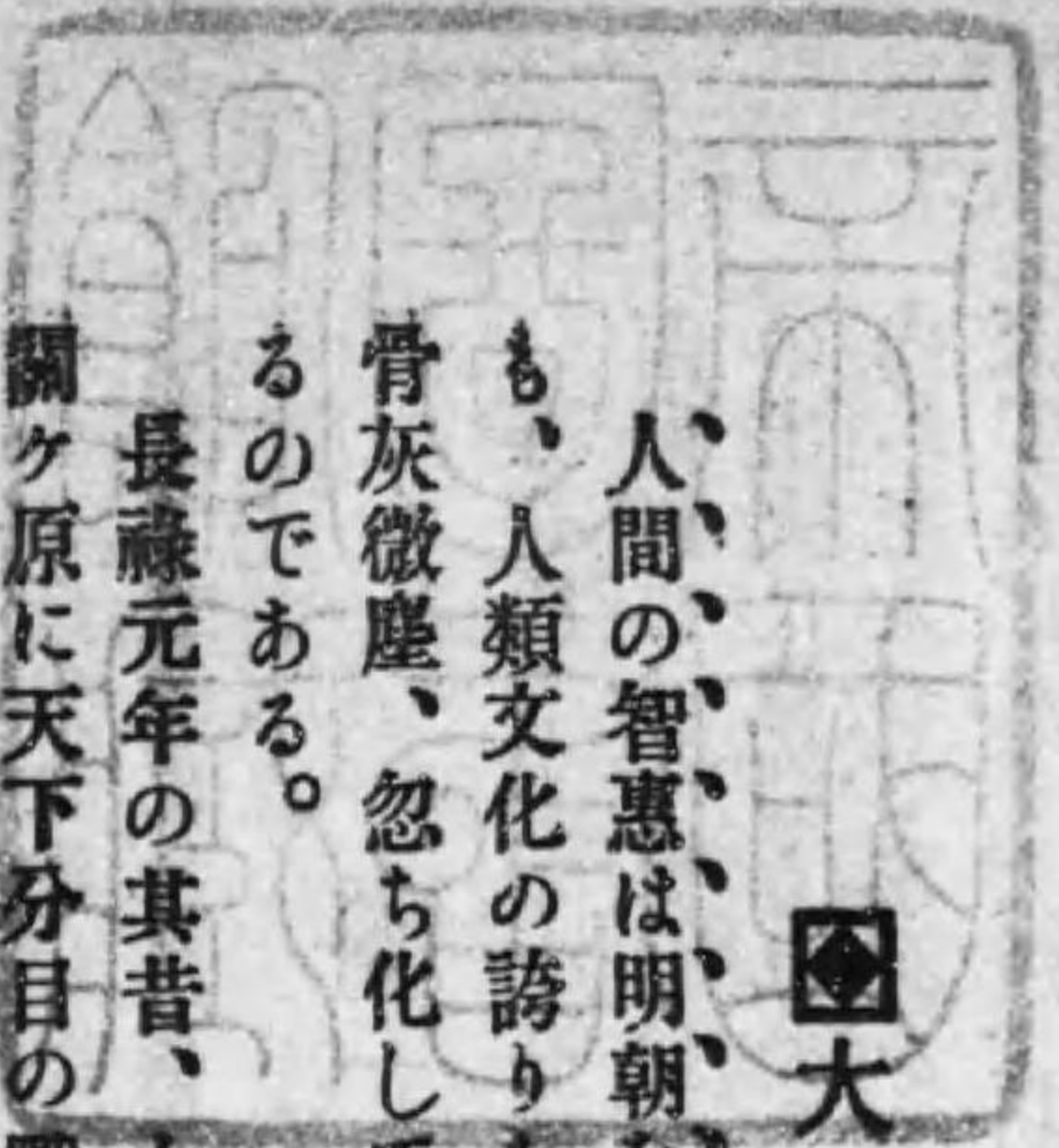
地震 大火 大東京炎上實記

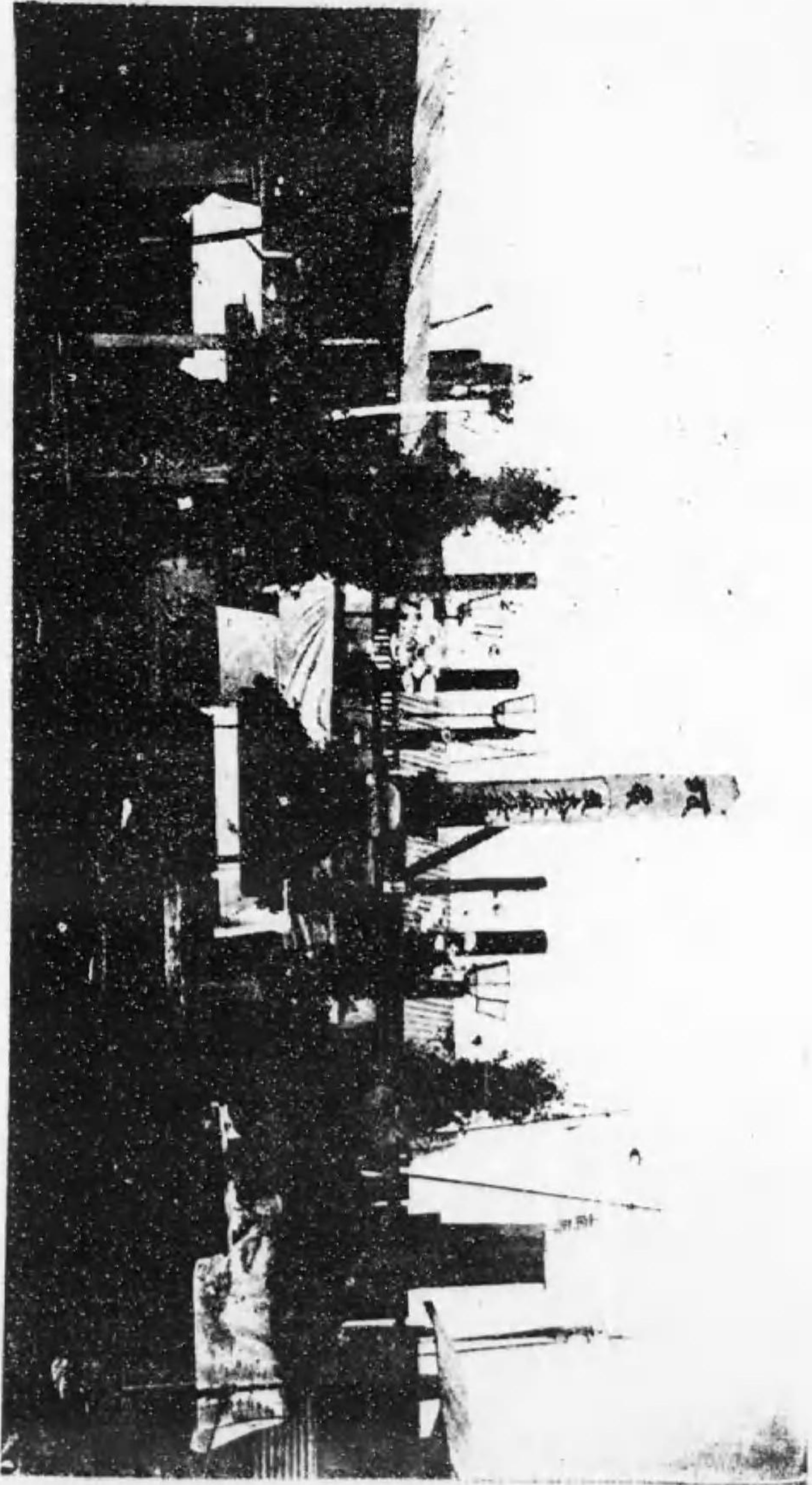
あんま子記述

大 慘 禍 來 !!

人間の智慧は、明朝を知らず、幾百年を數へ、何千年を経來たれる、社會建設の努力も、人類文化の誇りも、一朝大自然の猛威の前に立つては、實に一蹴の値だにもなく、骨灰微塵、忽ち化して本來の無一物、あはれ果敢なくも還原の一大法則に蹂躪されるのである。

長祿元年の其昔、太田道灌入道、千代田城を構へてより四百六十五年以後徳川家康關ヶ原に天下分目の戦勝を得て、愈々江戸城の基礎を固めたる、慶長十一年より三百十五年、往時の武藏野の原をして、現代の東洋一の大東京市と稱へらるゝ迄の、吾人祖先歴代の建設に於ける努力の蓄積は、短生涯の人生に於て決して容易なるものに非ず。





陸奥伊勢原被焼所本しせ田を者死焼の際十二萬三

地震 大東京炎上實記

ゑんま子記述

大 慘 禍 來 !!

人間の智慧は明朝を知らず、幾百年を數へ、何千年を経來たれる、社會建設の努力も、人類文化の誇りも、一朝大自然の猛威の前に立つては、實に一蹴の値だにもなく骨灰微塵、忽ち化して本來の無一物、あはれ果敢なくも還原の一大法則に蹂躪されるのである。

長祿元年の其昔、太田道灌入道、千代田城を構へてより四百六十五年以後徳川家康關ヶ原に天下分目の戦勝を得て、愈々江戸城の基礎を固めたる、慶長十一年より三百十五年、往時の武藏野の原をして、現代の東洋一の大東京市と稱へらるゝ迄の、吾人祖先歴代の建設に於ける勞力の蓄積は、短生涯の人生に於て決して容易なるものに非ず。

然るに何ぞや、時は正に大正十二年九月一日午前十時五十五分、爆然として南方より襲來せる大鳴動に伴ひ、震幅約四寸と云ふ猛烈なる激震となり、續いて起る大小家屋の崩落倒壊に、折からの旋風砂塵を吹き捲り、濛々たる黄塵は天日を蔽ひ盡し、一齊に屋外に逃げ惑ふ群衆の悲鳴は、異様な一大音響に打混りて、阿鼻叫喚の狀物凄く、瞬間にしてさしもの大東京市も慘憺たる光景と化した。

◆一 大阿修羅場

五分間——十分間！ 屋外に彷徨ひつゝ、黄天を仰げば、唸りを生じて吹き捲くる西南風に、全市の八方より黒煙續いて立のぼり、再三再四襲來する強震の間に、到る所の出火は報じられた！ 生氣を失つて周章せる群衆は、更に狼狽の度を増し、各自屋内へ駈入つて家財を搬出せんと焦慮するも、震動を怖れて軒に近付くを得ず、拱手仰天すれば愈々火煙雲の如くに捲き上つて火の近寄れるに脅され、近隣の身體に恙なき者等は相集ひて、たゞ路上に彷徨して互に爲す所を知らず、其間に家屋倒潰して家族の埋没に遇ひたる者共は、之を救はんとして罵り叫び、瓦をはがし壁を穿ち、必死の努力に何事をも顧みるの暇なく、表に走り裏に駈け、其凄惨殆ど名狀すべからず、賢愚共に寸前の思慮も盡き果て、たゞ大自然の翻弄に任すの外なく、斯かる間も遅く、市内郡部に渡つて起りし火の手は、疾風に乘じ迅速の勢ひを以て、各所に飛火を起し、午

後三時四時に至るに及びては、全市殆ど火炎の包圍となり、遠く宛れんにも電車途絶し汽車通せず、交通機關は全く停止され、電信電話の通信機關共に破壊し盡され、各道路は如何なる場所も搬出されたる家具の山を成し、避難を急ぐ群衆は、荷を負ふ者、兒童を引き連れる者、男は怒號し、女は悲叫し、其隙を我先きと争ひ運ぶ、荷車自轉車等は、いづれも荷物満載にて、無理から押通らんとす必死の混雜に、非常の警戒も消防隊の總出動も、今は全く手を下す術もなく、水道は破裂して一滴の水も注ぐ能はず、加ふるに所々に旋風捲き起り、五尺餘のトタン板を三四里の郊外に吹き飛ばせし勢にて火勢を煽り立て、東に宛れたる群衆は再び北に逃れ、西に向ひたる群衆は南に引戻さるゝと云ふ、いづれも縦横に追ひ詰められて、丸の内宮城前の廣場は云ふ迄もなく、東京驛前、青山の廣原、目黒澁谷方面の空地、上野公園等、煙を潜り火を宛れ、各々一方の血路を求めて辛うじ避難したる外に、深川區方面は越中島糧秣廠、本所區方面は龜澤町より横網に渡れる元被服廠跡の廣地、及び各五大橋上(永代、新大橋兩國、麻橋、吾妻橋)及び大川沿岸其他各所の公園空地等、各方面の到る所に避難者の押寄せ詰掛け、全市一燈の光りもなければ、火の海滿天を焦がすの夜に入つた。

◆焦熱地獄の第一夜

全市殆ど火の海である！ 本郷、小石川の西北部、牛込、四谷、麻布及び芝、赤坂

の一部分を除くの外は全く火の海であつた！ たゞ、凄惨とも大恐慌とも、文字や言語を以て云ひ表し能はざる事實である。人間の世界、然も科學智識に誇れる、文化社會に有り得べき實光景とは、常に科學萬能などを云觸らせる吾人として、どうしても信じきれない異例の大慘狀だ！

必死の努力によつて搬出されたる幾分の家具も、幾度か追ひつめられて遂に涙と共に抛ち、九死に一生を得たるは壽運の人にて、空地、川端等に荷を護りたる人々は生還極めて少く、五大橋上に追ひ詰められたる人々も、多くは逃げ惑ひ又は逃げ遅れたる人々の窮地に陥れるにて、新大橋、兩國橋等は、木材の箇所なきまゝに墜落は死れたれど夥しく川中に荷造りを投げ込み投げ捨て、漸くにして人員の火炙りを免れたのであつたが永代橋、厩橋、吾妻橋等の板敷は、荷より荷へ火を呼びたる結果、忽ちにして燃焼、人命と共に川中に葬らるゝに至れるは慘中の慘にて、兩岸の猛火に橋上へ立盡したる無数の群衆が、更に足下に火を得て苦悶絶叫なす慘憺たる光景を、實在の世の事實として、如何にしても信じ得られないのである。

押潰され、突飛ばされ、踏躓られ、然も命からくゝにて、全身泥塗れとなつて瓦を蹴散し、死屍を踏越え、漸くにして避難なし得たる郡衆も、各所に火の雨を浴び、黒煙りに咽せび、呼吸塞り胸悸めき、舌硬ばり、足すくみ、進退谷まりたるまゝに一團となつて立盡し、將に骨も焼かれんとす光景を目前に、一滴を飲まず、一粒を食はず

徹宵火天を仰いで自失せる第一夜！

名狀すべからざる混亂の絶頂に達したる夜更を、親は子を呼び、子は親を求め、或は夫妻所を異にし、老若手を離れ、右往左往逃げ惑ひながらに、其名を呼び、其人を追ひ、狂氣に爲つて駈け廻る聲々、彼方此方に悲調を帯びて叫び交され、如何に無慚の輩と雖も自から涙下らざるを得るのであつた。

斯して一夜は午前四時を過ぐる頃、火煙渦巻く大空に廿日月の影を残して、次第に明け行きたれど、疲勞に困憊を重ねたる幾十萬の人々は、死屍の如く路傍の各所に折り重なりて昏々として眠れるもあり、或は又、渴に迫りて濁水を掬ぶ者、飢に耐え得ずして食をあさる者、此所に於て又更に餓鬼道苦の襲來となつた。

◆避難と野宿

未曾有の此一大慘事は、人間社會に種々の大教訓を、明かなる實證に由つて示したであらうが、今此處に避難と云ふ事に就いて云へば、普通常識に於て突差に考へられたる避難方法は、事實此慘禍に遭遇して、何等の効果を爲さざりしのみか、却つて死地に導くの結果を來した。

一大慘禍の襲來となるや。なまじい周圍の事情に考慮を費さず、身邊の利損を顧みず、只管三十六計の外を用ひて、盲目滅法一直線に災害を遠ざかりし人々は、不具者も

病人も身の安全を得たれど、一般人情の弱點とも云ひ可く、云ひ合はしたる如く、手を連ね追ひ、空地を尋ね、川端に走り、橋上に集ひ、舟中に隠れ、或は廣き道路の中央に荷物を護る等、成可く近く便宜なる地位に於て、空地、川端、橋梁、舟中などを選まんとなすは、賢愚等しく人情の導く所なるも、火災八方より起りて消火水力の絶へたる如き場合には、何等避難の效を爲すものに非ず、今回死焼者の最も多かりしは水邊と空地にして、我れ勝に舟に乗じて川筋に集りし者、互に水面を蔽ひ盡して可燃性の橋梁を渡したのが如き結果となり、對岸の火を一方に招くの導火線を作りたるのハメに陥り、一度積載物の發火となるや、忽ちにして一面の火災と化し逃げんにも群集せる舟筏の邊に移動する事叶はず、互に寸尺の進退に窮したるまゝ、火に炙られざれば水に溺るゝに至り、遂に萬事休するのであつた。

其他の水邊に在りし者は、之れ元より背水の陣にて、特に水泳の達人にても有らば格別、愈々背に猛火を負ひて水中に身を投ずるの者相續かば、尋常一樣の水練にて身を全ふなす能はざるは明にして、之又悲惨の運命に畢るの餘儀なき成行であつた。

更に又、各所の空地公園等に難を避けたる結果も、宮城の廣前、或は上野公園等の甚しく廣大なる面積を有し、猶且周圍に人戸櫛比の地なきが如き所は別とし、市井坊間に散在せる、一二萬坪の空地や、小公園等に免れたるは、身邊に火災未だ到らずして、巨蛇の毒氣の如く、地上を這ひ渡る瓦斯の包圍を受け、多くは敢なく窒息悶死な

すのであつて、斯かる場所の死屍の多くが、兩腕を地上に張り、面を土に摺付けて絶息せるを見る次第である。

之にて知る、異常の大事に臨んでは、等しく異常の行動に出づるを可とし、まなじりに日常の身邊の小利害を基準とせる、吾人の常識判断なるものゝ甚だ覺付がなく、又極めて危険なるを實證せられたのである。

斯くて慘禍第二日は迎へられ、火煙は下谷及び深川未だ衰へず、電燈、電話、電車等の銅線蜘蛛の巣と夥しく墜落混亂せる路上を、餘燼の熱氣と吹捲くる黄砂の煙を冒しつゝ、焼け爛れたる重傷者の、血に塗れし體軀を、男女の差別も老幼の區分けもなく、屠殺されたる獸類にても運ぶが如く、荷車に積み重ね、自動車に満載し、必死の努力を以て遠隔の地の病院へ走れるが如き中を、より安全の地帯へ避難所を求めんと辛うじ命拾ひを爲せし人々の、疲れ果てたる身に泥足を引摺りつゝ、山の手、郡部等を目差して覺束かなげに辿り行く混雜一方ならず、さしにも廣き馬場先門の芝生も上野公園及び不忍池畔の一帶も、立錐の地も餘さざる人の數にて、其他市中にては東京驛構内、日比谷、芝山内、青山澁谷新宿等の草原、郡部にては北豊島郡最も多く入り込み、焼け残りたる方面に親戚知己を持たざる人々はいづれも燒跡よりトタン板を拾ひ集め、焼けたる銅線にて之を搦め、乞食の小屋にも劣りし圍ひを造り、躊躇して僅に雨露を防ぐの有様、建札して何某と記せる、現代に時めきし人の姓名も散見されて、漫

ろに有爲轉變の世の、頼みがたきを痛切に感じさるのである。

是等の飢へたる野宿の世界を赤兒に牛乳其他に玄米の握飯、飲料の水等を、救護團隊の目覺しき活動に由つて配給され、昨は巨萬の長者と美望を受けし身に、一塊の玄飯に舌を鳴らす憐さ殘暑烈しき路上には泥塗れの氷一片に數十の腕之を争ひ、一袋のパンに群衆うばひ鬪はんとすみじ目さ、晝は飢渴に苦しみ夜は蚊軍に惱む野宿黨も、故郷あれど列車全く通せず、市隈家無きにも有らねど訪ふ可き縁邊を持たず、成行のまゝに天を仰いで嗟歎する人々多く、物質に離れたる生物の弱點は、徹頭テツ尾曝露されて餘す所なく、一夜乞食の譬へを大正文化の現代に於て、然も帝國の首府に斯くも多數に見ざるを得ざる事の憾や、決して永久に忘れ得べからざる次第である。

●●人の●動

爰に甚だ遺憾なるは、○人騒○の事にて、事實全く明ならねど、慘害に乗じて不穩の行動ありとの風評起り、○○、○○、○○等の暴動行爲ありとなし、焼け残りたる各所には自治的の夜警堅固を極め、無燈の夜の町を在郷軍人及び青年團等協力して、互に交代不眠警戒に殘存家屋を宛ら寶物の如くに之を守護し、避難民をして再び慘禍に遭はしめざるやう、自他を兼ねての正當防衛策をさく／＼怠りなく、夜更通行の禁令を守つて、僅に提灯の光りを頼りて、屢々起る弱震に心膽を寒からしめつゝ、各戸滿

員の屋裏に、極めて頼りなく果敢なき夢を結ぶのであつた。

◆混沌生活

大東京市を一舉にして葬り去つた、震幅約四寸と發表されたる大震は、遙に遠く露國のベトログラード天文臺に迄感じられたりとか、東海道は静岡縣より被害を起し東北栃木縣に及ぼし、伊豆半島は云ふ迄もなく、房總半島、神奈川縣下、東京府市最も被害甚大にして、日夜に亘り百餘回宛の餘震を感得なし、第三日を経る迄は人をして屋裏に眠らしめず、幸に家有る者も家族一同家外に蓆を延べ、初秋の星光を仰いで僅にまどろむ有様に、忽ち健康を害する者續出し、藥餌を求むれど、各藥局は破壊されて之に應ずる能はず、僅に死を宛れて存在する者も殆ど半死半生の痛苦に、玄飯、漬梅、澤庵等の粗食を辛うじ求めて飢餓を支え、昨を顧みるの餘裕もなく、明日を慮るの氣力も失せて、たゞ一刻々々の衝動に由つて、或は右に或は左に、

『生きてさえ居ればよい』

と云ふだけの、極めて單純な未開人的の觀念に支配せられて、甲乙相互に唇日も忘れ果て、只管糧食の絶えざらん事、生命の全からん事を、たゞ空漠と胸底に祈るので有つた。

物資 欠乏

焼残りの七區へ對して、比較的人口楡比なる八大區の全滅者が、一舉に押寄せたる事とて、混亂に續いて起るは物資の欠乏にて、食料は云ふ迄もなく、身に一紙片布を持たざる人々の、直に差支を生じて之を購はんとするも、限りある供給即日盡き果て、鹽、味噌、煙草、蠟燭と、次第に品切れを告げ、各商店は一様に賣切れの紙札を貼り、間斷なく押寄する需用者を防げど、猶且焦慮之を求めて、東奔西走の人喧噪を極め、一升の玄米を金二圓にて分譲を受けし者ありしを聞きたる程にて、如何に當時の切迫せるかを察し得られて餘りある話題である。

懷中多分の通貨を用意せる者に於てすら、餘程遠隔の地に人を走らすに非ざれば、日常の物資に窮して生活の行止りへ押詰められ、日々二千五百のカロリーはおろか、一サジの脂肪をも執る能はず、況んや、裾は焼け切れ、袂は裂かれたる着のみ着のままの、風呂敷包一個の所持なく、身に一錢も藏さざる人々は、漸くにして一塊の玄飯と飲み水を得るの外、不淨紙一枚をも求める術なく、身を捨鉢の、涙も涸れ果て氣根もつき、妻子相擁して昏々樹下に眠れるなど、到る所に散見されて、夜更下弦の下甚だ凄愴を極む。

此間に於て、免災地帯の在郷軍人及青年團等の奔走に由つて、校舎、寺院、宿舍其他の倒潰を免かれし建物は全部開放されたれど、即日満員を告ぐる状態にて、無限の收容を許さず、避難民中、健足の者は、線路を傳ひ、街道を辿り、遠隔の地を目差して住馴れし都を捨て、續々と脱出して立去る者も日に多く、郡部も之等の旅客を迎へて、夜半と雖も街道に行人絶ゆる事なしと聞く。

交通 難

早くも第二日より、焼跡見舞の人々三々伍々大道に續き、縦横に垂れ下る種々の銅線を掻き除け踏趣え、息もつまる熱砂の襲來を冒して、阿房宮炎上の昔語りも數ならぬ昨日に變る大東京市の、こゝが人形町通りなりしか、かしが銀座街頭なりしか、あれが三越よ、これが須田町邊ならん、など、一面の焦土を望んで無量の感慨を漏しつゝ、各自に八方へ奔走する中に、白布或は白紙に姓名を大書し、竿頭に翻して大聲に尋ね人を呼び歩くなど、いづれも草鞋足袋洗足等にて、三里を歩き五里を戻るに、途中一掬の水なく、一粒の食なく、昨日の日は美人錦繡を纏ひ、紳士兩肩を聳やかし、車に自働車、華の都の誇りとして蜘蛛手十文字に眩ゆく行交ひ馳せ違ひたる光景も南柯一睡の夢の跡と化して、貴賤等しく泥足袋泥草鞋の、憇はんにも一樹の蔭なく、乗らんにも一臺の車なく、腰に一塊の玄飯、肩に一壺の水を擔ぎ、流るゝ脂汗を拭ひも敢へず、東西に南北に彷徨ひ行く憐さ。

第三日頃より、三の輪より品川に至る往復を、荷馬車に白旗を建て、乗合なるを示し、二十餘人宛を運搬せるを見掛けたる外、人力車としては極めて僅に山の手邊に存在なす計りにて、他に残存せる自轉車の各種は、擧げて救済用に當てられ、日頃五丁十町の距離にも交通機關を頼りて生活せる、都會人の習慣は根柢から無残にも覆へされ了つた。

第五日目より、東海道線は御殿場以西全通にはなれど、東北本線は日暮里以北開通となり、山手線は列車にて田端池袋赤羽品川間の運轉を開始し、中央線は飯田町與瀬間、烏澤以西共に開通、總武線は龜井戸より本線大部分開通（北條線は不通）、常盤センは三河島驛より全通するに至つた。

之に由つて、關西方面に避難の人々は、信越線篠の井驛より中央線經由若くは直江津より北陸線經由にて目的地へ到達爲すを得るに至りたれど、海嘯の如く押寄する人々は、何處の驛のプラットホームも手荷物物の山、人の波にて、到底列車に收容爲す能はず、屈強の男等は、皆車窓より飛入り或は屋上に這ひ上り、帶紐等を結び付けて車外に吊下り又或は機關車の石炭の上に登るなど、あらゆる手段を以て列車にすがらる狀、殆ど蛇身に蟻の這ひ集れるが如く、疲れたる者、病める者、兒童等のトテモ乗車すべくも非ずして、然も田端驛より大宮驛に至る近々十里に足らざる距離をも、八時間を要する有様にて、信州長野驛へ二十八時間後に漸く達するが如き状態なるまゝ、最も

急速の避難を要する傷病人の如きは輸送不可能にて、此故に、第八日の午後より、上り列車には官署の證明あるに非ざれば斷乎として乗車を拒み、無賃輸送に於ける混雑と傷病者の輸送とを緩和し、而して東上旅客をして、糧食宿所に大不足を訴へつゝある災害地に入らしめざるやう、一舉兩得の策が講じられたのであつた。

其他には、芝浦より關西方面へ軍艦の特別便乗開始せられ、婦人兒童の多くは之に向つて馳せ參じるのであつた。

◆糧食大輸送開始

二晝夜に渡つて荒れに暴れ、狂ひ亂れて大東京市をなめ盡さば息まざるの猛威を逞しうしたる火災の大紅舌も、第三日の曉、上野驛より山下を焼き盡して、大なる火脈は漸くに鎮靜するに至つた。

爰に於て、糧食の大輸送は開始せられた。關西地方、就中、神戸大阪の物資を中心として、名古屋静岡等より、海上運輸に由つて、軍艦及び商船は、舳艫相含み、續々相次いで出動なし、米鹽、醫療品、其他の物資を満載して、横濱、品川の灣頭に陸揚げをなし、即日配給に勤めるのであつた。

軍艦に於ては、長門、扶桑、山城、五十鈴、春日、淺間、八雲、岩手、天龍、富士其他の巨艦數隻、郵船に於ては、長崎、上海、備後、石狩、小樽、長崎、日光、熊野

其他の大船を供給して、種々の物資を満載し、傍ら避難旅客の輸送を計り、大阪商船よりは、ハルビン、海運、扇海、シカゴ、等の巨船救済材料を満載して横濱灣頭に來り。又青森、秋田方面より、バラック用木材二十五萬石及び食糧品等、軍艦、商船等にて到着、凡ての食糧品は、急遽左記へ配給された。

○芝浦配給司令部。麴町區半藏門麴町小學校、京橋區築地本願寺、芝區勞資協調會、赤阪區々役所、麻布區々役所、荏原郡品川驛前廣場、蒲田、大崎、配給司令部、兩國支部及び水天宮横、神田一つ橋小學校、淺草新谷町元車庫前、○田端配給司令部 隅田川支部及び本所區役所、小石川區役所、下谷區東京自治會館、北豊島郡板橋驛及び三河島驛及田端及隅田川、南足立郡北千住。○新宿配給部、大木戸新宿御苑前市ヶ谷小學校、豊多摩郡中野驛及新宿驛及澁谷驛、○龜井戸配給部、本所國技館、深川岩崎公園、かめ井戸驛

○其他公設市場に於ては、焼け残りたる、本郷眞砂町、大塚仲町、早稻田鶴巻町、市ヶ谷見附、牛込飯田橋、麻布霞町、芝赤羽根橋、の十ヶ所に、更に、本郷蓬萊町、小石川駕籠町、芝白金、麻布善福寺、同區役所横丁、青山一丁目、新宿一丁目、牛込愛日小學校、江戸川石切橋、麻布谷町、等の十ヶ所を増設し、無料配給及び廉賣等を開始した。

地方及び國外の救援

未曾有の大慘禍の飛信、一度全國及び國外に傳はるや、應急の救援は疾風の如くに起り早くも、左の物資の輸送が開始せられた、

○福井縣、白米五百五十俵、梅干其他の食料品、

○秋田縣、米數萬石に日用品、

○北海道、米、砂糖、鹽鮭、にしん、日用品等、海上運送にて發送、

○山形縣、白米及び玄米數千石其他食料發送、

○茨城縣、隅田驛着立白米數萬俵、

○栃木縣、米、副食物、衣類等、

○千葉縣、澱粉五十トン、及びミルク罐づめ等、

其他各府縣より同情の救護品、輸送の全力を盡して、陸に海に、首府を目差して押寄せ、遠く朝鮮、臺灣等よりは、大仕掛の救援策を講じられ、大阪市は壹百萬圓、臺灣は九十萬圓と云ふが如く各地に義捐の據金は行はれた。國外にては支那政府、上海外人團、關東州、香港、米國赤十字、ハワイ日本人團、ゴア洲政府等、先づ率先して救済準備を調べ、米國ヒリッピン駐屯軍にては、早くも食料及び救護班を搭載、十三日頃横濱到着にて航海中との世評あり、猶十一隻より成る海軍輸送船も出動するとの事。

かくして、各歐米在住の邦人等は、遙に隔たりたる海の彼方の故國の、然も其首府たる大東京の、未曾有の慘禍を傳聞して、狂氣の如く奔命、以て救援の志を送らんと努力しつゝある可く、佛國にては一夜の歌舞音曲を止めて、我國の災害に同情の意を表されたりとの情報をも聞き及んだ。

聞説く、安政年間の大震は、行燈時代の、極めて粗雑なる建物によつて成されたる市中なりしも、激震と同時に火災を發し、全江戸の八百八町を灰燼に歸さしめ、死傷算なしと傳ふなど、今日の慘禍を以てすれば、人口に死者に、殆ど比較ならざるものあらん、然れど、永く食に窮して、遂に餓死を見るの慘狀を古老猶記憶に存す、今聖代の時世、國內は愚か、幾萬里の外に於て慘害の飛報忽ちに至り、急遽救援の策は講せられ、數日の痛苦を忍ぶ事に由つて、直に米鹽の補給を受け、生命の危機に觸れざるを得るは、斯かる慘禍の襲來を受け、必死の窮地に陥りし吾人の、せめてもに文化の餘澤と思ひ諦め、相互に恙なきを祝福爲す可きであらうかと思ふのである。

被骸の全般

八大區を焦土と化し残れる七區も亦多少の被害を免れ得ざりし空前の大慘禍

麴	燒失戸數	五、七九三	罹災民	二九、四〇二
---	------	-------	-----	--------

神田	四六、〇七九	一七五、四二一
日本橋	二六、〇二〇	一一五、九〇五
京橋	二八、五九八	一三一、〇四〇
芝布	一五、六五八	七六、七二六
麻布	九	四五
赤阪	二、二七二	九、八三三
四谷	八七四	三、六八八
牛込	四	不
小石川	九五六	四、六九四
本郷	五、八九三	三二、七三六
下谷	三三、五九五	一四五、三〇六
淺草	五二、八八三	二二六、二九〇
本所	五五、三〇〇	二四〇、七八八
深川	四一、八八八	一七四、八六七
計	三二六、〇八七	一三五六、七四〇

右警視廳の調査表を検するに、本所區の五萬五千三百戸最も多數にて、牛込區の四戸最も少數である、殆ど大東京の主要區域七割は灰燼と化したるにて、之等百五十萬

近頃の罹災民が、三十萬餘の死傷者を殘して、一時に八方へ離散したるにて、關西北方、大阪及び神戸市へ、第一回の海上輸送を受けたる者のみにても、二萬餘人と記され、近縣及び東北方面への避難は、陸上に於て一晝夜五萬人を下らざるとか、故に隣接郡部の混雜は實に想像以外にして、如何なる家屋にも避難者の入込まざるはなく、算すれば疊一枚一人の割りともなる可く、中には未成建築の荒壁のまゝなるに襖障子もなき床板の上へ、空俵を敷並べ、其儘一家族膝突き合せて假寓するもあり、一週を経るも、未だ焼けトタンの小屋圍にうづくまり、頼る可き縁邊をも持たぬ身に夜々廣漠たる焼野の果に死屍を焼く、遠近の脂火の閃きを眺めながらに疲れ果て、眠るあり、都會人として誇り來りし榮冠は、一朝にして乞食の位置と變じ、粟稗炊ぐ片田舎にも亦と見らるまじき醜態を曝す、何たる惡因果でかなあらう——、伊まふまじきは都會——とでも云はうか——。

死者は本所區のみにても、十一日の調査に六萬餘人と記されし程なれば、臨時火葬場を、

○淺草區待乳山

○淺草區役所アト

○淺草田中町

○淺草七軒町小學校アト

○淺草東本願寺アト

○築地西本願寺アト

○吉原公園

○神田區三崎町河岸

に増設し、其他一ヶ所に多數の死者ある空地などにては、人夫を督し、其場にて黒焦げの死體を幾ヶ所にか積み分け、焼直しの火葬を行へる所もあり、又或は、縁邊身寄りの者共に探し見出されし死屍の、其場にトタン板を以て蔽はれたまゝ、再び肉親手づからの火葬を受けて、白骨を拾はるゝもあり、未だ之等は死後の幸ひ多き部分にて、如何にせん八大區に渡る所の焼死及び水死者の、餘りに其數の莫大にして遽に手の下し様も有る間敷、電車道路に於てすら、馬匹焼け、畜犬焦げ、電車僅に鐵輪を殘し、自動車たゞエンジンの殘骸を止むるのみにて、其取除きも容易の業にあらざるまゝに、幾多の死屍と共に打混りて旬日も猶ほ捨て置かるゝ始末である。而して一般の死屍を巡視爲すに、空地路上等に於けるは、黒焦げとなり居れる者も、大抵兩腕をはりて面を地に付け、尻を立て、腹這ふが如き形を爲せる者多く、之は窒息して先づ絶命せし證にして、兒童を連れたるは必ず身邊に之を引寄せ、中に母親らしき婦人の、嬰兒の面を乳房にて蔽いたるまゝ焼け爛れて死せるなど實に酸鼻の極にして、其他水中に浮べる者は、火炎に迫られ、髪を焦し、背を無數の腫物の如くに火傷したるなど

水中に飛入つて更におぼれる、之等の死屍は到る所の川筋に、宛然筏を組みし如くに流れ浮み、いづれも全身膨れ上りて、銅色を呈し、各人一樣の面影となり果て、四肢を突ッぱり浮み上りて流るゝ状、血汐の如く濁れる川水と共に、行人の目を蔽はしむるのである。

同じ川筋にても八大橋を架して、帝都を一劃せる隅田川は、白ひげの木橋まづ墜落し、吾妻、厩橋、永代、續いて焼け落ち、僅に木造の千住大橋と、全部鐵石を以て作る兩國と新大橋の無難なりしを見るのみにて、大震に續いて火災起るや、附近の民衆は先を争ふて之等の長橋に集まり、互に幾分かの荷包を携へて此處に戦き立ちすくみつゝあつたのであつたが、各々工事中であつた、板敷の吾妻、厩橋、永代橋等は其中央に搬出されたる人々の荷物が導火線となつて、雨と降りかぶる火の子の爲に忽ち發火し河上に捲き起りし旋風と共に見る見る橋板をも焼き落し、急速の場合に狼狽したる者共は、折り重つて水中に墜落し、互に抱き合ひ縋り合ひ、遂に一同諸共に水死佛と化したのであつた。

全部を鐵石にて作り堅められし、兩國及び新大橋の二橋は、兩岸の避難人員を最も多く收容したれど、飛火したる荷包も石道を焼く能はず、一同必死になつて之を河中に投捨てたるが故に、第二の生命として辛うじ守り來りし貴重品も、無残に抛つ之餘儀なき場合に陥りしに止まり、大河上に架せる石道の恩澤によつて、窒息も爲さず、火傷も甚しからず、一夜を火煙に吹き捲くられし熱氣の苦痛だけにて、何よりの命拾ひを爲せしは、九死に得たる一生であつた。

然し橋梁避難と云ふ事は、八方より火災起り、消火作業の之に伴ふ能はざる如き場合に於ては、最も危険なる避難方法にして、一度窮地に陥るゝの狀態とならば、殆ど保命不可能に到る事は今回の慘害に證されたる事實にて、焼失區域に於て兎も角も、大熱苦と闘ひながらも辛うじて避難を果せしは、兩國、新大橋の二大鐵橋あるのみにて、他は悉く莫大の水死佛を出すに至りたるを見ても、其の甚だ危険地帯なるは明である。

又一方、震害に於て巡視爲すに、震幅約四寸の暴震に遭遇して、最も頑強の抵抗力を保持したるは大石材の建築にて、煉瓦コンクリー、其他精巧なる美術的表装を作せる、凡ての建物は案外の耐震力にて、殆ど完璧を見ず、丸の内ビルディング、郵船會社新館、三越呉服店等其他皆同様の醜態を曝露して、吾人の豫想を裏切つてゐる。倉庫建築亦然りて、大震後の火災を受けたるものは、土藏、煉瓦等しく陥落焼失の厄に遇へる中に、石造のもの比較的多く物品擁護の任を全うしたのであつた。

又普通和風家屋の被害に就て考ふるに、震動に由つて倒潰せる、平家及び二階建の、其大部分は前方に傾斜して、側面、或は裏口に向つて倒潰せるものを見ず、慮ふに、和風の建物は、其習慣上、裏口に向つて種々多様の建増や、差出し等の作事を爲せる

ためにや、然れば屋外逃走の場合も、斯かる家作りには裏口より脱出なすの得策にて、前方は道路なるまゝに勢ひ人情として表口へ走らんとすれど、瓦の崩落に遇ふの危機と共に、傾倒せば必ず軒に打たれ棟に敷かるゝの恐れあり、裏口より脱出せんか、瓦の崩落に遇ふも、何等かの雑作の差出しにてもあらば、直接頭上に落下するの厄を免れ、倒壊の下敷ともならず避難し得るのである。若し又、屋内にあらば、古老の云へる如く、簞笥等の可成大なる障害物の側らに潜むを可とす、倒潰後の家屋を發掘なして生命の全かりしは大概之等の人々にてありし實證頻々たり、又階上に在りし者は比較的無事を得たれど、倒壊家屋の模様を検むるに、等しく裏口に面せる位置に在る可く努力なす可きである。

概して、對震的建築物は、直立狀にして頭勝ちのもの最も危険多く、土臺廻り柱下等の腐朽せるものなどは、斯かる大震に遇ふて家根瓦の重量を支持し得可くもあらず、之等は論外なれど、我が帝都の如く震災に對して絶對安全を得られざる地勢に建築なすに當つては、和風作りは二階建なると三階建なるとを問はず、必ず階下の地盤は、より廣き面積に基礎を据ゆるを得策とす。

各區被害の實況

●日本橋區

焼失戸數二萬六千二十戸、罹災民十一萬五千九百五人と調査發表された、帝都の中心地帯、商業股販の中樞たる日本橋區、徳川時代三百有餘年來、大江戸の商權を握つて赫々たる歴史を有する日本橋區、凡そ全國到る所に於て、東京を知る者の日本橋區を知らざるものありや——。

宮城の大手、眞東に位して、其の北部は大川を境界とし、上は兩國より下は箱崎町に及び、西に麴町區、南に京橋區、北に神田區と隣接し、區内には株式、米穀、綿糸の三大取引所所在し、五ヶ町に渡る魚市場あり、野菜市場あり、有ゆる大銀行大會社にて、本支店の營業所を設けざるものなく、大東京の、商業、經濟、等の主權を維持し來りし日本橋區——。

大厦高樓は九月一日以前の夢と消えて、何等の面影も残らばこそ、たゞ見渡す限り一様の焼野原！。大震、火災と變ずるや、忽ちにして猛火の包圍を受け、西北方面は本石町小傳馬町馬くろ町及び淺草橋對岸より火煙唸りを生じて押寄せ、西南方面は横町龜島町方面より、東は箱崎四ヶ丁火の海と化し、旋風火焰を煽り立て、中州を一なめにし、夕刻に及びては次第に追ひ詰めらるゝ避難者の衝突にて、人形町通り濱町通り共に大混雜亂に陥り、大河端に免るゝ者、河岸通りを米澤町より淺草橋左工門橋に血路を求めて、上野方面の空を目差して免れんとす者、いづれも必死の努力にて押合ひ揉合ひ、半半死生の體になつて突進なすのであつた。一方西南方面の人々は、大方東京

驛馬場先方面を目掛けて、八重洲橋吳服橋、常盤橋、鍛冶橋等より、煙を潜り火の雨を浴びながら崩雪を打つて丸の内へと免れた。

夜に入つて、人形町界隈も一掃され盡して最早一戸の餘す所なく、曉に至つて之を望めば、たゞ餘燼の黃煙天を蔽ひ、所々に倉庫の未だ全く焼け落ちざる物のみ、火焰を吐きつゝあり、和泉橋より箱崎郵船倉庫に達する一直線の道路は、二十丁餘りたゞ電車の架線の半ば接続せるを見るのみにて、十五銀行、モスリン會社、其他二三の大建築の外廓を數ふるの外は、全く噴火口の周圍を見る如き燒野が原である。

小傳馬町、本石町、室町、通三丁目、いづれも一様に燒瓦を以て蔽はれたる中に、昨日迄は錦繡玉羅に充滿し、貴重百貨塵も止めず配列されてありし、三越、白木の大店舗も、二た目とは見られざる醜態となつて、恣に破壊の惡魔の手に弄ばれたる淺間しさ、それに隣る魚市場も四ヶ市も見る影もなく踏みにじられて、三ツ菱七ツ藏の前に千鱈のムシ焼けたるなど、うづくまつて拾ひ食ひなす者もあり、兜町、蠣殻町、等の大取引所も、鐵橋を挟んで相對峙し、刻々に行はれる建株賣買の大取引に、日々幾千の紳士紳商入込みて、暴騰崩落に膽を冷やし、高低波瀾の都度に右往左往に人走りて、清算取引の潑刺たる活氣を示せしもユメ！ 五萬石賣らう、よし買つた、十萬石買はう、よし賣つた、伸び上つて振る手先の拍手一つにて、日々に大石數の賣買を場臺に記され、午前十一時の本場立會には、こゝ獨特の名物として強弱火花を散らして相

闘ひし、その目覺しさも今は餘燼の煙と化し、鐵橋親父橋も水道鐵管を残して墜落し、一石橋より東へ流れて迂曲しつゝ、新堀より大川に出づる此川筋は、焼けしもりたる數多の船舶に絡みて、半ば火傷した水死佛の算を亂して川面を蔽ひ、殊に日本橋より江戸橋以東に渡りて酸鼻を極め、片舟も容易に棹さすを得ざる程にて、運拙き何人の慘禍なるや、大東京の然も日本橋の、其川筋に斯くも多くの死屍の筏をなすとは、大自然の餘すなき暴虐を憎んで、轉た無量の感慨に打たれるのである。

●淺草區

燒失戸數五萬二千八百八十三戸、罹災民二十三萬六千二百九十人と調査發表されたる、東都第一位置の名物區も、大震後忽にして、區内七ヶ所より火災起り、折から一日の事とて六區公園に集れる群衆も平日に倍し、軒を並べし活動寫真其他の興行場より逃げ出づる群衆は人波打つて遊園地帯及び觀音堂の周圍に押寄せると同時に、八階以上を震ひ落された十二階の崩壊によつて、其附近の潰れ家より發火となり、千束町一帯は忽ち火焰に包まれ、高塔の犠牲になつたる多數の慘死者の死屍をも收容なす暇も有らばこそ、猛火に追はれて公園内に入込む人々潮の如く、さしにも廣やかなる觀音堂の境内も公園も、時を移さず群衆充滿の有様にて、兒童連の馴染深き名物花屋敷は即時に獅子虎豹其他の犖猛なる獸類の射殺を行ひ、象一頭及兒虎六疋、水鳥などを五重の塔附近に避難なさしめ、急速に非常時の所置を取つた。

一方の火の手は南千住より花川戸へ掛けて暴れ狂ひ、又一方は藏前高等工業の大建築より起つて附近一帯に火先を擴げ、北に吉原の大遊廓を一掃し、南に左衛門橋附近を極めて僅に燃え残して、曉に及び鎮火した。

焼跡を巡視なすに、此區内に於ける唯一の誇りは、斯かる大慘禍に遇ひて全然其の威風を變へず、十八間四面の御堂の瓦一枚崩れず、二王門五重の塔を隨へて多くの避難民を徹宵守護爲し給ひたる觀音堂である。

念彼觀音力 火坑變成池

との誓ひを目の邊り實證せられたる心地がするのであつた。

之に引替へ、悲惨の極とも云ふ可きは、吉原遊廓にして、幾千の娼、幾百の妓を圍ひ、不夜城の名を全國に轟かし、春夏秋冬歌舞音曲の斷ゆる時なく、酒池肉林の享樂を恣にせし、其の大厦高樓の一廓も、焦熱地獄のドン底へ叩き込まれ踏潰されては見る影も残らず、裏門内の廣場に、非常用に設けられたる池中へ、逃げ遅れたる多くの女の進退谷まつて飛入りたる者共三千人を越え、其八割は積み重つて悶死し、上なるは焦げ下なるは溺れ、粉タイも紅粉も有らばこそ、翡翠の髪は焼け縮れ、瓜紅の腕は胴色に腫れ上り、一目鬼氣人に迫まるを覺えしむるのであつた。

山間僻地の兒童の耳朵にも傳はれる、東都名物の淺草公園も、區内の誇りであつた附近の繁榮も一様に破壊し盡されて、仲見世通りの赤煉瓦も、兩側に竈を並べし如

く燃え落ちて、昨の殷賑も夢幻しの如く、並木通り、駒形堂共に見渡す限りの燒原、吾妻橋も落ち、厩橋も焼け、代地河岸に割烹の粹を競ひし、龜清、柳光亭、深川亭、佃松、などの華美なる建築も、唇氣樓のその如くに煙烟と消えて跡なく、柳橋の下紅燈流るゝ大川に臨みて、撥音牙ゆる絃歌の粹を、再び又此土地に聞くは、さて何時の事やら――。

○下谷區

燒失戸數三萬三千五百九十五戸、罹災民十四萬五千三百六人と調査發表せられた。震害の後早くも三の輪方面より出火なし、忽ち電車々庫をひと揉みにし、坂本通りを入谷町に向ひ、淺草千束町方面の火先と合したのであつたが、折よく朔日にて、三河島日暮里、尾久町方面に根據せる、多くの工場は休業にて、中にも數多きセルロイド工場など皆慣例上の休業なりしまし、其方面の失火なく、幸にして上中下の根岸一廓も無難なるを得たのである。

比較的出火は早かりしも、風向きの有利なりし爲め、二長町附近をウロ拔きたる火の手も一時鎮靜して、一方の大火脈は入谷町より改正通りを越え、萬年町山伏町に擴がれるまゝ、御徒町通りも左衛門橋美倉橋筋に火の手起らず、故に隣區より一勢に此方面へ避難民の殺到し來り、上野方面への脱出を得さしめたのであつて、萬一にも、二長町の火の手猛烈に之等の通路を横斷せんか、日本橋淺草神田等より押寄せたる巨

萬の罹災民は、前後を猛火に包圍され了つて、殆ど其死傷想像も及ぼざる程の、大惨害を蒙りしならんも、曉に至るも猶此邊無事なりしは、稀有の幸であつた。然れば、此区内に免れし群衆は、上野の山深く分け入りて、日暮里、田端、谷中の空へ彷徨ひ出でたる者もあれど、多くは東臺の周圍に立ちすくみて、疲れ果てたる身に火の海を望みながら一夜を経たるにて、此方面に血路を求めたる人々は、全部生命と持荷とに恙きなを得たるのであつた。

乍然、翌二日、淺草下谷合併の火先は遂に竹町二長町に延びて愈々勢を得、無難と信じられたる御徒町を火焰につゝみ、夜に入つて怪しき風聞と共に、一方の焼残りたる廣小路附近更に火の手を擧げ、松坂屋呉服店より山下に延び、遂に萬全を期したりし上野停車場をも一掃なし、下車坂に於て漸く焼止りたるは第三日の曉であつた。斯くて下谷區は、再度の火難に遇ひ、人口甚だ少き北西部の、上野公園及不忍池畔を包容したる一帯を残して、戸數の八割は灰燼に歸した。

惜む可きは上野驛にて、多數の列車を焼却し、東北及常盤線の運輸に大支障を來し避難民の救援をして遅延なさせしめたるは、甚だ遺憾なる次第で、上野驛より鶯谷日暮里の一哩餘の線路上には、列車開通の時を待つて野營なす、人々に埋まれるのであつた。

火災を危く免れた、根岸及谷中方面は、十餘萬の罹災民を收容して、其混雜や到底

記述の盡し能はざる所にて、各戸皆人員を以に充滿し、糧食の配給、日夜の警戒、兵士、警官、在郷軍人、青年團、及自治團等の活動殆ど不眠不休の状態にて、避難民及免災區域の擁護に務むるのであつた。

○神田區

焼失戸數四萬六千七十七戸、罹災民十七萬五千四百二十一人と調査發表された。外神田に於て佐久間町元久右衛門町の河岸寄り、和泉町松永町の一部等が、稀有にも惡魔の手より漏れ残されたるのみにて、御成街道の東西は云ふ迄もなく、北方三崎橋より左衛門橋に到る神田川を堺に、南方は外濠及び今川橋々下の堀割りを堺とし、一戸も止めず全滅してしまつた。

曾て大正二年の始め、大火を起して区内の半ばを焼失したる當區は、それ以後の新建築や道路の改正にて面目を一新し、多町を中心とする神田ッ子の俠氣今に存し、市場は日々曉より野菜果實の取引盛んに行はれ、又裏表の神保町通りには、書肆軒を並べて天下の圖書概ね此處に蒐集され、日夜學生の往來絶ゆる事なく、諸學校亦此区内に存在せるもの多く、明治、中央、日本、商科等の大學、外國語學、其他諸種の中學及び女學校等、いづれも烏有に歸して、東都幾十萬の學生皆研學の校舎を失ひたるは最も悲しむ可く。神社には官幣大社神田明神ありて、麴町山王の祭り、深川八幡の祭りとを併稱して、東都三大祭禮の一つにして、歳々之を行ひ、時に古來有名なる、鐘馗

熊坂の花車を多町に於て公衆に觀覽なましむる事あり、恐らく之等大江戸の面影を偲ぶ寶物も、明神の社と共に火焰の底に葬られしならん。

萬世橋、昌中橋等は、石造の爲め墜落を免れたれど、市内電車の交叉點として、第一の混雜を極めし、須田町より今川橋通りも二六新聞、松屋呉服店、神田驛等悉く焼け落ち、区内の高地駿河臺より見渡せば、何處をいづれとも見分け難く、唯一の古着市場でありし柳原通りより、菓子製造業の團結せる龍閑町、大和町に至るまで、たゞ一と延べの赤土と化し、長蛇の如く神田川の東に走れるを見ろのみである。

◎本郷區

燒失戸數五千八百九十三戸、罹災民、三萬二千七百三十六人と調査發表せられた。

此の區内には、最高の學府たる帝國大學及び第一高等、中央の面積の大部分を占める市内最高地に位し、元町には水道裸の給水場を設けられてあり。大震の後、砲兵工廠の失火は、猛烈なる勢ひを以て本郷臺へ吹き付け、駿河臺よりお茶の水へ突進する火先きと合して、南西の風に燃え廣がり、あはや全区も一甜めと思はれしに、僥倖なるかな、火先本郷三丁目に達する頃、遂に風位東南に變じたる爲め、危く全区への延焼を免れたが、たゞ惜むらくは、東大構内より火を發して、醫化學教室、生理學圖書館、法科及文科の教室等、其他全燒坪數七千五百五十三坪、半燒十六坪、損害見積り約三百七十七萬圓と記されたる事にて、猶ほ湯島の聖廟と稱へて、古來文學の士に由つて國

寶的に保護珍重されつゝありたる、孔子廟を烏有に歸し、安置されて有りし由緒ある孔子の像も燒失し了つた。

乍然、彼の刹那に於て若し風位の轉換なかりせば、三丁目より直に本通りへ燃え進み、帝大は勿論、一高の校舎も無事を得ざるのみか、根津、駒込方面へ延焼なして、遂には東臺の背部を襲はるゝに到りしならん、さすれば今日の如く、上野以北や、片町駒込通りに於て、不足ながらも飢渴を凌げる巨萬の人々の、其の成行や如何にありしならんか、想像するだに寒心の至りである。

斯く区内の面積に於て約四分の三を火災より免れし爲め、神明町より上富士前町に及ぶ沿道は、全く避難民にて充滿され、隣接那部の應援を得て物資の配給に忙殺さるゝ傍ら、各店舗は商品を擧げて賣り盡し、路傍の立賣り繁昌を極め、水團、煮小豆、うどん、蕎麥、玉子、果實、陶器、シャツ股引、足袋などの、粗品高賣りも忽に品切れとなる状態にして、其如何に物資の涸渴せるがを窺はれるのである。

◎小石川區

燒失戸數九百五十六、罹災民四千六百九十四人と調査せられた。

区内の南端、砲兵工廠の爆發に由つて、激震の後直に火を發し、其勢ひ極めて旺んにして、氣流の方向宜しきを得たる爲め、眞先に本郷臺へ吹き付け、後次第に風位轉換して、神田及び飯田町方面へ火先の向ひたるが僥倖にして、区内は僅に新諏訪町

より牛天神へ掛へ、江戸川を境に面積の約八分の一を焼失したるのみにて危くも鎮火となつたのである。

砲兵工廠所在地は、舊幕時代に於ける水府公の上屋敷にて、邸内の北部に有名なる後樂園あり、其の地所甚だ廣く、周圍は二十餘丁にも及ぶ可く、山あり池あり、森林あり、外廓は丈餘の塀を繞らし、内に幾棟かの製作場散在し、いづれも煉瓦石造、コンクリート等の宏壯堅固なる建築なりしが、峻烈なる大震に遇ひ、倒潰續出、遂に爆發出火の止むを得ざるに立到つたので、日夜數萬の工人出入し、兵器の製作に従事せるまゝ、此日の死傷も未だ詳かならざれど、精査の上は驚く可き算數を出すならんと思はるゝのである。

此區への避難者は、神田方面最も多く、猿樂町、神保町、三崎町及び飯田町附近の人々飯田町より江戸川邊に出で、區内へ入り、傳通院境内、久堅町、植物園と北部へ突進して、下町一帶の火の海を望見なしつゝ、徹宵戦々兢兢として野營の一夜を明したのであつた。

翌朝よりは、愈々山の手無難と定まりたるまゝに、焼跡附近に野宿したる群衆の、次第々々に八方へ、食を求めネグラを尋ねて散り始めしに、此區も到る所へ罹災民の詰め掛け押寄せ、忽に物資欠乏を訴ふる聲頻りに起り、いづれも同じ避難區域の、不眠不休にて糧食の補充に務むるのであつた。

◎麴町區

焼失戸數五千七百九十三戸、罹災民二萬九千四百二人と調査せられた。

此の區内は、他區と違ひて、畏れ多くも宮城の所在地なれば、慘禍來と等しく、一般市民の甚だ懸念措く能はざりし次第にて、初發の激震後、僅々七分間にして、十二區六十一ヶ所の出火となるや、消防能力の半數は宮城擁護の命令に馳せ參じ、只管安穩無事を祈るのであつた。

最初、有樂町の某活版所よりの發火は、烈き南風に煽りを受け、雷鳴の如き鳴動を伴ひて捲り立て、警視廳、帝劇等の大建築へ見る／＼燃え移り、火焰愈々猛烈を加へて、風速更に速度を増し、一丁ロンドンの評ありし、東都第一流の建築地帯が、瞬間にして全く火焰の包む所となつた。

斯くして火先は二手に分れ、一方は濠端を堺に西南方面へ延び、永田町、平河町へと突進し、遂に番町富士見町に及び、又一方神田方面よりの火先は、神田橋を越えて大藏、内務二省の建物を襲ひ始めしが、此時より風位東南に轉じたる爲め、丸の内に暴れ狂ふ火先は、京橋方面へ向つて突進し、遂に丸ビル、東京驛等の大建築を焼却するに至らず、又大手町より吳服橋へ通する邊りを、迂曲してウロヌキ殘せしは誠に僥倖と云ふ可く、京橋、日本橋方面の避難者の、夥しき群衆の漸くにして東京驛前に達し、或は馬場先内に入り込むを得たるも、この風位轉換の賜物にて、然らざれば、彼の避

難者のたゞの一人たりとも、外濠を越えて丸の内に入る事は叶はざりしならんと思はるゝのである。

而して、大手町を蹂躙せる火の手は、道三町、錢瓶町を焼拂ひ、終に常盤橋方面より日本橋區へ脱出した。此邊には諸官省のみ多く、鐵道省、興業銀行、中央電話局、會計検査院、稅務監督局、特許局鑛物署等、此附近に隣接せるまゝ、皆一様に災害を蒙りて全滅を告げしが、中にも印刷局にては、官報印刷所倒潰の爲め、折から作業中の職工百餘名、突嗟の場合免るゝ路なく、無慘にも壓死全滅したるは、追悼の涙禁する能はざる次第である。

宮城の御專は畏れ多し、爰に謹んで其の御無難を奉祝し、帝都再建の一日も速ならん事を祈るに記述を止め。

一方東北方面に向ひたる延燒區域を巡視すれば、日比谷公園の西方、永田町より平河町と、各國大使公使館、及び高貴の邸宅、諸官省等を燒き荒らし、麴町通りを番町へ貫き、八九丁目と靖國神社等を危く殘して、火先は富士見町に及んで止まつた。

第一日の夜より二日に渡り、東京及び廣前は一面の人波にて、日比谷公園は元より、宮城を前に、千代田町、實田町、祝田町の芝生には、楠公の銅像附近より一帯の避難民にて混雜を極め、紛れし人の名を呼び交はす聲々物凄く、野營の用意に右往左往走り歩きて何かの材料を運ぶ男共の、雜沓を縫ふて頻りに行違ひ、燒トタン、銅線、

鐵棒、木片、風呂敷など松樹の根方に絡め、張り枝に懸け、智慧さまの工夫を凝して小屋掛けの準備に忙しく、一見乞食の大部落を成せるが如く、夜に入れば片敷く袖の肱枕に聞くコホロギの音も腸に染みて、昨日に變る己が身を、夢かと計り疑はるゝ心細さ、夜更人靜まる頃は、六尺の男も獨りひそかに流涕を耐へ得なかつたであらう。

◎京橋區

燒失戸數二萬八千五百九十八戸、罹災民、十一萬千四十人、と調査發表された。

此の區内は、最初隣區山下町方面よりの火先に侵入され、外濠を越えて、宗十郎町、八官町、日吉町、出雲町など、忽ちにして火焰の巷と變じ、東都第一位の花柳界も、艶態嬌姿は木つ葉微塵と渦巻く黒煙に吹き散らされ、美人化して惡鬼の形相となる物凄さ、火勢愈々猛烈に銀座通りを突破して、木挽町より築地方面へ飛び、遞信省、農商務省、精養軒などの大建物より出火となり、折からの西南風に煽られ、猛り狂ふた火焰は平押しになつて東北へ進んだ。

區中には、時事、朝日、萬朝、讀賣、やまと、中央等、重なる新聞社あり、各種の雜誌社あり、本願寺あり、新富座あり、海軍大學、水交社、造兵廠、中學校、交換局第一相互ビルデック、星製藥等主要なる建物多々存在し、東南の海上に佃、月島を隨へ、常に日本橋區と併稱さるゝ、市中屈指の繁華の地である。全區を横斷せる火焰の幅は、其まゝ眞一文字に捲くし立つて、尾張町を越えへ京橋を飛び、丸の内方面よりの

飛火と合して愈々火勢を増し、支ゆる建築もあらばこそ、たゞひた押しに全区を焼き拂つて日本橋區へ突入した。

區内にて、最も悲惨を極めしは佃、月島の二ヶ所にて、地震、火災に加ふるに、海嘯の襲來となり、其死傷甚だ多く、逃げ遅れたる者は、對岸一帯の火焰に渡るを得ず、一ヶ所の橋梁亦焼落ちて全く孤島の状態となり、火に追はれて海の淺瀬に投ずる者、覆没したる小舟の底に、幾人か取すがりて海上を漂ふ者、遂に全島は水火の虐殺に遇ひ、其南西端を僅に残したるを不思議として、曉を告ぐる頃漸くに鎮火に至つた。

區内よりの避難者は、大部分日比谷、丸之内、方面へ免れ、佃、月島の多數は、海路芝浦へ逃げたのであつた。

◎芝 區

焼失戸數一萬五千六百五十八戸、罹災者七萬六千七百二十六人と調査發表された。最初西臺町の高輪御殿及び愛宕町の慈惠病院先づ火を發し、續いて田町八丁目へ飛火したる火の手は、西南の風を負ふて電車通りの兩側を焼き拂ひ、三田車庫の附近より遽に勢ひ倍加なし、金杉芝園橋方面へ向ひ、遂に愛宕下の火の手と合して暴れ狂ひ、増上寺を中心とせる芝公園内の一部、及び榮町八幡町、神谷町巴町側の區境を残して、其他の東北部は芝口より沙留に至るまで、悉く灰燼となし畢つた。

焼失區域は、全面積の約三分の一なれど、其割合に類焼戸數の多きは、區内最も人家稠密の部分を失ひたるに由れるにて、其被害も甚だ少からざる次第である。

されど、恐れ多きは高輪御殿の炎上にて、區内及び麻布區より眞先に消防隊差向ひ、警衛の軍隊いち早くも馳せ參し、必死の消防に務めたれど、水利を失ひ、烈風を受け、萬策盡きて遂に全焼の止むなきに至りしは、遺憾至極の次第にて、痛惜措く能はざるところである。

然るに一方、公園内の三縁山増上寺は、關東に於ける淨土宗の大檀林にて、傍に徳川家歴代の靈廟も存置し、東都の寺院中一方の權威なるが、幸ひにも出火に遭遇して風位の轉換宜しきを得たる爲め、危く紅舌を免れ、淺草寺と同一の幸運を擔ひ、東都の西南と北東の空遙に、變らざる靈姿を相對峙することを得たのは祝す可き次第である。

區内には、芝濱海岸一帯の、廣大なる埋立地を有することゝて、他區よりの避難者日に夜に増加なし、加ふるに、軍艦商船沖合に集合なし、食糧其他の物資陸上げ、及び關西方面避難者の輸送等にて、絶えず數萬の人員雜沓し、舩、通ひ船等の往復織るが如く、此區ならでは見る事を得ざる、悲壯の實況である。

◎赤阪區

焼失戸數 二千二百七十二戸、罹災民九千八百三十三人、と調査發表された。區内には、赤阪離宮、青山御所あり、溜池通りの出火となるや、即時軍隊の出動と

なり、北東部一帯の警衛嚴かを極め、全力を盡して飛火の災害を防きたるまゝ、田町、溜池等の區境を焼拂ひたるのみにて、山王下より近衛三聯隊の高臺に至る中間の一帯を焦土と化し、流石の猛火も暴威衰へて鎮靜に歸した。

此の區内は、其の約四分の一を離宮及御所練兵場等の占む所となり、兵營と墓地とにて他の約四分の一を埋めたれば、漫りに火脈の延長を許さず、遂に最も人家稠密せる小部分の燃焼にて事了り、酷烈なる慘禍を免れ得たるは不幸中の幸である。

焼失區域に、は人も知る有名なる花柳界あり、新橋に次ぐの繁昌を極め、妓舍軒を並べ、割烹散在し、南に星ヶ岡を仰いで綠酒を酌むの粹客絶えず、區内第一の賑ひをなせし土地であつた。

隣區の罹災者は勿論、遠く下町より火に追はれたる人々、此區の餘裕多きを知つて押寄する者踵を次ぎ、青山本通りは宛ら大軍隊の行軍の如く、間斷なく人波打つて練兵場の廣地を目掛け、野營の陣を張るもの數千、爲に見渡す限りの原中は殆ど埋め盡くされてあつた。

◎四谷區

焼失戸數 八百七十四戸、罹災民三千六百八十七人と調査發表せられた。

此區のみは、往時豊多摩郡の管内に屬した、内藤新宿二丁目以西の火災にて、新宿の車庫に渡つて南北に廣く、旭町、花園町間の數丁を焼拂ひ、區内其他への飛火もなく、

比較的少部分の災害で畢つたのは何よりで震害の程度も各區と大同小異にして、殆ど區の一割を焼失なしたるに過ぎねば、こゝにも遙々下町方面よりの避難民來襲し、諸物品の購買頻りなるまゝに、忽ち物資の欠乏に陥あり、却て區の罹災者達が隣接郡部へ退却なき如き状態にて、在郷軍人團青年團等は警察の應援を得て、食料蒐集に全力を注いでゐる。

爰に氣の毒なるは、今回區の罹災區域内には、近々二三年間に一ヶ所にて三回も出火に遇ひたるもの少からず、茫然嗟歎なす之等の人々を見て、頗る同情の感の胸に迫るを覺えた。

◎麻布區

焼失戸數 九戸、罹災民四十五人、と調査發表になつた。

區内は、芝、赤阪等の飛火と共に、小火を出したるのみにて一般震害の他は、殆ど半込區と等しく被害を免れたるは幸運であつた。

他區より物資の徵發、及び避難者の殺到にて、何處も同じ混雜を極めをれど、面積に於てより多くの餘裕を持てる當區は、罹災者收容好適地と信せられるのである。

◎半込區

焼失戸數四戸、罹災民數不明と、發表せられた。

此區は、僅に飯田町方面の飛火と、新宿方面よりの飛火にて、二三ヶ所に小火を

起したるのみにて、直に鎮火したれば、火災に於ける被害は、數字の示せる如く、極めて微々たりしは不幸中の幸福にて、物資豊なる神樂坂通りには、各區より購買者殺到なし、多數の避難民と共に頗る混雜を極むるのであつた。

◎本所區

燒失戸數五萬五千三百戸、罹災民二十四萬七百八十八人と、各區に於ける災害の、最多數位を發表さるゝに至つた。

時、本所區！、災害慘中の慘たる本所區！、

北方は向島堤下の小部分（三國社、牛御前等）を残して言問の先にまで延び、東は松代町、南は徳右衛門町、西は千歳町以北大川を境とし、全區悉く焦土と化した。

區の主なる建物には、兩國驛、錦糸掘驛、第三中學校、交換局、龜澤町車庫、郵便局、徳川及び安田邸、大日本ビール會社、國技館其他あり、南東部の半面には種々の工場輻湊し、東都に於ける工業界の牛耳を執れる所にて、常に林立せを煙突によつて東都の空の一隈を燻染し、巨萬の職工を包容して、獨特の殷盛を極めたる土地。最初の激震によつて、既に多數の壓死者を出し、驚愕顛倒、應急の措置に奔命せる折から、區内は忽ちにして十四ヶ所の出火となり、最も速に全區猛火の重圍に陥りし、埋没せる死傷者を救援收容なす暇もあらばこそ、幸にして發掘され、又は自ら屋裏より辛うじて這ひ出せる重傷者は、血塗れ泥塗れのまゝ、荷車、自動車等に男

女の別なく貨物の如くに積み載せ、混亂せる往來の群衆を叱汰なしつゝ、一方に血路を開いて脱出するもの、何人も面を外らす程の慘狀にて、其間も聊かの猶豫なく、各所の旋風に伴ひ、猛火は平原を走るが如く速に、倉庫を筒拔き、家屋を蹴散らし、午後四時を過ぐる頃ほひには、大川端より見る本所一帯の地は、寸隙もなき火焰の巷にて、殷々たる爆破の響、百鬼の吼ゆるが如き煙渦の唸り、言語に絶したる物凄さ——區内へ渡せる大川筋の三大橋（吾妻、兩國、厩橋）の内二橋は、燃燒せる夥しき荷物と、逃げ惑ふ避難の群衆とを乗せて、無慚にも滔々たる濁流に墜落し了り、區の中央部よりの通路は、西に兩國橋あるのみとなれる頃、横網一丁目の區域を獨占せる、舊陸軍被服工廠跡の廣漠たる空地は、唯一の安全地帯と考へられて、遅れ馳せに押寄せ來る人々無量三萬數千人に及び、さしにも廣漠たりし空地も、各自持荷の傍に蟬集せる避難者にて過半を埋め、名狀すべからざる混亂裏に、時刻は次第に移るや、火の手は大川端安田邸、外手町、龜澤町の四面より空地を圍み、激しき氣流の渦を起して避難民の頭上に火の雨を降らし、トタン板燒蒲團、果は破壊されたる箆筒の如き物まで、何方よりとも知れず黒煙の中より落下し來り、群衆一同は絶對絶命に陥り、地上に面を伏せて悲鳴叫喚し、腹這ひて突破せんとすもの、顛倒折重なつて悶絶するもの、遂には全く火焰の懷に抱かれりて、其數三萬二千六百八十餘人の生靈は、爰に及んで慘死の止むなきに至つたのである。たゞ一ヶ所に於て、斯く多數の犠牲を出せし

は、今回の大惨禍中他に見ざるの一大痛恨事にて、法曹界の古參磯部四郎博士や、相生署長一家族及び部下の巡查十六名、某大銀行頭取、其他判明せ々名門の士も、多數此中に葬り去られたるにて、塀一重の安田邸にては、黄金王善雄氏一家が主人以下全滅に歸した。

翌早朝の巡視によれば、殆ど区内全部の暴狀一步の進退を許さざる程の混亂にて、眼眩み、足焦ぐる、その道路跡には、馬斃れて腹焼け裂け、犬猫焦げて白骨を露し、放置せられたる電車、自動車、自轉車、荷車、いづれも鐵材のみを残して路面を塞げる中を、何處にか免れて九死に一生を保ちたる人々、總身泥塗れとなりて狂氣の如く馳せ違ひ、死屍に躓き銅線に絡まりつゝ、何人かの名を聲を限りに呼び求むる有様、天魔惡鬼の彷徨せるが如く、僅々半日一夜のタイムによつて、斯くも變り果てたる人間社會の滅亡を見んとは、たゞ切齒天を睨むの外ないのである。

由つて区内には殆ど露宿の適所少なく、國技館跡、汽車線路等は、早くも満員を告げ、向島以北、龜井戸以東へ免るゝ者續々として、南葛飾郡内は、之等避難者の殺到を受け、各村民總動員にて其收容に努力し、中川以西の一帶は不眠不休の狀態であつた。

◎深川區

焼失戸數四萬千八百八十八戸、罹災民十七萬四千八百六十七人、と調査發表になつ

た數字上の被害戸數は、八區中の第四位を示せるが、此區に於ける焼失としてはこれが全滅なのである。

全區の半は、材木堀、海等到る所に散在し、四通八達の河川は、区内を縦横八方に流れ、市中唯一の水郷とも云ふ可く、故に水上運輸の利便を頼みて、材木商、倉庫業等甚だ多く、米穀は勿論、砂糖、鐵材、洋紙其他一般の物資にして、貯藏保管せられざる物とてなく、全市民の物資供託地とも云ふ可き所なれば、此區にして火災を免れたらんには、米穀、木材、其他の物資補充に、斯の如く困難を生せずして事足りしならんも、全區の諸川に臨んだ棟を並べし、凡ての倉庫は其大小を問はず、悉く在荷のまま、焼け落ち、木材も亦、水に浸る物の他は、類焼鳥有に歸したるは惜むべきである。

区内主要の建物には、澁澤倉庫、東京三ツ菱倉庫、正米市場及び、小麥、豆粕等の第三部取引所、淺野セメント、岩崎別邸、中央糧秣廠、商船學校、水産講習所、工業試験所、東京紡績、東京製鋼、富々岡八幡宮、不勤堂、辰己劇場、洲崎遊廊、其他多々あり、東都の辰巳に位して舊幕時代は盛に俠名を唄はれし土地にて、今に全區各所に任俠の風あり、その八幡宮の祭禮の如きは、帝都三大祭禮の主位にして、神輿五十餘體、八月十五日に於ける整列渡御は盛觀を極め、区内の雜沓夥しく、往時永代橋墜落の有りしは此時の混雜にて、一般の記録に載れる所である。境内に神輿藏あり、紀

文大盡の獻納に係るものも一體保存せられてありしが、五十餘體のそれと共に、今は一荷の灰燼と消えて跡なく、公園内各寺院も亦悉く烏有に歸して了つた。

激震突發の後、忽ち全区八ヶ所よりの出火となり、早くも洲崎遊廓全焼し、藤倉電線の大工場亦火焰となりたるが、西北には大川三大橋を架し（新大橋、永代、相生）、萬年橋、上之橋、下之橋、練兵橋等、小名木川となり、仙臺掘となり、四川の注入は区内に入つて無数の支流を生じ、殆ど河川によつて環境をなせると、大倉庫、木掘等の火災防止物の存在多かりしだけに、他區の住民よりは稍々避難に猶豫の時を移したる者多かりし模様にて、區の東部には可なり多くの安全地帯を有しながら、いづれも居住地を遠く隔たらずして滅亡せる者少からざるは、遺憾の至りである。

越中島、平久町以南の理立地、岩崎公園等は、最も手近の避難場所にて、大部分の收容を遂げられたれど、糧秣廠に逃げ入りたる群衆には、多大の死傷を出し、永代、相生の橋上に免れたる人々もついに死地に陥つて了つた。

中にも、最も酸鼻を極めしは、佐賀町以東の一廓にて、多數の倉庫、數多の船舶を頼みて逃げ遅れたる人々は、次第攻めに遇ひてついに猛火の重圍に陥り、遠く免れんにも時遅く、火焰迫り橋梁焼け、進退谷まつていづれも家財と共に船舶へ移動した。各河筋に繋留せられたる大小の傳馬、及び達磨船は、之等の人々を満載して夜を迎へたが、漸次各方面より火に追はれて逃場を失ひたる人々、皆附近の河岸を目掛けて集

り來り、何人の船たるを問はず、見當り次第に救ひを求めて飛乗り走り込み、各船互に舷を並べて川面を埋め合ひなれば、進退を試みんにも竿さす術なく、シートあるものは之を蔽ひて河水を注ぎ、あらゆる手段を以て火の雨を防ぎたれど、頼み切つたる沿岸の倉庫一勢に發火するに至つては、最早人力の能く及ぶ所にあらず、遂に舷側より舷側へ火を導き、窒息に悶へて河中に身を役する者相續き、沿岸に這ひ上つて何れへか免んとすれば、忽ち猛火に迫られて昏倒し、水中に有つて泳がんとすれば、溺れんとす者に抱かれて自由を失ひ、爰に於てか、血氣の水練者も、三歳の兒女も、等しく絶對絶命にて、同じ河底に葬らるゝに至つた。

斯る場合に沿岸の淺瀬に浸りて頭のみを露はし、濡れたる物を頂きて凌ぎ通せし人々もありしが、多くは長時間水中に在つて體温の下降を來し、睡魔頻りに襲ひ來りて、茫然自失、終に水底に隠れ行く者多かりしと聞く。かくして、翌朝に至り猛火漸く盡きたる頃、区内各川を一巡すれば、到る所の船舶悉く焼け沈みて、河面は死屍を以て埋まり、沿岸の道路も慘死者算を亂し、加ふるに餘燼の灼熱と鼻を衝く惡臭、鬼氣人に迫つて慄然足を凍ましむるのであつた。

幸にも斯かる慘禍を免れて避難したる人々は、前記の各所の外、遠く本村町の宮内省御料局貯材所、製鋼會社空地、海軍艦材置場、其他八方の木堀、荒地等を尋ねて露宿をなせしが、東方の各村落は人家甚だ少く、物資供給の力なきまゝ、火は免れたれ

ど飢ゆる者多く、爲に疲勞甚しくして半丁の歩行も叶はず、大地に横臥呻吟して救援を待てる者夥しきは、慘禍も酷烈に過ぎて、形容の文字に盡くのである。然れば、此の区内に於ける死傷の數は、未だ全く未詳なれども、市中罹災區の實地踏破に由つて慮ふに、各區に於ける最多數を算するに至る可きは信じて疑はざる所である。

近縣及び郡部の被害状況

震源地と發表されたる相模灘沖に近き、伊豆大島及び、七島の被害は甚だ輕微との事であるが、東海道線は鈴川驛邊より次第に災害の度を増し、沼津、三島より箱根へ掛かつて愈々激甚となり、トンネル崩壊し、列車顛覆し、機關車の海中へ突入せるあり、各鐵橋は殆ど破壊墜落し、富士紡小山工場は五棟全潰れとなり、工女一千名の慘死を出し、下曾我驛は全く土砂に埋没され、上下の線路十尺餘の高低を作れる程の暴狀にて、箱根、温泉地帯は殆ど全滅に歸し、小田原、にては恐れ多き大慘事出來、倒潰及び燒失戸數五千、死者二百五十と算せらる。今回の大震害は、相州厚木最も甚しく、全潰燒失千五百四十七戸、死者二十七名と數へられ、平塚、藤澤、鎌倉、館山、三浦半島の順序で、いづれも千餘戸の全つぶれと百餘の死者を出してゐる。

熱海、伊東、眞鶴町方面も殆ど全滅にて、伊東などは、海嘯の襲來によつて大船陸上五六丁の距離にまで打上げられ、家屋全滅死者百五十を算し、熱海は大旅館の全部震害及び海嘯を受けて潰滅し、地上各所に熱湯噴出す。眞鶴町一帯は、全く家の棟を見ざる程にて、三百餘戸悉く海嘯に洗はれ、最も慘狀を極む。湯ヶ原、修善寺等は、不思議に被害輕微にして、特筆すべき慘害を出ださざりしは僥倖であつた。

如何に今回の震災が酷烈なりしかは、房州野島崎の燈臺が根元より折れ碎け、館山が十八尺も隆起して、鷹の島、沖の島が浮上り、一島となりしにても、各地方震害の激甚なりし程度が想像されるのである。

北條、船方、保田、加知山、木更津等の沿海は、一ヶ所たりとも慘害を蒙らざる所なく、館山崩落し、浮島裂け、房總半島の西半面は、遺憾なく大慘禍に蹂躪され盡して了つた。

三浦半島は、是又被害の甚大なる部分にて全島は二尋乃至三尋の程度に於て隆起し三崎、七百戸、浦賀、千三百戸、葉山千百戸、逗子千戸、各々相應の死傷を出して、いづれも全滅し、一夜にして往昔の漁村に立返つた。取分け鎌倉は、貴賓の別荘多く、恐れ多き大不祥事をも引起し、全潰燒失六千五百戸を算し、死者五百人に及んでゐる。横須賀も、亦之に次ぎ、千三百戸を失ひ、五百餘人を殺し、關東有一の軍港所在地も

一面の瓦石と土砂とに化して終つた。
横濱市

焼失戸數 二萬五千、死者二萬四千人との調査であるが、現場視察の目には被害のまだより多數なるを思はしむるのである。

大震後、時を移さず數ヶ所よりの出火となり、全市の倒潰家屋を八方より火焔に包みて、析からの強烈なる旋風に煽り立て、殆ど寸刻を許さず燃え廣がり、市民は名状すべからざる混亂の中に、港内の船舶に免るゝもの、本牧方面に走るもの、いづれも命からんゝにて、家財は勿論、老若手も牽き敢へず、數多の壓死者を顧みる暇もあらで、只管猛火の包围を脱れんと押合揉合ひ、一方大岡附近や、神奈川臺、久保山、一本松水道裏、其他の安全地帯を目掛けて、群衆雪崩を打つて殺到する凄じさ――。

火は次第に猛烈を加へ、刑務所の囚人の開放となる頃、遂に、正金銀行、十五銀行三井物産、記念會館、交換局、市役所、青年會館其他の大建築も、火焔の襲撃に燒き潰され終つて、残れるは新築の中央職業紹介所及び移民事務所の二ヶ所となつた。

猛火は曉に至る迄暴れ狂ふて、遂に根岸、磯子、市營住宅、淺間町反町其他の、小部分を燃え残り鎮靜を見るに至つたが、一千名の巡查は行方不明となり、市外富士瓦斯紡績にては二千名の職工壓死し、地方裁判所にては、裁判長及び檢事正以下四十餘名の判檢事が、全部壓死したる如きは最も悲惨の極である。而して全市殆ど灰燼

と化したる中に、無數の死骸は算を亂して横はり、到る所に強烈なる惡臭を放つて、其の慘憺たる光景は、横濱開市以來曾て見ざるの大慘禍である。

戸塚は、千七百戸、程ヶ谷五十戸、神奈川四十戸、鶴見三十戸、等の潰滅を見、いづれも相應の死傷者を出してゐる。川崎は五百戸を失ひ、百八十人を損じてゐる。其他附近の部落皆全滅に近き被害を蒙り、遠く八王子市にては二十戸を失ひ、死傷は四人にて被害輕微なれど、甲武線與瀬驛上野原間のトンネル崩壊のため、數多の避難民は徒歩連絡にて關西落らの道程を執りつゝあり、急速輸送上に少からざる困難を忍びつゝあるのである。

震災は帝都より東北方一面へ去るに従つて減少、埼玉縣下の被害は全潰五千七百六十六戸、半壊四千二百三戸、死者二百十二人、重傷六百七十九と調査されたが、其内北足立郡が最も多く被害を受けたのである。

千葉市は千四百戸の潰滅に、二十三人の死者を出してゐるが、八王子、高崎などの各市と等しく、帝都の物資救援に全力を擧げてゐる。縣下は、房州、南總、方面の惨害の外は激しからず、市川に百五十戸を失ひ、二十人を葬り、船橋も又百餘戸の倒壊を出し、十餘名の死傷を算した。佐原、成田、方面は輕微の震害に止まつた。

府下の四郡（南葛飾、北豊島、豊多摩、荏原）は、いづれも震害を蒙らざる土地とては無けれど、火災に於ける被害は殆ど稀にして、百餘萬人の市内罹災者の、其大部

分の侵入を受けて、各地一様に物資の涸渇を告げ、農繁期に臨んで之等收容人員に對する物資補給に忙殺されつゝあるのである。

五〇

※ ※ ※ ※ ※

吾等市民の痛恨長く忘れ得ざる、大正十二年九月一日午前五十五分の大震、及び三日に渡る大火災は、西暦千六百六十六年に於ける、英京ロンドン、及び十一年前に於ける米國サンフランシスコの、其の五大震災とを數へて、世界の三大震災に擧げられたる、それ程に猛烈残酷を極めし大慘禍にして、旬日を経るも尙ほ強弱の震動、晝夜五六十回を算する程なるが、畏くも十二日に於て、

詔勅降下

となり、遷都説も霧散し、一般市民は、協力一致、以て奉公の大義に竭し、帝都復興の決意愈々堅きを得たるは眞に悦ぶ可く、通信、交通の機關も又復舊の端緒に進み居住居建築の議成りて、漸く市民の離散を防ぐに至りたる、之又喜ぶ可き事である。

◆はなしのたね

往昔より、大地震として記録に残れるは、

慶安三年六月拾日夜、

元祿十六年十一月二日午後十時頃

安政二年十月一日午後十一時頃

右の三回である。慶安より元祿は五十四年を経、元祿より安政は百五十二年、安政より六十九年目か今回の大震である。

安政の震災は、未だ生存者にて其の實況を知れる者は稀でない。記録に就て震路を窺ふに、依然最源地は伊豆半島の沖合らしく、其被害は小田原邊より北東に延び、相模灣の地帯も激甚にして、大江戸も又慘虐を極め、震動區域は信州路にまで及ぼしたるにて、損害の程度を調べて見ると、戸數や人口がまちまちに書かれてあるので、どれが正しいのやら判断に苦しむが、まづ

倒潰焼失家屋

五六萬軒

死者 傷者

約十萬人

と云ふ所であらう——。遭難者に就て當時の實況を聞いて見ると、震動は今回のより少しく安政當時の方が甚しかつたやうて、江戸近在に於ける土地の龜裂などの甚た凄まじかつた程度で、さう考へられるが、建築物の關係上、火災に於ける被害は今回の方が餘程猛烈を極めたやうである。安政のは、約十二時間位、即ち夜の十一時近く（亥の刻過ぎ）に、家屋の倒潰と同時に出火し、江戸中三十餘ヶ所の火の手となり、翌三日の正午頃まで燃えたので、然し兩國、永代、其他の市中の橋などは皆無事であつ

た。今回は深川区一區だけでも、六十ヶ所から橋だ焼け落ちてゐる。食糧の配給や、暴利取締りの模様は、大小の相違こそはあるが、皆それ／＼今と同じ氣持で行はれたもので、幕府の損害も偉大な數字を示したであらうと思はれる。今の砲兵工廠、即ち水戸の屋敷では此時、名儒藤田東湖などの壓死を出し、有名な邸内の百軒長屋も全滅してゐる。

斯云ふ異常な大變事の起つた時には、やはり常に變つた人間の動作や、珍奇な世相や、暗憺たる場面などが、到る所に於て生じるもので、今回のやうな大慘禍に遭遇なしたる記念として、今後、はなしのたねにもならうかと思はれる、くさ／＼の出來事を巻末に少し計り書集めて置かう。

◆からだの壁塗り

一日の夜更、逃げ遅れて八方の火に追ひつめられた或人、火の雨と火焰の煽りに耐へきれず、とある空地へ飛込んだが、折よく朝方の大雨でぬかるみの有つたを幸ひ、手當り次第にぬれ土を掴み、顔や手足の肌へやたらに塗り付け、丁度旋風に捲き上げられて落下して來た、座蒲團を拾つて水に浸し、それを頭から冠つて逃げ出した爲めどうやら火傷もせずに逃げをふせたさうである。

◆焼け毛の馬

罹災の後、車馬の不足は著しく、焼け残りの物も、多くは救濟用の物資配給に使役されてゐる其中に、馬身の大部分の毛が焦げてしまつて、尻尾は干大根をぶるさげたやうに、しんだだけ残つたやつを振りながら、それでも勢よく米俵などを輓いてゐる馬を見掛けたが、何となく氣の毒のやうな感じがした。

◆炎天の甘露

とでも後からは洒落られるが、大火の夜、群衆に揉みに揉まれて、へ／＼に疲れ、命から／＼に一つの橋を越えようと、舌は硬ばり息は切れ、のどは渴いて一步も動けずよろよろと往來のはたへ倒れて、ふと半潰れになつた家の中を覗けば、猛火空を焦がす赫々たる光に、氷店と覺しき器具の中に白い瓶が目についた、人なきまゝに這ひ込んで蓋を除くと、小さい竹のひしやくと共に甘露が半ば残されてあつた。奪ふやうにして飲むは、飲むはお蔭でひもじさまで幾分助かつた。

◆渴ける者はヘルでも飲む

とでも又洒落やうか、前に同じ夜、甘露に行當つて一息を入れたが、猛火の切迫に

長居はならず、未練を残して又しても群衆の中に投じ、上野を目掛けて、必死の突進、押す、踏む蹴る、突飛ばす、幾度か潰されるやうになつてそれでもどうやら息の根だけは止らずに、車坂まで押出されて來ると、八方からの人波が衝突して終つて、闊へた溝のやうに一步の動きも取れなくなつた。其儘立盡す事、一時間二時間、漸く死力を出して山下へ突抜けると、路傍へまたへたばつて終つた、そこへ逃げ迷つて來た女の二人連が、一個の薬罐を提げてゐて、その口からさうまさうに飲むのを見てはどうにも絶へられず、ふと傍らに投捨て、あつた自轉車のペルに目が付き、慌しくその片側を捻ぢ取つて、「すみませんが、これに一杯……」

石油臭い匂ひがしたが、夢中で立續け五七杯——、翌朝からひどい下痢になつた。

◆珍妙な挨拶

市内六十一ヶ所から一勢に燃えだした、あの大混亂では、友人や知己を顧みるの暇などは全くない、親子夫婦ですら、多くは放れ離れになつて終ふ。鎮火の後には、それ／＼行術不明が一時に案じ出されてくるが、さて遽には尋ねやうもない、たゞお互に案じ合つて、尻端折の足袋洗足、棒や竹杖を突張つて、混雜の往來を血眼になつてうろつく折から、廻り合せよくびつたり行當つた親友同志、

「よう……、生きてゐたか！」

無量の感に打たれて、見交す眼は自然と涙ぐままれるのであつた。

◆やはらかい腰掛

騒動の夜、漸くに重圍を脱し得たる一人、背負ひたる包の重さに疲れ果て、とある軒下に薄べりを蔽ふたる堆高きものあるを幸ひあわて、腰を下せばやわらかにして堪へなく、いぶかりて庭の端を捲り見れば、火焰の空明りに血みどりの顔二つ三つ——！、荷の重さも忘れて一目散に立退いたとか、これは壓死者の屍を片寄せてあつたのであらう。

◆死體の下積み

空地へ避難した其家の夫人が、逃げ惑ひて家族と離れ、うろ／＼する中に、強烈な旋風に捲込まれて顛倒し、其のまゝ氣絶してしまつたが、やゝあつて正氣付くと非常に重さを感じたので、必死になつて撥ねのけて見ると二三人死體が重なり合つてゐたのであつて、火は既に向側へ渡つてゐた、漸くにし這ひ出したが總身の疼痛で歩む事が出來ず、溝の端に倒れたまゝ、一夜を明したが、死體のお蔭で九死に一生を得た次第である。

禽獸とザコ寝

五六

十二階は八階以上を震ひ落し、千束町の火先愈々防ぎ難しと知るや、附近の花屋敷は、非常用の銃を以て、獅子、虎、豹、などの猛獸を射殺し、人慣れたる象、及び本年産れた子虎六匹、其他水禽等を、五重の塔の附近へ避難せしめた。次第に境内へ追ひ詰められた群衆は、之等の檻を取巻いて、觀世音の冥加を祈りながら、定めし生きた心地もなく一夜を過ごしたであらう。

お守りよりおみくじ

奇蹟的に火災を免れた、帝都名物の淺草寺觀世音は、役僧の話しに由ると、二日の午前二時頃には猛火の包圍で全く危険に陥つたが、其時分は約十餘萬の避難者が境内に充満してゐたさうで、鎮火してからも猶ほ居残れる者多く、今日では參詣に來る罹災者も次第に増加して来たが、火難盜難などのお守りは、焼け出されに必要が無いと思つてか、之等災難除の物は少しも賣れず、たゞ御籤場が大繁昌で、洋服も、印半天も耳隠しも、銀杏返しも、等しく寸前の運命に不安を懷きて、科學や智識の頼まれぬ世に、より偉大なる何ものにかすがらんとす氣分の發露にや、御籤の面をじつと見詰めながら、堂内を歩める人々の、面やつれも窺はれて漫ろに憐れである。

私は生きてゐるんでせうか

某商店の主人公、まづ家族を遠方へ避難せしめ、危機迫ると同時に、居残りし店員一同を伴ひて日本橋附近より用意の小舟に乗り移つたが、其時既に遅く、漕ぎ行く先々の河ぞへは火焰の占むる所となつて脱出する事が出來ず、集り來る多くの船と共に火の雨を浴び、火焰に炙られながら、夜更に及ぶ頃まで防ぎ闘つたが、遂に舷も焼け始めて顛覆するに至つた。主人は舟底にすがつて頭上より川水を浴び、猶ほ一時を休へる中、いつか氣が遠くなつて我を忘れて終つた。時過ぎて自から蘇生して見ると、岸寄りの淺瀬に半身を浸つてゐたので、確に命あるものとは思ひながら、已と手足を掴つて感覺を試みたりなどする折から、夜は白みたりと覺しく、濛々と立籠むる煙の中から人の足音が聞えたので、大聲に呼んで見ると、果して頭上の石垣のふちに人が答へた、

「私は生きてゐるんでせうか……、生きてゐるのなら、助けて下さい！」
と又大聲に怒鳴つたので、二三人の手に河岸へ引上げられ、此の世のものとなつたか。

何か食べさして頂戴な

五七

二日の晝頃、本所區の焼跡を巡視してゐると、全身泥だらけになつた、よく見ると十七八の女が、足袋洗足のまゝ、化物のやうな態をして、よろめきながら行當ると、微かな聲で、

「すみまん……何か食べさして頂戴な……、お腹が空いて、歩けないの……」

ときれつゝに哀訴する、餘りの憐れさに用意の食パンを二片れ與へたが、聞けば獨りはぐれて溝の中に浸つてゐて助かつたれど、一家中の行衛が知れないので、飲まず食はずに尋ね廻つてゐるんたとか、昨日の午前までは、花恥しき乙女だつたであらうが、こうなれば何にもかも無茶苦茶だ、一晩で乞食に生れ變つて終つた、餘りに慘虐だ。

行水濠とバリカン床

丸の廣廣場に出來た、焼トタンの大部落には、途方に暮れた幾萬の避難民が、同禍相憐むとでも云ふべく、皆んなヤケ半分に氣も荒くなつてゐるが、それでも憐同志などが忽ち親戚のやうに睦しくなり、女連は忽ち澤庵と梅千の交換などが始まる、男連は連立つて、眞晝間警視廳前の濠などへ入り、青臭い水で行水を使ふ、ずつと見渡す濠端に、素裸の人が多勢行水を使つてゐる光景は頗る奇觀だ。さうかと思ふと、理髮師の焼出されが、松の木の下などで、バリカン一挺の早業に、五分刈頭を製造してゐるが、金五錢也で、髭も剃らず、たゞ短くなつた頭を撫で、喜んで立去るのも可笑

味のある悲哀だ。

慰問の先着と暴利の筆頭

地方よりの慰問品も數多き中に、今度第一着に送達されたのは、岐阜縣からの慰問袋だ、先方が往年大震に遭遇して、非常な艱難を甜めたせいでも有るまいが、晒布の袋へぎつしりと詰つた日用品は、直に多くの罹災民に感謝の涙と共に受取られた。

然るに恥しい事には、同じ市民でありながら、下谷の上根岸に住む資産家の青物商が、どさくさ紛れに、澤庵一本一圓に賣附けて、直に檢擧されたのは、憎みて餘りあるのである。

惨中の慘事

一日の午前十一時五十五分、一列車が横須賀驛に到着すると、あの大震の突發となり、乗り合せた旅客百餘人と、析から軍港見學に來たつた静岡高等女學校の生徒若干名が教員等と共に悉く崩壞土砂の爲に埋没されて、應急の救援不可能なるまゝに打過ぎ、今は臭氣激しく、群蠅周圍に蟄集してゐるとは、惨中の慘事である。

身代り佛

柳橋のさる藝妓家の女主人が、抱へ藝妓及び女中を連れて、一日の夜淺草橋の公園へ避難したが、猛烈な火の雨に襲はれて一同狼狽の結果遂に離散して終つたか、危い所を救助隊の手に由つて命拾ひをした藝妓達が、翌朝兩國橋の上で顔を見合せると、肝心の女將が不足してゐるので、一同驚いて昨夜の避難場所へ立戻つて見れば、一面の死骸にてつきり焼死と思ひ込み、池袋から焼け跡へ自轉車で馳せ付けた旦那にそれと告げ怖々公園内の多くの死骸を見廻つて檢べると、確に女主人らしい黒焦けの死體が有つたので、更に大騒ぎとなり、翌朝旦那は五六人の男に棺桶を擔がせ、どこからか僧侶まで伴つて来て早速之を納め、焼け跡へ持つて来て一同と共に、形計りの回向をしてゐると、神樂坂の待合の主人に連れられて、此場へひよつこり立戻つた當の女將、一同呆れて言葉も出なかつたが、事の次第が分つて、嬉しいやら可笑しいやら、早速棺桶は元の場所へ逆戻りで、そつと其まゝ捨て置かれたとか。

◆汽車の曲乗り

六日から、日暮里、田端の兩驛から、東北及び信越線廻りの關西行列車が發車される事になつたが、待ちあぐんだ避難者の停滯は、どこの驛の構内にも充滿してゐて、その十分の一も乗れればこそ、強い者勝の突飛し合ひで、日々此混雜が繰返されてゐる、爲に田端から大宮まで八時間も（平常の八倍）費す始末で、列車の屋上、は勿論

窓へヒモを結んで腰掛けを作る者、石炭の上へ乗る者、機關車の横側へ縋る者、中には機關の先頭に四五人腰を掛けて涼しさうに巻煙草などを吹かして走り行くのを見かけた。

◆女形握飯に泣く

歌舞伎俳優の幹部所のさる女形が、一日に箱根から引上げて來たのには大出來だつたが、東海道線戸塚驛で、あの大地震に遭遇した。危く列車の顛覆を免れて、驛外へ飛出して見たが、連れは女計り、兎も角横濱迄行かうと、街道を教はつて上下三里の坂道へ掛り、一生に一度の勇氣を奮ひ、夕方になつて程ヶ谷まで辿り着いて見れば、此處も慘憺たる有様で、横濱の空も一面の黒煙になつてゐる、人に聞けばとても行かれぬとの答へに、おびへる女達を勵ましながら、驛のプラットホームへ割込まして貰つて、土地の多くの避難者の中で土下座の一夜、隣りに居合せた人から、握飯一つ貰つて食べた時は、嬉し涙がこぼれたと、後での話。

◆黄金王の死

全國に其名を知らぬ者もない、某銀行頭取の一家が、無慘にも震災の爲めに全滅して終つた。其焼跡を二日の朝、使用人の某が尋ねると、焼残りの材木の下から其名を

呼ぶ者があるので、近寄つて誰何すると、面は火傷で見ると影もないが、正しく主人の黄金王であるので、急ぎ荷車を求め来て、之に援け乗せ山の手の病院へ轆き込んだが枕と寝巻を所望するので、早速買求めて立歸つて見ると、ベッドの上は既に死體となつてゐた。

◆老元帥の鉢巻

番町に邸を持てる海軍の某元帥、幸に火災は免れたが、震害の爲に庭園の塀を悉く倒されてしまつたので、自ら尻端折の後鉢巻で、其の修理に金鎚を奮つて居られたが日本海の手戦よりも却つて此方がお骨をりかも知れんて……。

◆公爵巡公に借金す

或る避暑地から、急遽東上せんとしたる〇公爵、懐中無一物となりたる爲め、故郷へ無事の通信をなす能はで、止を得ず途中查公を捉へ事情を語り、金壹圓八拾錢也の時借りをして、土地の郵便局から長州の萩へ恙なき旨の打電をした。此の信用貸金、返済時の利息いくばく。

◆焼跡の食物店

第一に見掛けたのが水團の露店で、メリケン粉の塊りを五つ六つ、欠けドンブリの中へ泳がして、一杯四十錢で、然も刺青の二の腕をあらはして大威張りに、施行でもするかのやうな見幕で、飢へたる行人を招いてゐるのを、第一番に浅草公園裏で見たが、それから一日増しに種類も數も殖へて、梨、西瓜、ゆであづき、うどん、などが頻りに流行し始め、中には、商ひ慣れないらしい年増女が二人、飯櫃へ海苔壽司をこしらへて、一升壇に飲水を添えて路端に並べ、その後には肩をすばめて蹲まつてゐるのなどもあつた。

◆心頭を滅却すれば火も亦涼し

かつたか、どうだか知らぬが、或所の法華祈禱者は、猛火の包圍を物ともせず、たゞ一人祖師堂にたてこもつて讀經に餘念なく、何卒速に火災を鎮靜して多くの市民を救はれ給へ、然らば自身は犠牲となつて、このまゝ佛前に於て焼け死ぬとも恨みあるまじと、避難を促す近隣の人達には耳もかさず、一心不亂に祈禱を續けてゐたが、佛力も遂に及ばず、堂と共に修行者も焼死してしまつたとは、殊勝にも哀れ深い話である。

◆叔父に持ちたい人

水上署に拾收されたる溺死人の中に、金二萬圓を、現金と債券で懐中してゐた者も有

つたさうだが、引取手がないので火葬に附したとか、伯父さんに持ちたい人である。

◆ 俄か盲目

今度の大地震で避難の窮境に陥つた人々に、翌朝兩眼の明を失ひ、非常に困難をした者の多いのは、逆巻く毒煙の中を、長時間狼狽彷徨したり、地上に面を伏せるやうにして徹宵煙りと闘つたりして、絶えず砂塵は礫の如く兩眼を襲ひ來るを、無我夢中に臉を摩して耐え通した事や、又五六時間も水中に浸りて、腐敗せる泥水を浴びながら吹き捲くる煙りに夜通し虐げられてゐた事などか、重なる原因で、中には、河中に浸りをる中、アンモニヤの積込める河岸崩倒潰して、河中は一面藥液を以て蔽れたるを焦熱の苦しまぎれに、絶えず頭上より此水を注ぎ掛けたる爲め、眼中激烈なる炎症を起して、朝方河岸にはひ上つたれど、一步の先も見えず、漸く他の手に頼つて安全地帯へ導かれたる者もあつた。

地震 大東京炎上實記 終

大東京炎上
實記附録
後の聞き書

後の聞き書

(一)

小人窮すれば亂る、と昔の賢い伯父さんが叱つてゐるが、今度のやうな、生活上の大恐慌來となつては、罹災者として窮さざるものは稀であらう。半日一夜に何十萬の人々が悶え死に此の世から葬られたり、何百萬圓の貴重品を土藏に貯へて、常に他人に羨ましがられたり、己れは家作持だ、己は大商店の主人だ、と自ら氣分を傲らせ人も許してくれた身分の者も、慌てうろたへて命からたゞし、古單衣一枚の足袋はだしでいまの先まで、錦紗の御召だの羽二重の蒲團だのと、それたゞしに贅澤も並べ、自動車の來やうが一寸遅れたつては女中共を怒鳴りつけ、茶の加減が少しぬるかつたとて女房に濫い顔を見せてゐた連中も、草原や砂利の上でごろ寝の野宿、冷えますからどうぞお敷きなすつて……、なんて蓆一枚貸してくれ手もあらばこそ、へたに寝轉ん

でもあやうものなら、頭の上へ自転車を輓ひて通られるか、さなくば土足で身體を踏み躪られるか、どつちしても理窟は通らぬ怪我まうけ。やう／＼の事で、あくる日焼けトタンを拾ひ集め、作つた小屋がこひも雨露しのげずの月見天井、その中に這ひ廻つて、

「むすびを、取りにおいでなさい……………」

「水が來ましたよう……………」

なんて、メカボンで怒鳴り廻る救護員の聲を待ち焦れ、それでも女連の中に寶石の光つた指環の手で、茶色した玄米の握飯を頂いたり、撒水車の尻からはとばしる飲料水を、赤肌の焼けバケツに大事がつて運んで來る憐さ、昨日まで、日髪を結つて内風呂で磨き上げ今日はお芝居、あすは三越なんて、番附の廣告文を實行してゐた人々もあらうに斯うなつてはたまらない、忽ち玄米の消化不良で腸加答兒の、人目を忍ぶ野天の垂れ流しに、藪つ蚊にしたゝか刺されても泣くにも涙の出盡した有様。

人間も、それ／＼生活の安定を得てゐて、金鎖りなど胸や帯に巻き付けたり、エヂ

プト葉巻を指に挟んで燻らしながら、

「ねえ君、世の中つて云ふものは……………」

なんかと、得意がつてゐる時の面構へは、立派に最高等動物の威權を示して見えるが、さて大きなブッコワシに遭遇して、金鎖も、葉巻も、フロックも、何も彼も引ハイで大地にタ、き付けると、やつぱり、食ふと垂れるとの二た道に還つてしまふ。

學者も馬子も、貴顯も匹夫も、おんなじだ！ 今度二三日も、丸の内あたりで露宿した人は、つくづく、人間と云ふ動物の、素つ裸の本體を自身に於ても、他人に於ても、實驗する事が出來たであらうと思ふ。

文化なんて云ふものは、つまりなんだ、人間と云ふ物から、八方へ張り出された枝葉だ、花や實で飾られた時が、文化生活の歡樂だ。今度のやうに、大自然に突然巨大な鉈を振はれると、忽ちして一本の幹となつてしまふ。恰も今度の大恐慌は、白蟻の塔へ、石油をぶつ掛けて火を付けたやうなものだ。アッ！と云ふ間に、帝都建設に於ける幾百年の勢力が、煙りと消え灰 残つたのである。さあ、斯うなつて見ると人間生

存問題の根元は、食ふと垂れる事に由つて形作られてゐるものなる事が、バカにも分る。

四

して見ると、我々罹災民は、九月一日以前に於ける生活に於て、随分多くムダを見出す事も出来る。

と云つて、時を経れば樹木自から枝葉を張るに等しく、このムダなるものが、人の世の中と云ふものをこしらへて行くのだから、ノド元過ぎれば何とやら、いつかまた、元の蟻の塔が積み上げられるであらう………

(二)

何しろ、猿股一つで自轉車を走らせるもの、白晝路傍にしゃがんで尻を捲くるもの、天下御免の有様、それを咎てくれるやうな、親切も餘裕も持ち合はした人もなく、全く當時の幾日かは、何物も手の下しやうなき混乱振りであつた。

いくら昔の賢い伯父さんが叱つたからとて、此の場合小人諸子の亂れるのは無理も

ない。いや、亂れると云ふよりは、大なる試煉に遇つて、地金を出したんだ。

「あいつには、買ひかぶつた！ まさかあんな酷薄なやつではないと思つてゐたが、………」

などと、親戚や兄弟や、知己友人などを罵る聲も多く耳にしたが、それは、平常の交際と云ふおめんが壊れてしまつて、悪人の悪相があらはれたので、つまり其人々の地金なのだ。日頃は、手首に念佛の珠數などはめて、後生願ひのお仲間入りをしてゐたやうな男が、トタン小屋の内に大胡座で、

「なんだ、自轉車を盗まれた、馬鹿め！ 早く行つて、どこかでまごつくしてゐるやつのを搔拂つて來い、ついでに、バケツも二ツ三ツ、ちよろまかして來い」

と倅共をシカリ散らしてゐたのを聞いて、大店の主人公と知つてゐるだけに、より淺間しく感じられたが、又その命を受けて、倅共二三人の兄弟が、タチの悪い屑屋のやうな目付をして、あちこちと搔拂ひに歩るき廻つたのには、呆れざるを得なかつた。物騒さはこれか。

五

(三)

戒嚴令も實施せられ、各縣警察隊の應援も到着したれど、市内にて一日以來、續勤勞務に服せる巡查諸君は、殆ど疲勞困憊、皆家を忘れ、己を顧みず、必死に役目の責任に竭してあれば、五體全く泥に汚れ、たゞ腰の洋劍の光りに由つてその職を識別され得る程にて、避難地帯の警戒も十分ならざるに、各所に自治團起りて徹宵の警戒振り大に發揮され、壯漢小輩共に通行路を關して、その誰何嚴密を極め、

「オイ君、どこへ行く？」

「三河島へ歸ります」

「どこへ行つた」

「焼け跡へ」

「懷中を検べる！」

と三五人圍繞して、ふところを搔廻す、

「君、くすぐつたいよ、もういゝだらう、あゝくすぐつたい」

「がまんしろ、己達も醉狂でこんな事をするんぢあない、大勢の生命財産を保護のためだ」

と、禪まで引張りちらして、怪しからざる者と肯かれると、

「ヤあ、氣の毒だつた、氣を付けて行き給へ」

と淡泊に突放す。

これが連夜連續で、流石に血氣の青年達も、睡眠不足の疲勞に耐えず、中には、一人息子の身體を案じたる母親の、倅を休ませて自ら夜警の責任に代らんと、止むるをさかす裾をからげて詰所に到り、

「皆さん、今晚はお役にも立ちませんが、私が倅の代りに参りました……………」

「ヤア、〇〇さんのおつかさん、どうも御苦勞様……………」

と、五十婆さんを仲間にして、あつさりした挨拶も何が何やら……………」

其後日、戒嚴司令官の名を以て

軍隊及警察官ノ他、何人ニ由ラズ

通行人ヲ誰何檢閲スル事ヲ許サズ云々

と布告されて、夜遊び連、はつと一息。

(四)

竹槍、コン棒、其他種々の民衆武装も禁告されて、幾分夜警も穩になる頃には、避難地は勿論、焼跡も到る所に露天商ひが開始せられ、最初一杯四十錢と暴利たる水トなども、二十錢になり十錢になり遂に五錢になつて客を招き、ゆで小豆、氷水、今川焼、海苔壽司、汁粉、支那ソバ、うどん、おでん、ライスカレー、牛飯、何でもござれの一夜商賣が流行し、ウキスキー、ブラン、ブドウ酒、或は一合十五錢の地酒など、いづれも怪しげなる物品に、往來の飢ゑ渴きたる人々を待つ者無數にして、慘狀の繪葉書、地圖、小雜誌、其他日用品の數々之れに雜り、中には、鍬、シャベル、或はコリ、ツツラの如き物まで、要所々々に店を敷きて呼び賣りをなす狀、さながら東

京市中が、一勢に縁日商ひを催せるが如く、罹災者の窮境に陥つた者が、無い智慧を絞つて、女房子の爲に奔走せるのは憐れ深かけれど、災害もなき近郷より物資の欠乏に付け入つて、肥桶車に粗惡なる寄せ集め物を輓き來り、一舉に暴利を握らんと試むるやうな不心得な、連中も屢々見掛けられるのであつた。

其中に、寺の門番の思ひ付きにや、本所被服廠の焼跡に、線香、シキミ、切花などを運び日々慘死者の靈を弔ひにと集り來る群衆へ、十割二十割の利潤を加へて賣り廻り、亡靈成金とは變な名だが、一寸素人には企てられない、暴利令の後から舌を吐いた手際なヤリ口だつた。

それにしても今度の大慘禍來で、帝都の大部分の罹災民が、物質的には云ふ迄もなく、精神的のいろ／＼な煩悶苦慮も無量なるものが有る可きに、佛教徒には勿論、おシャベリの好きなキリスト教徒まで、市内のいづこにも、その坊主頭や、神經衰弱の顔を曝さず、平常の黃い聲の傳道も、猫撫で聲の説教も、さて物の役に立たばこそ、どこの本堂や、教會につぐなんで青くなつてゐる事やら——。尤も法華經を持して毎

日素洗足の汚れ衣で、鎌倉の辻に獅子吼した日蓮は、墓地へオシメを干して ふだん
布施の勘定はしてゐなかつたさうだ。

(五)

「えい、其中にや、どうにかなるだらうよ……」

と、仕方なしに投出した足のヤリ場もない、九尺一間なんて聞いた事のない、丸太柱
のトタン家根も、親子五人の金殿玉樓、それも二十四日の暴風雨には、焼原中の暴れ
放題で、出るにも入るにも、坐るにも立つにも、意地悪く吹き付ける雨風の防ぎ様も
なく、便利瓦もトタン板も、膏藥の剝れるやうにめくれ出して、頭からびしょぬれの
一枚十五銭で、やう／＼手に入れて来た空俵も浮く計り。さつと来る一となぐれに、
主人、危く倒れんとす丸太柱を力任せに支えて、妻君を顧みれば、うろ／＼したる
妻君、それと心得て、主人の尻を後からうんと押す、

「ばかッ、己の尻ぢあない、そつちの柱を突張れ」

に、年嵩の娘思はず吹き出す、一同笑ふ拍子に力がゆるんで、ガチャ／＼、メリ／＼。

(六)

陰曆十五夜は好い月だった。世が世なら、愛盃を擧げて詩興を恣にし、五更猶ほ眠
らざるの夜であるが、板裏草履を疲れ足に引摺つて、竹杖を突立てながら王子電車の
線路を辿つてゐるんぢあ、人間界の斯の有様を、吾れ關せず焉と、涼しい面に照り返
してゐる望月が、寧ろ憎々しいやうな感じで仰がれる。

避難民か否か、爪弾きの音が、と、ある棟割長家から漏れたが、忽ち近隣より人々外
に現はれ、

「何でえ、三味線などひきやあがつて、ふざけたマネをするな、ゆふべの水騒ぎを忘
れやあがつたのか……」

と怒鳴られて、バツタリ、音絶えてしまった。これと同じやうな、むしやくしやと
昂奮した男連が牛込の神樂坂通りで、満艦飾の盛装を疑らした二名の齡若き婦人に出

合ひ、

「もしく、一寸お待ちなさい……、あなた方は、少しの教育もない人達かは知れませんが、さても無情な心掛けですわ……、よくまあ此のみじめな東京市中の往來を、そんなけばくしい身なりをして歩るけますわ……、人間の心持ちがあるのなら、以後はお止めなさい、氣の早い人達にぶんなぐられるといけませんから、一寸注意してあげます……」

忽ち行手を五人七人の人垣に妨げられた女二名、一言もなく、赤面黙謝して逃ぐるが如く立去つた。痛快なやうで、氣の毒だつた。

後の聞き書（をばり）

購讀者諸賢に告ぐ

此冊子は、巻頭に附記せし如き、印刷大困難の場合に、不眠不休の努力を以て、率先出版の事を遂げたるにて、著者の苦心もまた容易なるものに非ず、殆ど懸命の危険を侵し、日々に實地踏査の上著者獨特の觀察眼を以て之を記述なせるにて、切り抜き、寄せ書き等の、無責任なる雜書と内容を異にせるは、開卷一讀自から讀者の首肯を得る所ならんも、爰に一言を附して、以て御賢察を乞ふ次第である。

大正十二年九月下旬

東 文 社 謹 言

工125-4

大正十二年九月廿五月初版印刷
大正十二年九月廿八日初版發行
大正十二年十月廿六日再版發行

增補 地震大火
改訂 大東京炎上實記
定價 金五十錢

著者

倉本清太郎

發行人

東京府下北豊島郡下尾久町百九十六番地
笹井東一

印刷者

東京市本郷區動坂町三一七番地
小國直太郎

印刷所

東京市本郷區動坂町三一七番地
明正舎

不許複製
者者檢印



發行所

東京府下北豊島郡下尾久町百九十六番地

東文社

終